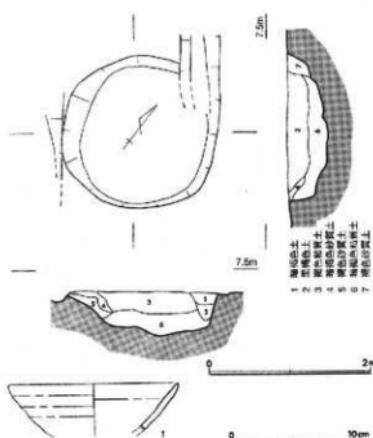


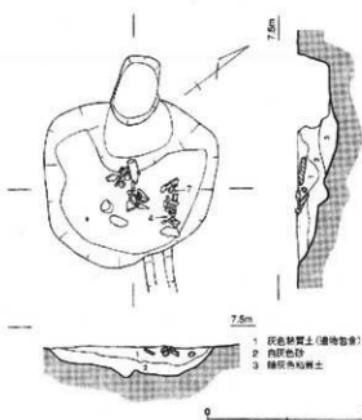
が、平面隅丸方形の掘方を持つ。規模は $3.96 \times 4$ m以上、深さ1m以上で、掘方の東側には壁にかかるように木組みの井側を検出した。井側は縦板組隅柱横棟型である。

堆積状況を見ると、4層下面で掘り返しが行われたよう、井側もこれに対応するように上部を欠損している。井戸の廃棄時に擾乱されたと考えられる。井側の下部には井筒が存在した可能性もあるが、湧水のため確認できなかった。

遺物は備前焼の壺とすり鉢がある（第97図-8・9）。8は丸味のある玉縁の口縁部でやや内傾する。14世紀後半～15世紀代のものである。この他、糸切りの土師器小片が多数出土した。



第99図 SK54、出土遺物実測図 (1:80、遺物1:4)



第100図 SK55実測図 (1:80)

#### SE14 (第98図)

SE13の北側に位置し、SK108を切り込んでつくられていた。掘方は平面凹形で、東側に狭い段取り付くもので、径1.8m、深さ1.2mを測る。西側には井側の石材が散乱し、自然石と五輪塔の軸用材で構成されていたようである。

2～4層がSE14の堆積土であるが、4層下で石材を検出していることから、いずれも擾乱後の堆積と考えられる。

軸用材は、空風輪、火輪、水輪がそれぞれ1点（1～3）と地輪が4点（4～7）で、4には梵字が、5には文字と文字が刻まれていた。文字は判読を試みたが、風化と上下が剥離しているため不明である。石材は1・4・6が凝灰岩、2・3・7が火山礫凝灰岩、5がシルト質砂岩である。遺物は（第97図）、10の手捏土器、11の在地産と見られる陶器の鉢がある。11は内面にも刷毛目状の条痕が見られ、すり鉢か。この他、鎬蓮弁文の青磁小片が出土している。

#### SE16 (第66図)

調査区西側に位置し、SD59を切り込んでつくられている。当初は検出できなかったが、溝の完掘後に落ち込みが確認されたもので、石材残片が出土したことから井戸とした。全容は不明だが、深さ1.6mを測る。

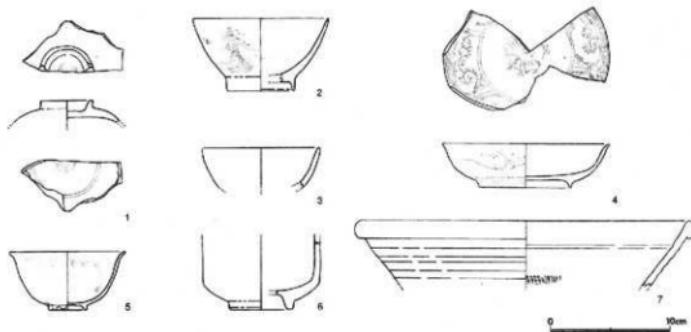
遺物は（第97図）は、12・14が前述の11と類似の陶器のすり鉢である。13は須恵器の鉢で、内面に条痕が認められ、外面には重ね焼きの痕跡がある。この他、糸切り底の土師器小片がある。

#### 4. 土坑 (第98~127図)

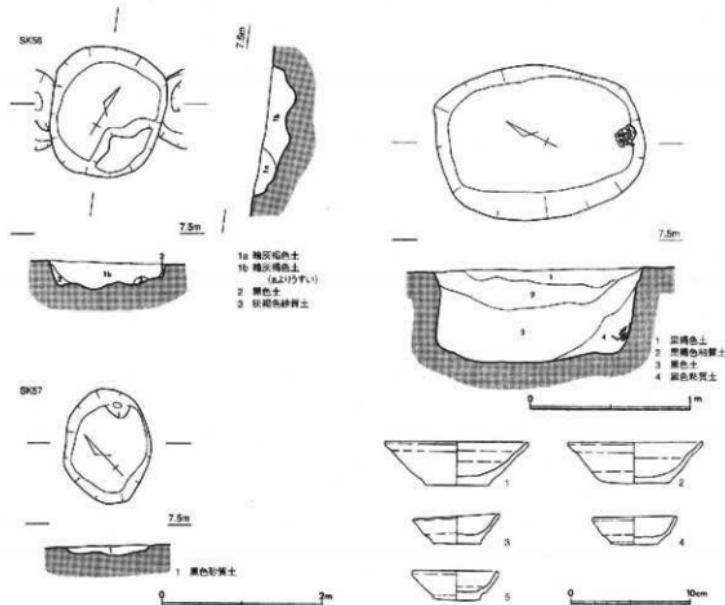
##### SK108 (第98図)

平面円形で、径2.2m、深さ1m前後で、中央部は2段掘り状に深くなる。底面レベルは切り合  
うSE14よりも深い。5・6層上面で井戸に切られている。

出土遺物は糸切り底の土師器小片が若干出土しているにすぎない。



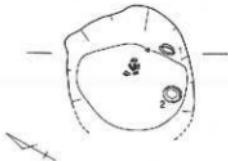
第101図 SK55出土遺物実測図 (1:4)



第102図 SK56・57実測図 (1:60)

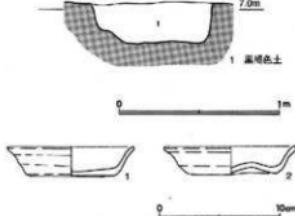
第103図 SK58、出土遺物実測図 (1:30, 略1:4)

#### SK 54 (第99図)



調査区中央に位置する、径195cm、深さ55cmの円形土坑である。北側は中世～近世と考えられる小溝に切られる。褐色系の粘質土が堆積していた。性格は不明で、遺物は1の糸切りの土師器の他に、須恵器小片が出土している。

#### SK 55 (第100図)



S B 2 3 と重複する位置にある平面不整円形の土坑で、径210cm、深さ35～50cmを測る。灰色系の粘質土と砂が互層に堆積し、最上層から枝切れと共に陶磁器が出土した。完形品も無いことから、19世紀代の廃棄土坑と考えられる。

遺物は(第101図)近世陶磁器で、5以外は肥前系である。1は18世紀後半の青磁染付の碗蓋で、五弁花のコニニャク印判が見られる。2は広東碗で19世紀初頭、3は波佐見産の碗で18世紀代のものである。4は18世紀前半の端反りの皿で、高台内に「大明年製」の銘が見られる。5は関西系の陶器碗で口縁が端反りになる。18世紀～19世紀代と考えられる。6は内面無釉の陶器で香炉か瓶の類で、17世紀後半～18世紀前半の所産と見られる。7は玉縁口縁の陶器すり鉢で、18世紀後半か。

第104図 SK59、出土遺物実測図 (1:30、縮尺1:4)

#### SK 56 (第102図)

S B 0 5 を切ってつくられた平面隅丸方形の土坑で、長軸長163cm、短軸長136cm、深さ35cmである。暗灰褐色の土砂が1層堆積し、遺物は土師器小片が出土しているが、図示できなかつた。

#### SK 57 (第102図)

S B 0 4 を切ってつくられた平面梢円形の深い土坑で、長軸長143cm、短軸長100.5cm、深さ10.3cmを測る。出土遺物は無い。

#### SK 58 (第103図)

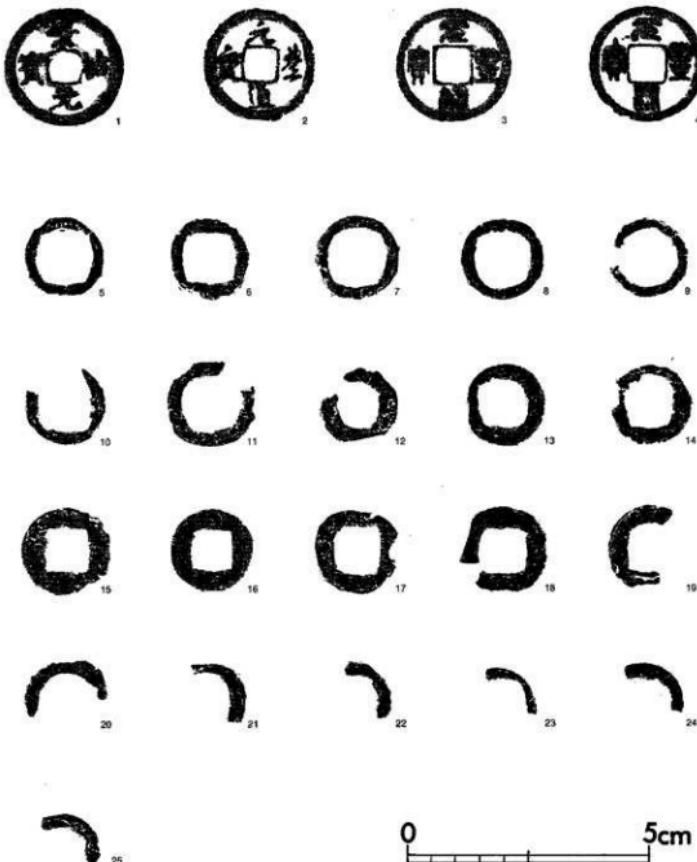
SK 5 7 の西側に位置する、SD 2 8 を切り込んでつくった土坑墓と考えられる。平面は胴張隅丸長方形で、長軸長260cm、短軸長193cm、深さ115cmである。土坑内には黒褐色系の土砂がレンズ状に堆積し、南側小口の浮いた位置から糸切り底の土師器が5個体出土した。土師器は割れているものの、正位で積み重ねた状態であったことが窺える。

1・2は壺で、底径の大小の差はあるが、口縁がやや内弯するものである。3～5は小皿で、口縁が比較的立つもので、直線的な3と内弯する4・5に分けられる。いずれも局部に差異があるものの概して14世紀後半～15世紀前半代のものと考えられる。

第4表 SK59出土錢貨計測表

No.	錢名	折銅半	外徑(A)/錢體(B)	内徑(C)/內徑(D)	錢厚	量H
1	景祐元寶	1034	24.90	24.75	19.25	19.15
2	元豐通寶	1078	(23.80)	—	18.45	18.40
3	元豐通寶	1078	23.95	24.30	19.15	19.90
4	元豐通寶	1078	23.95	23.90	19.80	19.40
5	無文錢	16.5	鈕丸方	11.15 0.37	B-II-3	16 無文錢
6	無文錢	17.0	鈕丸方	9.90 0.41	B-I-3	17 無文錢
7	無文錢	17.3	鈕丸方	11.65 0.35	B-I-3	18 無文錢
8	無文錢	16.55	鈕丸方	11.25 0.30	B-II-3	19 無文錢
9	無文錢	16.55	円	11.70 0.21	B-I-3	20 無文錢
10	無文錢	16.35	鈕丸方	9.60 0.28	B-II-3	21 無文錢
11	無文錢	17.60	円	11.20 0.34	B-I-3	22 無文錢
12	無文錢	16.40	円	9.00 0.35	B-II-3	23 無文錢
13	無文錢	17.05	鈕丸方	9.20 0.30	B-II-3	24 無文錢
14	無文錢	16.60	鈕丸方	8.90 0.32	B-II-3	25 無文錢
15	無文錢	18.45	圓角	8.75 0.53	B-I-2	—

(単位: mm・g)

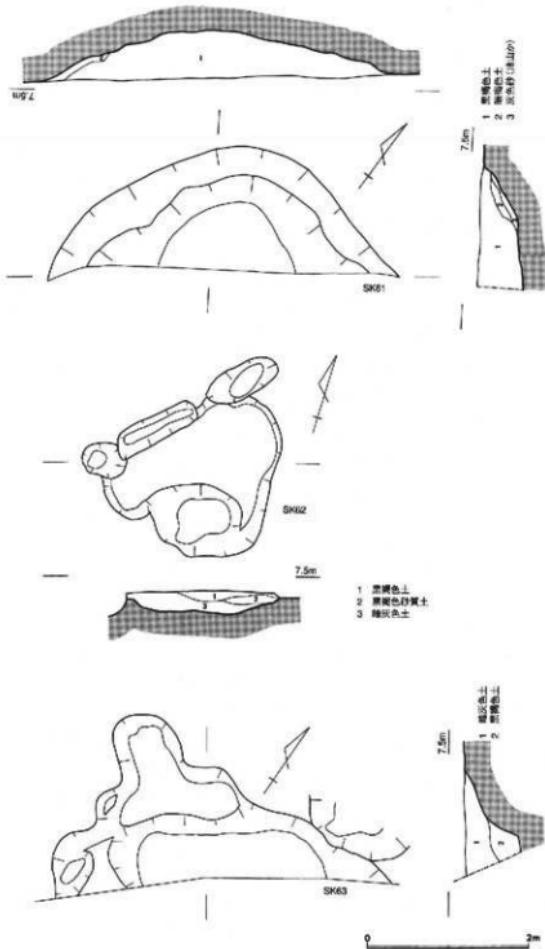


第105図 SK59出土錢貨拓影 (1:1)

### SK59 (第104図)

SD29の東端部を切り込む円形土坑で、墓と考えられる。掘方は西側が不明瞭だが、径78cm、深さ25cm程で上部はかなり削平されていると推測される。埋土は黒褐色土の1層だけで、底面から銭貨・糸切り底の土師器が出土した。無文銭を墓に埋納した県内の例としては、出雲市姫原西遺跡<sup>17)</sup>、仁摩町坂瀬遺跡<sup>18)</sup>、松江市黒田畦遺跡<sup>19)</sup>が知られる。

土師器は器高が低く、口縁は外反してあまり開かないもので、17世紀前半頃のものと考えられる。出土銭貨（第105図）の詳細については第4表に示した<sup>20)</sup>。



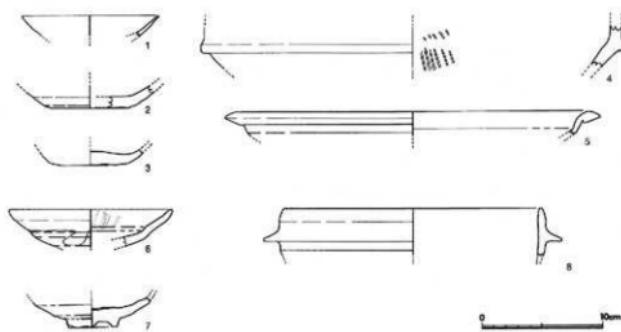
第106図 SK61~63実測図 (1:60)

### SK61 (第106図)

調査区南東壁にかかる土坑で、全容は不明である。現状の規模は東西4.4m、南北1.55m、深さ0.55mで、黒褐色土が厚く堆積していた。遺物は第107図に示したもので、1~3は糸切り底の土師器である。4は備前のすり鉢である。この他に、須恵器小片が若干量出土している。

### SK62 (第106図)

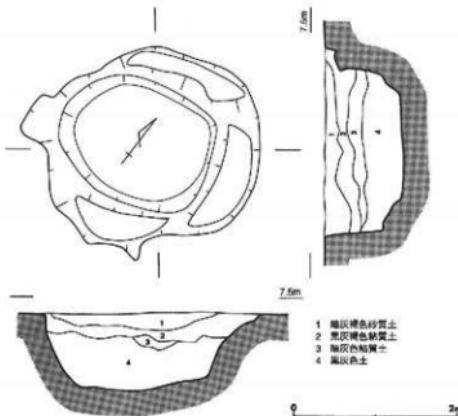
SK61の西側に位置し、近世の柱穴に擾乱されていた。長軸長230cm、短軸長100cm、深さ27cm程の陽丸長方形の深い土坑である。遺物は（第107図）、6の鉄絵を施した胎土目唐津皿が出土したほか、須恵器の小片もある。



第107図 SK61～63出土遺物実測図 (1:4、1～5はSK61、6はSK62、7・8はSK63)

#### SK63 (第106図)

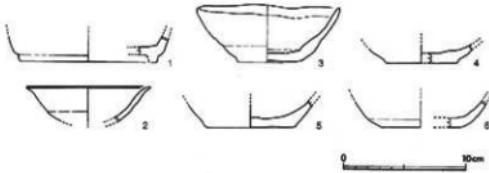
SK62に隣接する平面不整形の土坑である。現状で東西4.2m、南北2.1m、深さ0.7mを測るが、西側は複数の遺構が切り合っており、正確な規模は不明である。暗灰色の埋土から、107図-7・8が出土している。7は李朝の陶器碗で、8は瓦質の釜である。



#### SK67 (第108図)

調査区中央の南寄りに位置する平面円形の土坑で、長径2.9m、短径2.3m、深さ0.95mである。規模が大きく、比較的に深いことから井戸とも考えられるが、井筒等の部材が検出されなかつたことや埋土が水平に堆積する状況から、土坑とした。

遺物は、1が須恵器、2が口禿白磁、3～6が糸切り底の土器である。1以外は概ね13世紀代のもので、遺構の年代を示すと考えられる。



第108図 SK67、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

#### SK71 (第109図)

SK67の西側に隣接する平面円形の土坑である。規模は、上端で長径163cm、短径148cm、深さ74cm前後である。掘方の北側はスロープ状に下って底面に至る。堆積土の1・2層からはまと

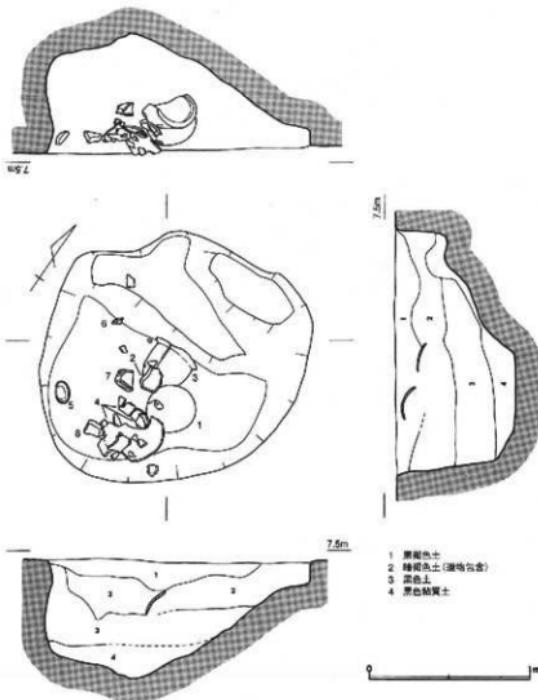
まつて土師器が出土し、3層以下ではこのような状況は認められなかつた。出土状況から、これらの遺物は3層上面まで堆積した後、もしくは、3層を掘り返して破棄されたものと考えられる。

出土遺物は（第110図）、1～6が土師器で、7は土製支脚、8が砾石である。1は壺で、底部の内面には炭化物が付着している。煮沸痕と考えられる。2はやや下彫れし器高の高くなない中形の壺で、体部の内面下半に部分的に炭化物が付着している。3は瓶で、口縁部は「く」字状に屈曲する。4は復元口径口径が56cmにも達する大形の壺で、器高が最大径に比して低く、器形的には鍋に近いものである。

5・6は壺である。5は内面にも手持ちへら削りを施し、なでを加える。6は内外面赤彩で、内窓した後、口縁部はわずかに外傾する。

土師器の年代観は定まっておらず時期は不明瞭だが、これまでの出土例では6世紀後半～末葉の須恵器と共伴しているので<sup>(2)</sup>、当遺構もそうした時期のものと考えられる。

前述したように、遺物の廃棄が行われたのは掘方が半分以上埋没した段階で、遺構の当初の性格とは異なっていると考えられる。掘方の規模からは井戸の可能性も考えられるが、堆積状況や検出物でそれを裏付けるものは無い。



第109図 SK71実測図 (1:30)

#### SK72(第111図)

SK67の東に位置する、平面不整円形の土坑で、規模は長径180cm、短径150cm、深さ65cmを測る。SD50を切るかたちで検出した。

掘方の南側にはテラスがつくられ、その上面から深部にかけて10～30cm大の自然石が検出された。また、これらに混ざるように青磁が1点出土した。

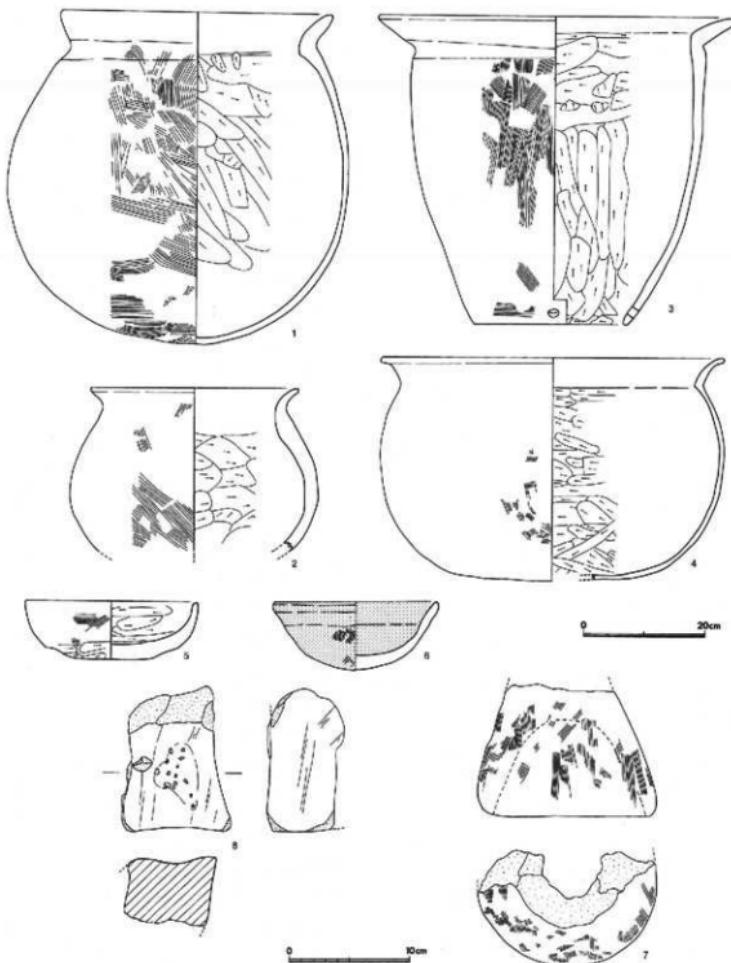
石は、底面から浮いた状態で、混入したものでなければ元位置ではないと考えられる。

堆積状況は単純で、黒褐色土と暗褐

色土の2層が自然堆積したような状況で、石や遺物は2層上面より上位で検出した。

井戸跡に特有な、立ち上がりの見られる堆積は観察されなかったが、比較的大形の石材が検出されていることから井戸であった可能性が高い。1層下面が廃棄時の擾乱面とすれば石の出土状況と矛盾しないといえる。

出土した青磁は、削り出しの鍋蓮弁文を有す龍泉窯の小碗で口縁は端反りになる。胎土は精緻で、釉は青緑色で厚い。骨付は露胎で赤く発色し、破面には漆雜ざの痕跡が認められる。13世紀代の



第110図 SK71出土遺物実測図 (1:4, 4は1:8)

所産である。この他、土師器小片が出土している。

#### SK74 (第112図)

SK67の西側に隣接する平面長円形の土坑で、規模は上端で長径3.5m、短径3m、深さ1.2mを測る。掘方の中程には、北側の一部を除いて幅の狭いテラスが巡り2段掘り状になる。

土坑からは大量の土師器が出土しており、その出土状況は平面的にはあたかも破碎してまき散らしたかのようであるが、検出面から底面に至るまで出土していることから、土坑が埋没する過程で継続的に混入したかのようであった。ただし、遺物の遺存状態を出土位置で比較すると、上層出土のものは小片が多いのに対し、5層から出土したものは相対的に残りの良いものが多い傾向が認められ、遺物が土坑内に含まれるに際しては別の要因が働いた可能性がある。

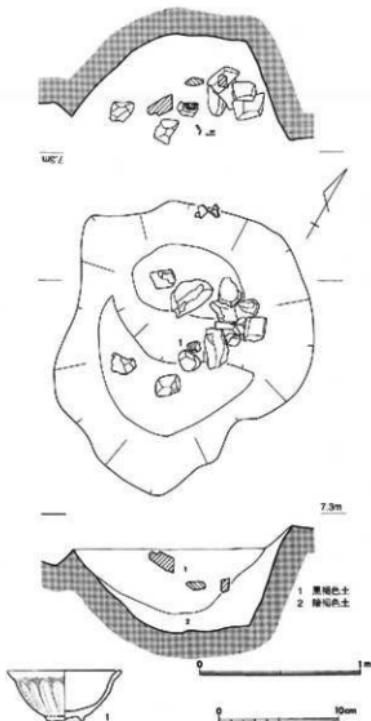
堆積状況を見ると、2層下面が不自然に切り込んでいることから、再掘削面と考えられる。4・5層は湧水のため詳細に観察することができなかった。また、底面中央部は砂を検出したので地山と判断したが、黒褐色の粘質土もbrook状に混在していたことから掘方が下方に続く可能性も考えられる。

出土土師器は、糸切り底の壺と小皿である。底部資料数から出土した個体数は壺・小皿あわせて150個体以上にものぼり、この内から代表的なものを選別して掲載した。

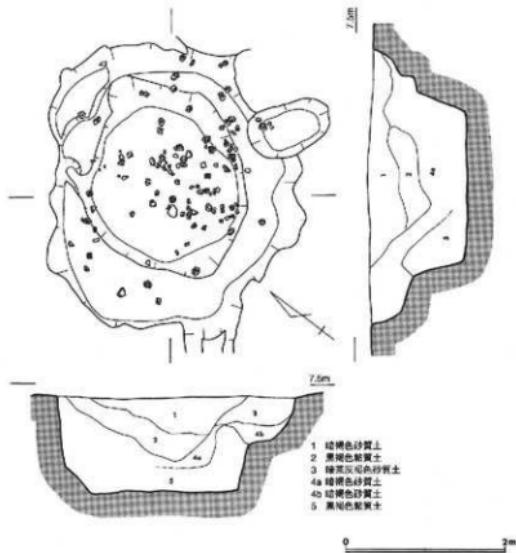
壺については、1～3は体部がやや内湾し、口縁が肥厚した後に鋭くなるものである。4～6もやや内湾するが、器壁が薄く、口縁部のアクセントも少ないものである。7・8は4～6と大きな違いはないが口縁端部が鋭いものである。9・10は4～6よりもやや厚手なものである。11・12は底部から外反気味に立ち上がり、口縁部が内湾するするものである。

皿は、13・14が器高が高く、内湾するもので、15・16は器高があまり高くなく、口縁部がわずかに内湾するものである。17・18は底部が厚く、口縁部がやや外反するもので、19～24は器高が低く、全体に丸味を帯びたものである。25～30は口縁部が直立又は外傾して面をつくりだすもの、31は器高が低く口縁部が直線的で短いものである。

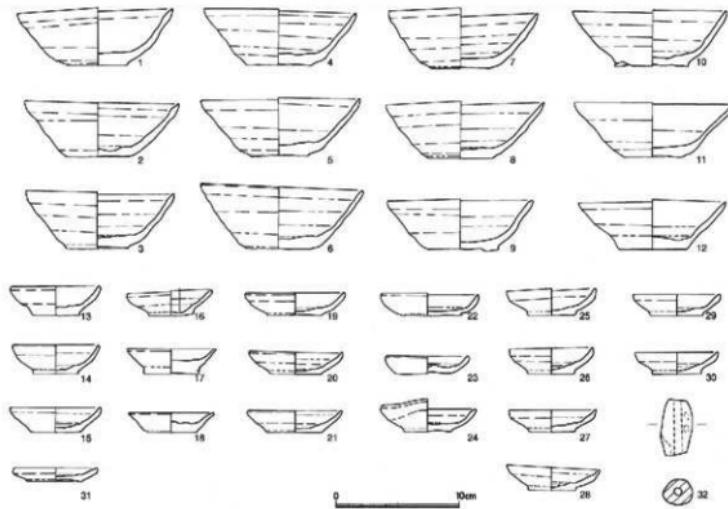
壺の形態には、細部に多様性が認められるものの、概ね13世紀後半～14世紀前半代のも



第111図 SK72、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)



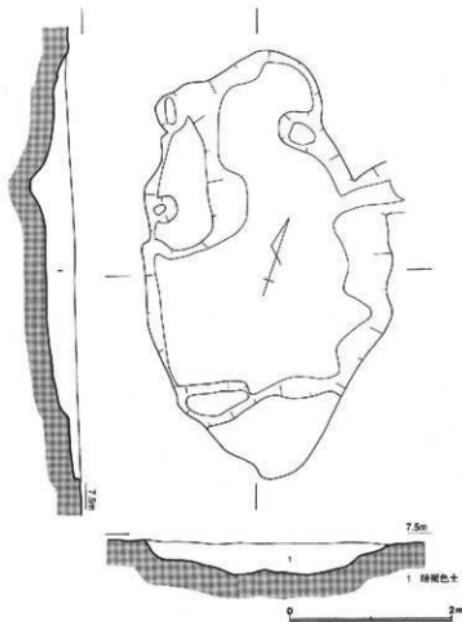
第112図 SK74実測図 (1:60)



第113図 SK74出土遺物実測図 (1:4)

のである。一方、小皿については25~30のように13世紀後半~14世紀前半を中心としながらも15世紀代と考えられる13・14や、どの時期に属するものか明確でない17~24があるなど、遺物の年代には幅があると考えられる。この他に、32の管状土錐や、図示できなかったが、須恵器の小片が出土している。

掘方内から井戸の部材などは検出してないことから土坑としたが、掘方が大規模で、擾乱面が認められること等から井戸であった可能性が高い。仮に井戸であった場合、非掲載品も含めると、時期の判別が可能なものは13世紀後半~14世紀前半の資料が最多のことから、この時期に擾乱後廃棄されたものと考えられ、17~24は井戸の構築時に含まれたとも想定できる。

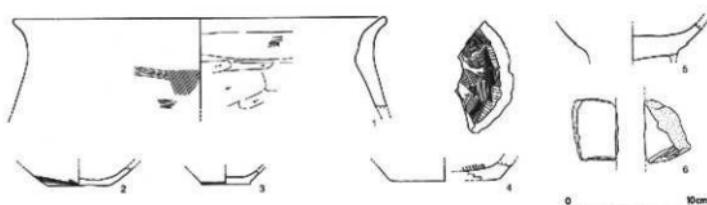


第114図 SK75実測図 (1:60)

#### SK75 (第114図)

SK74の西側に隣接するもので、複数の柱穴や土坑に切られて不整梢円形を呈す浅い土坑である。規模は上端で長径5.3m、短径3.0m、深さ35cmである。

埋土は暗褐色土1層で、第115図に示す遺物が出土している。1は土師器の壺である。2・3は糸切り底の土師器で、4は須恵質のすり鉢で青灰色を呈す。底部内面は横方向に、体部には縦方向におろし目を設ける。5は淡青緑色の輸入青磁の碗で、福建系のものと考えられる。高台内は蛇の目に輪が剥ぎ取られる。16世紀代のものであろう。6は砥石で、2面に擦痕が認められる。



第115図 SK75出土遺物実測図 (1:4)

### SK79 (第116図)

SK72の北東側に位置する浅い土坑で、西側はSD39と切り合っていたため、平面的には掘方は検出できなかった。また、南側は他の柱穴によって擾乱を受ける。規模は、長軸長4m以上、短軸長3.4mを測る。

土坑内には黒褐色系の土砂がレンズ状に堆積しており、1層から遺物が出土している。なお、3層はSD39の埋土で、これを切っていることが分かる。

出土遺物は、1・2が糸切り底の土師器で、3が輸入青磁碗である。1は壺で部体から口縁にかけて直線的に大きく開くもので、15世紀代のものであろう。2は皿で、静止糸切りである。口縁の開きが少なく、弱く外反するもので17世紀以降のものである。3は上田B-IV類の線刻蓮弁文で、15世紀末~16世紀初頭頃のものである。この他に土師器小片が出土している。

### SK84 (第117図)

SK72の南側に位置する平面長円形の土坑で、規模は上端で長径300cm、短径230cm、深さ95cmを測る。土坑内には、黒褐色土と暗褐色土が堆積するが、2層下面是3層を切り込んでいるとも見られる。規模的には井戸の可能性もあるが、堆積状況や井戸枠の構築材等が出土していないことから性格は明らかでない。

出土遺物は無いが、SD50

を切り込んでつくられていることから、古墳時代中期後半以降のものと考えられる。

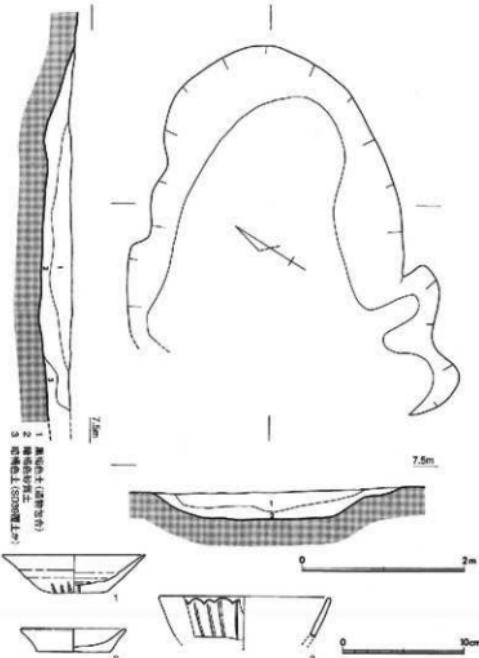
### SK85 (第117図)

調査区中央部やや南よりのところに位置する、平面橢円形の浅い土坑で、規模は上端で長径220cm、短径、170cm、深さ55cmを測る。土坑内には、褐色系の土砂がレンズ状に堆積し、出土遺物は無い。

### SK91 (第118図)

調査区南端に位置する土坑で、南側は壁にかかるため全容は明らかでないが、現状の規模は、上端で南北135cm、東西240cm、深さ40cmの土坑である。

遺物は図示できなかったが、糸切り底の土師器が若干量出土している。粘土ブロックを多く含



第116図 SK79、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

む暗灰褐色系の土砂が堆積していることから、近世以降のものと考えられる。

#### SK92 (第118図)

S B 1 7 の西側に位置する平面不整隅丸長方形の土坑で、規模は上端で長軸長173cm、短軸長110cm、深さ40cmである。遺物は図示できるものはないが、糸切り底の土師器が出土している。

#### SK93 (第118図)

調査区南側に位置する平面不整円形の土坑で、東側は別の柱穴に切られる。掘方の南側に最深部があり、柱穴の可能性もある。規模は長径135cm、短径130cmで、深さは75cmである。遺物は糸切り底の土師器、備前焼と見られるすり鉢等の小片が出土しているが、時期は不明である。

#### SK94 (第118図)

SK92 の東側に位置する不整円形の上坑で、上端の規模は長径195cm、短径190cmで、深さは90cmである。掘方の北側と東側には狭いテラスが取り付き、中央部に最深部がある。

暗灰褐色系の土砂が基本的には水平堆積しており、テラスは7層の上面にほぼ対応する。掘り返しによるとも考えられるが、底面確認後も湧水が無く、現状では井戸とは考えにくい。

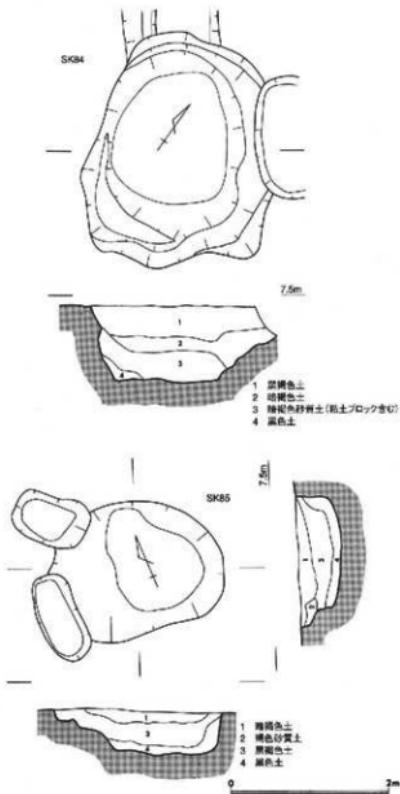
遺物の1・2はともに輸入青磁で、1は緑灰色の細線蓮弁文碗で上田B-I-V類に該当し、15世紀末~16世紀初頭の所産である。2は青緑灰色の龍泉窯系の小碗で13~14世紀代のものであろう。この他、糸切り底の土師器小片も多数出土している。

#### SK95 (第118図)

SK92 の北側に位置する平面不整隅丸方形の浅い土坑で、上端の規模は長軸長130cm、短軸長110cmで、深さ25cmを測る。

埋土は粘土が多く含まれる暗灰色土で、近世以降と考えられる。

遺物として、3の青花皿があり、高台



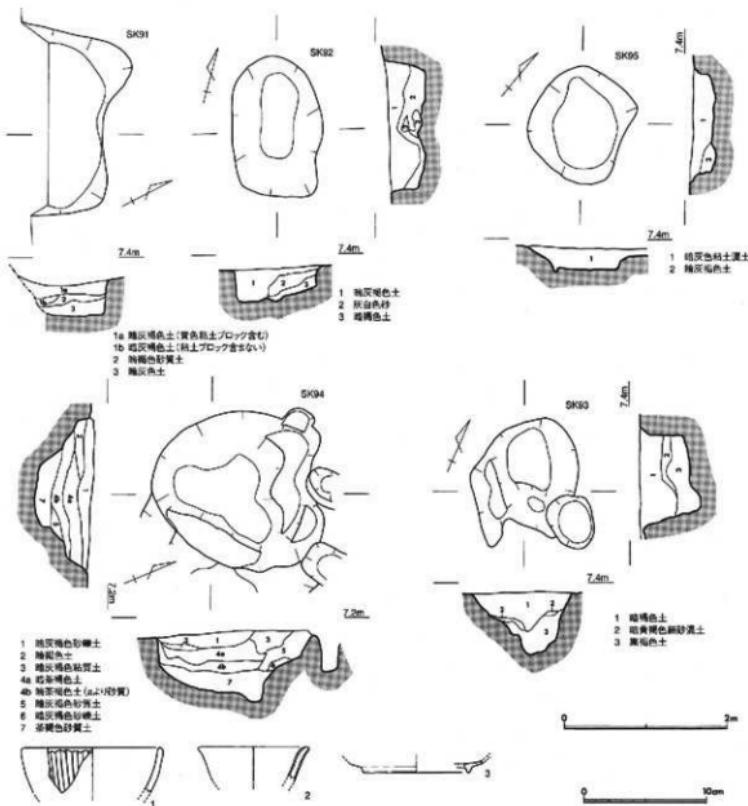
第117図 SK84・85実測図 (1:60)

内には放射状のカンナ痕が認められる。16世紀後半代の景德鎮産であろう。

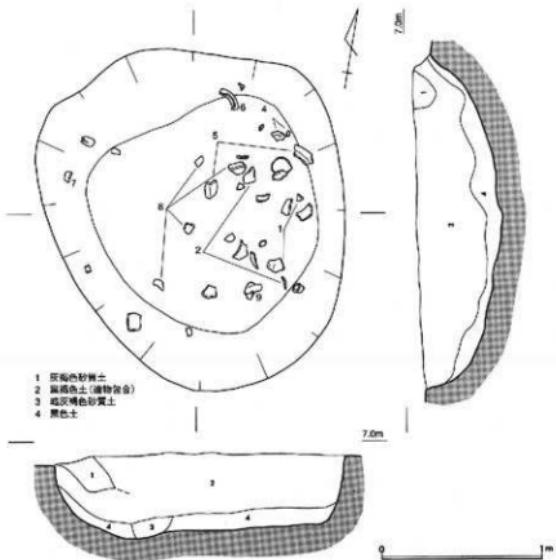
### SK99 (第119図)

調査区北側のS B 10に隣り合う平面不整円形の土坑で、上端の規模は長径220cm、短径180cmで、深さは50cmである。土坑内には黒褐色系の土砂が厚く堆積し、2層からは遺物が散乱した状態で検出された。

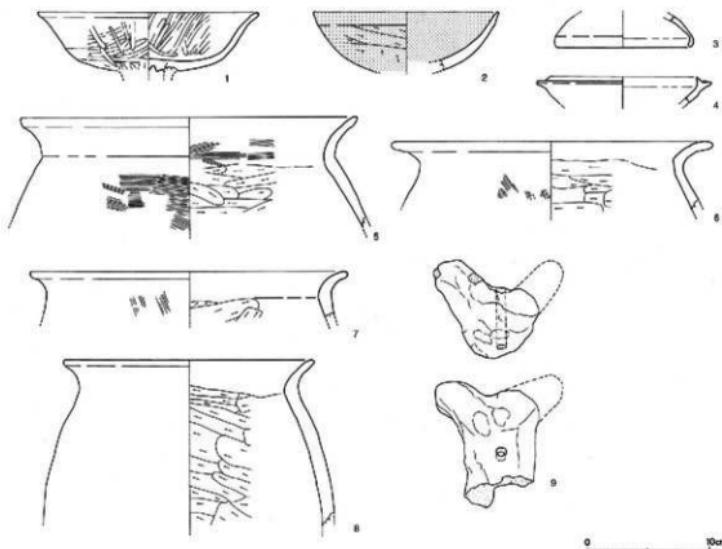
遺物は第120図に示した。1は草田6～7期の高坏で、接合部には円盤充填を行う。2は内外面赤彩の土師器坏である。口縁部外面に外反するアクセントを付けるものである。3・4は須恵器の蓋坏である。3は小片だが復元口径は11cmと小形で、口縁部も内湾することから出雲5～6期に相当する。5～8は土師器の壺である。8は胸膨れが少ないものである。9は土製支脚である。この他に、移動式竈の小片が出土している。



第118図 SK91～95、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4、1・2はSK94、3はSK95)

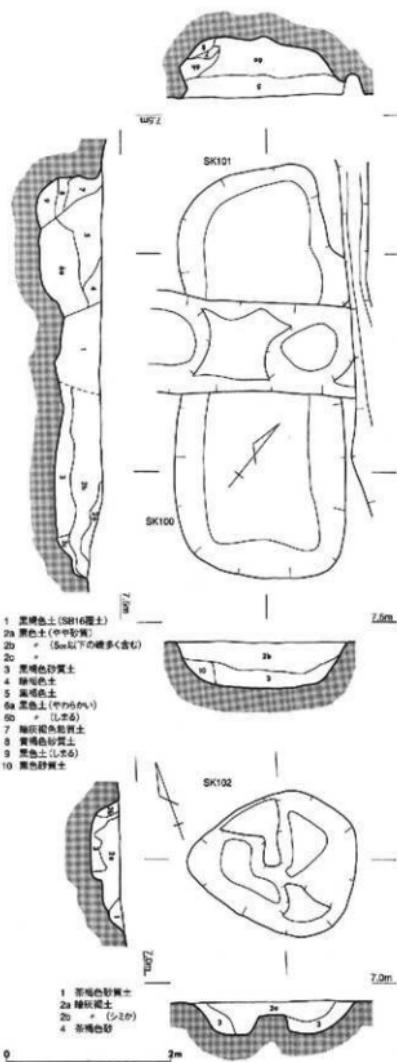


第119図 SK99実測図 (1:30)



第120図 SK99出土遺物実測図 (1:4)

出土遺物から、遺物廃棄の時期は概ね7世紀の前半頃と考えられる。



第121図 SK100~102実測図 (1:60)

### SK100・101 (第121図)

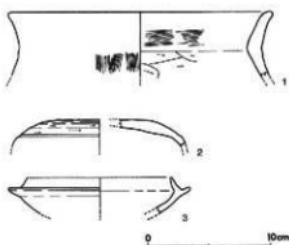
S B 1 6 に切られる土坑で、北側と南側で埋土と底面レベルが異なつていたため 2 基の土坑としたが、同一の土坑である可能性もある。規模は両辺間で 5.05m、幅 2 m で、深さは S K 1 0 1 で 80cm、S K 1 0 0 で 55cm である。

1 層は S B 1 6 の埋土である。S K 1 0 0 では水平堆積が見られるのに対し、反対側では 7・8・9 層を切り込む層が見られる。

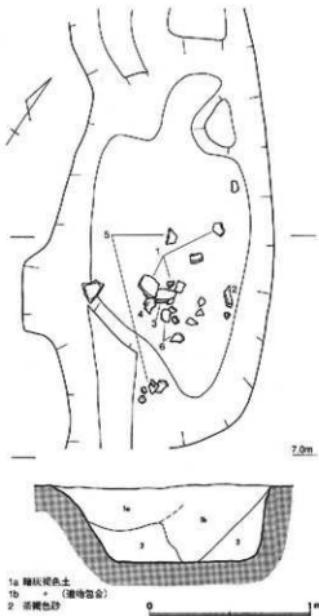
S K 1 0 0 からは古式土師器の小片が多数出土したのに対し、他方では須恵器蓋壺も出土している (第122図)。この他に赤彩土師器小片も出土している。

### SK102 (第121図)

調査区北端部に位置する平面不整形円形の土坑で、2つの遺構が切り合っているように見える。上端の規模は長径 210cm、短径 180cm で、深さは 35cm である。2 a 層からは図示で



第122図 SK101出土遺物実測図 (1:4)



第123図 SK103実測図 (1:30)

きなかったが須恵器坏蓋の口縁部、土師器、竈の軒庇等の小片が出土している。

#### SK103 (第123図)

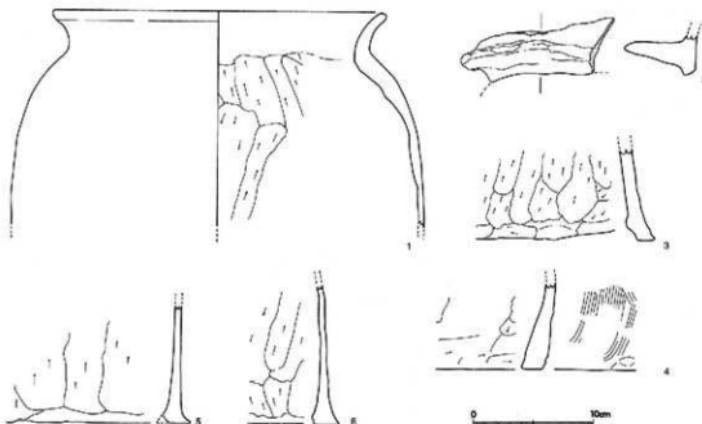
SK102の西側に位置する落込み状の遺構で、SD84に切られていたため正確な規模は不明だが、幅約110cm、深さ50cmを測る。1a層は溝の埋土で、これを除去したところ1b・2層から遺物を検出した。(第103図)。

1は移動式竈の側部資料で、焚き口側部の庇剥離痕が認められる。3~6は竈の脚部資料で、5~6は器壁が薄く同一個体と考えられるが、3と4は別個体である。

#### SK105 (第125図)

SD58の埋土に切り込んでつくられた平面円形の土坑である。径約100cmで、深さは10cm程度しか残存していなかった。底面から土師器2個体と錢貨10枚が出土した(第126図)。上部は削平されているが、墓であった可能性が高い。

1は口径14cm、底径7.4cm、高さ3.2cmの厚手の皿で、底部は丁寧なへら削りを施しているため切り



第124図 SK103出土遺物実測図 (1:4, 2は1:8)

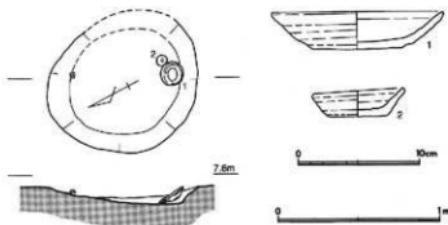
離し技法は不明である。類例は今のところ無い。2は口径7.3cm、底径5cm、高さ3.4cmの小皿で、口縁端部の内側が鋭く、底部は糸切りである。1・2ともに16世紀代まで下る型と考えられる。

銭貨の詳細については第5表に示した。

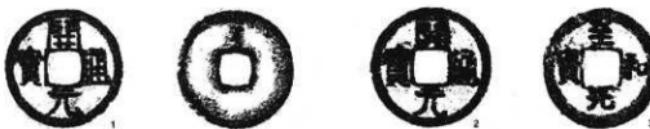
#### SK106 (第127図)

調査区中央の西寄りに位置する平面長円形の土坑で、上端の規模は長径4.95m、短径3.85m、深さ1.1mである。十字に土層観察ベルトを設けていたが、湧水による倒壊のため堆積状況は記録できなかった。

堆積土の上層から糸切り底の土器が小片も含めて多数出土した。遺物の他には石や木材などの井戸枠の部材と考えられるものは検出していないが、掘方規模



第125図 SK105、出土遺物実測図 (1:30、遺物1:4)

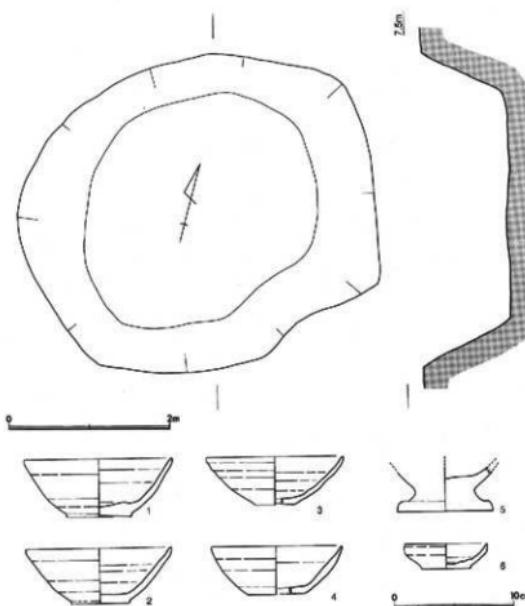


第126図 SK105出土銭貨拓影 (1:1)

第5表 SK105出土錢貨計測表

No.	錢名	初銘年	錢径(A)/錢徑(B)	内径(C)/内径(D)	錢厚	量目
1	開元通寶	621	24.45 / 24.35	20.20 / 20.55	1.10	2.78
2	開元通寶	621	24.65 / 24.75	20.70 / 20.55	1.15	3.39
3	至和元寶	1054	24.65 / 24.20	18.95 / 19.00	1.30	2.53
4	嘉祐通寶	1056	24.30 / 24.30	20.25 / 19.80	0.85	2.27
5	嘉祐通寶	1056	25.10 / 25.10	19.40 / 19.00	1.05	3.40
6	元豐通寶	1078	24.15 / 24.75	19.35 / 19.70	1.00	2.71
7	紹聖元寶	1094	24.10 / 24.10	17.75 / 17.20	1.30	3.64
8	紹聖元寶	1094	23.85 / 23.95	19.30 / 19.15	1.20	2.44
9	聖宋元寶	1101	24.70 / 24.65	19.65 / 19.90	1.20	3.52
10	政和通寶	1111	25.10 / 25.05	19.30 / 19.15	1.40	4.16

(単位: mm・g)



第127図 SK106、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

3.0m、深さ0.65~0.75mである。横断面は基本的に逆台形で、底面を持つ。底面レベルは東側で6.5m前後、西側で6.63mと大きな傾斜は認められない。溝の西端部は、弥生時代終末~古墳時代初頭に廃絶する溝SD58・59に切られている。

堆土の観察からは水成堆積の痕跡は見られなかった。堆積状況は場所によって異なるが、褐色系の土砂と有機物を含む黒褐色系の土砂の堆積が基本で、後者の堆積が掘り返しの回数を示すと考えられる。B-bでは4層を切って3層が堆積し、これを切るように1・2層が堆積している。また、D-dでは10・11層上面、8・9層上面、3・7層上面で掘り返しが想定される。このことから場所によっては最低3回の掘削があったと推測される。

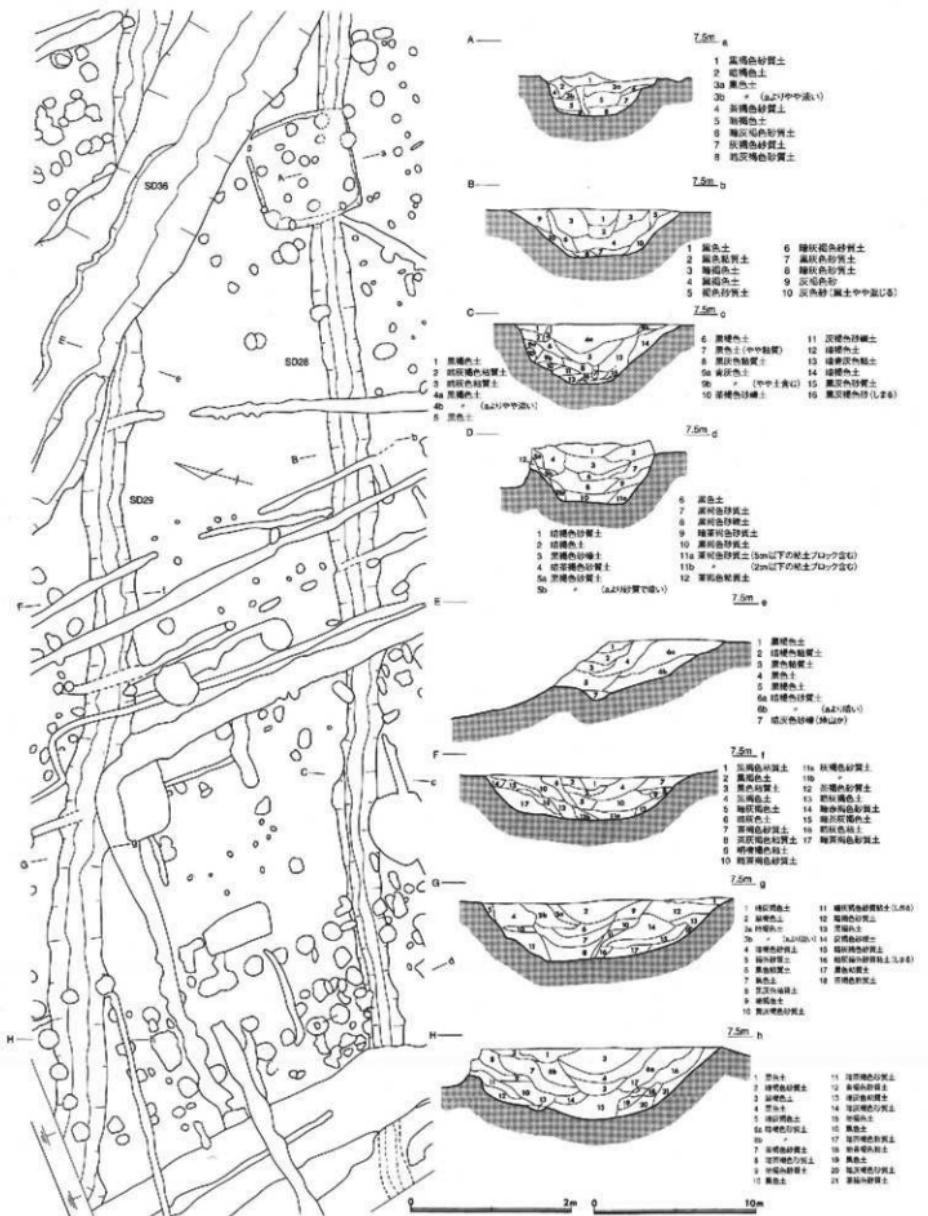
を考慮すると、井戸の可能性が高いと言える。

1~4は壺で、5は柱状高台皿、6は小皿である。この他に、須恵器、備前焼のすり鉢等の小片が出土している。壺・小皿とともに13世紀後半代のものである。

#### 5. 溝 (第128~148図) SD28・29 (第128図)

調査区を東西に並行して横切る2条の溝で、やや蛇行する。溝間の幅は西側16.4m、東側9.4mで、西行するにつれ幅広となる。溝はいずれも古代以前の遺構に切られていた。

#### SD28 南側の溝で、長さ77m、上端幅1.5~



第128図 SD28・29実測図 (1:300、土層図は1:60)

出土遺物は少なく、図示できたのは2点のみである（第129図-1・2）。1は高坏、2は須恵器壺口縁か脚部である。このほか弥生土器、土師器、近世陶磁器等の小片が若干量出土している。

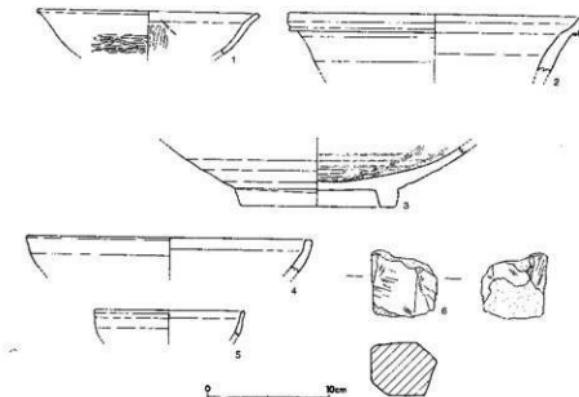
**SD29** 北側の溝で、長さ76m、上端幅2.5~3.0m、深さ0.55~0.9mである。横断面隅丸台形ないしは鉢形で、SD28ほど明瞭な底面はない。底部のレベルは東側6.3m、西側6.42mで、大きな傾斜は無い。溝は隣接するG区でも検出しており、この部分はG区の報告で扱う。

I層観察からは明確な水成堆積の痕跡は見られないが、部分的に薄い粘土層が見られることから、ある程度の水を湛えていた可能性もある。堆積状況は場所によって異なるが、SD28と同様に、褐色系の土砂と有機物を含む黒褐色系の土砂の堆積が基本で、後者の堆積が掘り返しの回数を示すと考えられる。E-e、F-fでは黒褐色系の土砂は連続的に堆積し、特にこれを掘り返した痕跡は認められないが、G-g、H-hでは顯著に見られる。特に、G-gでは黒褐色土の堆積以外にも明瞭な掘り込み面が見られ、その回数は5回以上と考えられる。

出土遺物はSD28同様に極めて少ない。3は肥前系陶器の二彩皿で、17世紀中葉～後葉のものである。4は16世紀末～17世紀初頭の肥前系の陶器皿と考えられる。5は中国産の天目碗の小片で、13世紀～14世紀代の所産である。6は砥石で、6面に多方向の使用痕が見られる。

以上の遺物は近世のものまで見られるが、検出面または上層出土のものである。一方、下層からは図示できなかったが、弥生時代前期の体部・底部小片が少量出土し、これより新しい遺物は出土していない。また、G区で検出した延長部分からも底面近くからI-2様式<sup>22)</sup>の壺口縁部が数点出土していることから、SD29は弥生時代前期中葉の溝と考えられる。なお、H区出土の前期の資料はG区と併せて報告する。

2条の溝は、規模・方向・埋土・他の遺構との切り合い関係等、共通点が多いことからセットで考えた方が自然であろう。遺構の性格は判然としないが、堆積状況からは流水の痕跡がほとんど見られないことから、基本的には「壕」の状態であったと考えられる。このことは、第5章で詳述する、SD29から採取したサンプルの分析結果とも矛盾しない。



第129図 SD28・29出土遺物実測図 (1:4)

### SD23・50 (第131図)

調査区中央部を南東一北西方向に走る溝である。SD23はSD28以南で二股に分岐し、東側の溝はSD50を切り込み、西側の溝は調査区際まで延びる。SD50はSK84・SE04等の後世の遺構に切られて、南側は不明瞭になる。これらは2条の溝としたが、完掘すると溝の下端は複雑に入り組んでおり、多条の溝が複合してできた溝の可能性もある。

**SD23** SD29と切り合う地点で大きく西側に方向を変えて、西端部は幅狭く、深さも浅くなる。本体の上端幅は70~180cm、深さ40~70cmで、分岐した溝は東側が幅50cm、深さ30cm、西側が幅85cm、深さ20cmを測る。

堆積状況は、C~Eの断面で分かるように掘り返したような痕跡が認められる。これは先述した溝の切り合いによるとも考えられる。

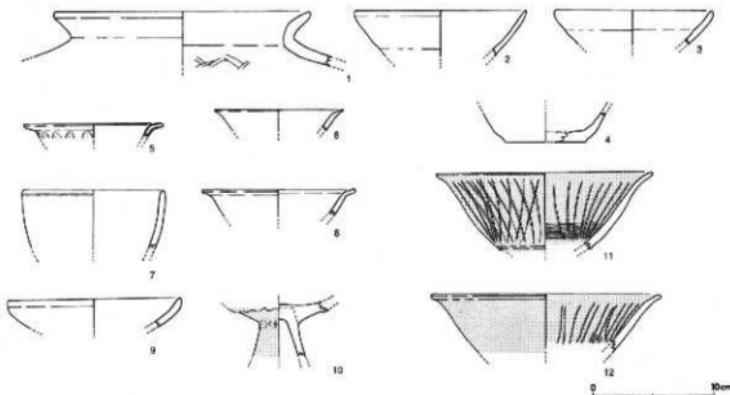
遺物は(第130図)、1が須恵器の甕、2~4が糸切りの土師器坏で13世紀後半代のものか。5は龍泉窯系青磁三類の坏で、6は口禿白磁で四類の皿である。いずれも13世紀代のものである。7・8は肥前系の陶胎染付碗と溝縁皿である。7は17世紀末~18世紀前半、8は17世紀前半の所産である。

**SD50** 上端幅90cm~200cm、深さ10~20cm程の溝で、中央部は膨らむ。

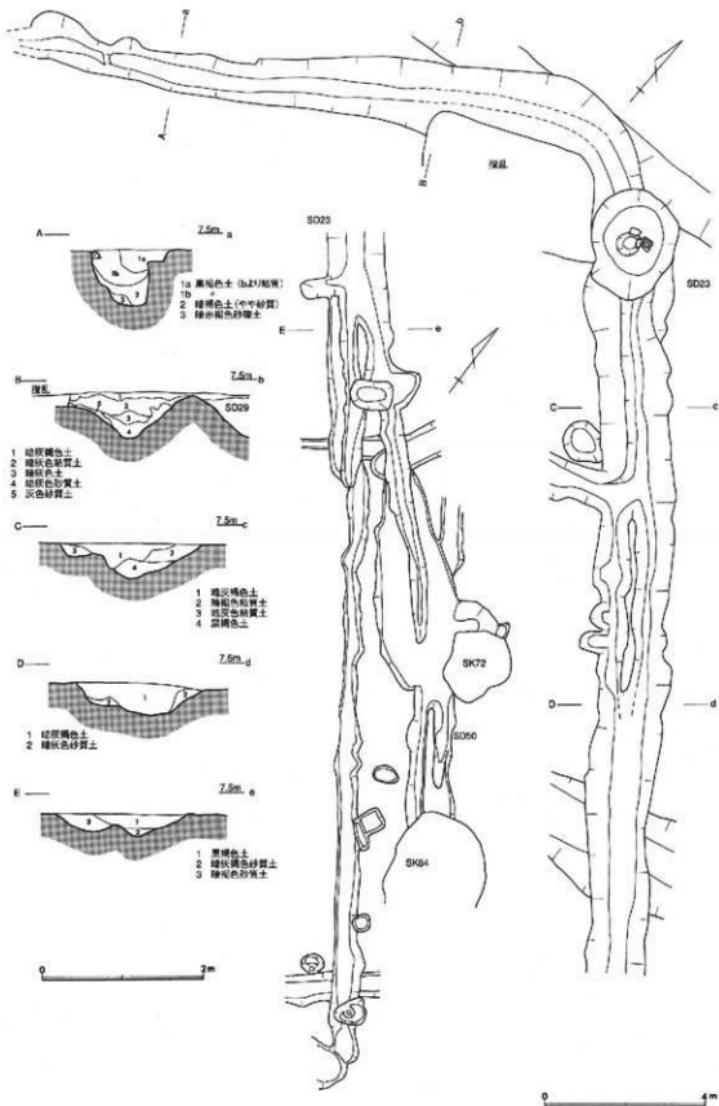
出土遺物は9~12で、いずれも土師器である。9は浅い坏、10~12は赤彩の高坏である。10は坏部を失うが、接合部付近にわずかな段が見られ、11か12と同様のタイプと考えられる。11は内面は放射状に、外面に斜格子状に暗文を施す。いずれも5世紀末~6世紀初頭のものと考えられる。このほか、焼成不良の須恵器甕の体部片が出土している。

### SD26 (第132図)

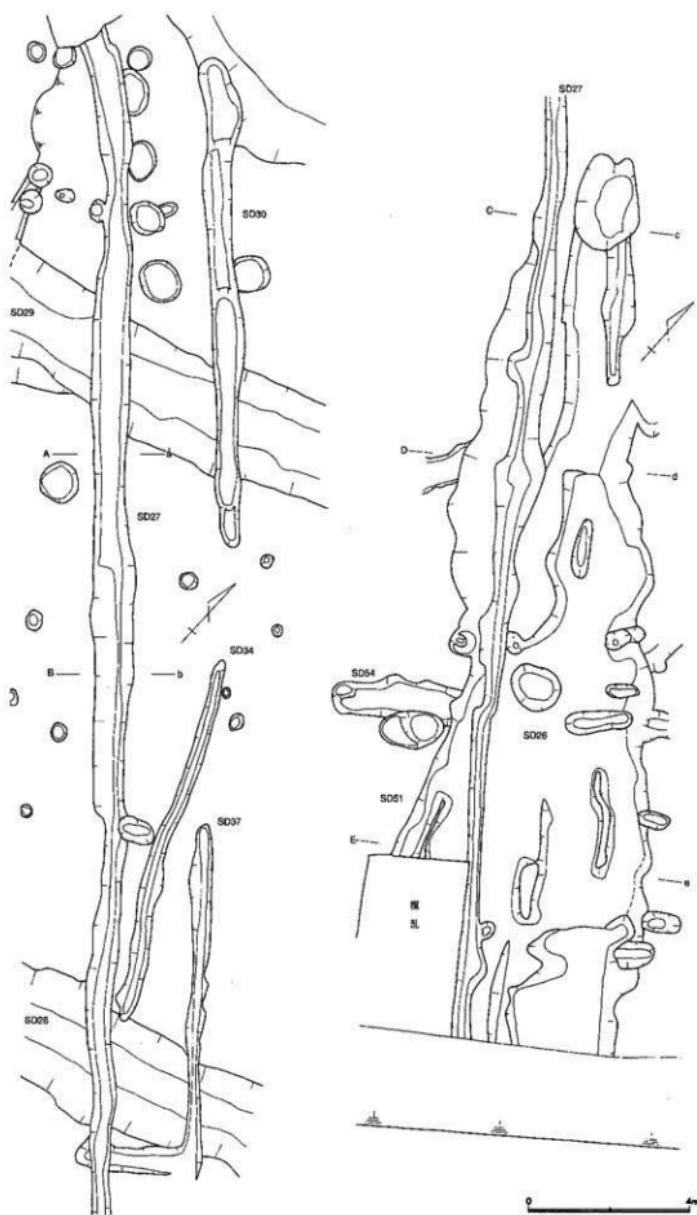
調査区中央の南寄りから南東端部に至る幅広の落ち込み状の遺構である。平面的には判別できなかったが、本来は幾条のかの溝が切り合って形成されたものと考えられる。また、この付近は中・近世の柱穴が密集していることもあり、溝の底面でも柱穴を検出している。規模は、長さ20m、上



第130図 SD23・50出土遺物実測図 (1:4、1~8はSD23、9~12はSD50)



第131図 SD23・50実測図 (1:120、土層図は1:60)



第132図 SD26・27・30・34・37・51・54実測図 (1:120)

端幅1.2~5.6m、深さ0.17~0.45mである。

第133図では、D-dの1・2層がSD26の埋土で、別の溝埋土3~5層を切って堆積している状況が見られる。E-eでは、1a~4層が埋土であるが、断面からは少なくとも3条の溝が切り合っている様子が窺える。

出土遺物（第134図-1~13）のうち、1~5は輸入磁器である。1が緑褐色の青磁碗で外面に練刻巡弁文、見込みには印文花文が見られ、上田B-N類で15世紀後半~16世紀代である。2は口禿の白磁皿である。3~5は森田E群に属する16世紀代の白磁皿である。6~8は肥前系の陶器である。6は鉄絵の唐津皿で、7は灰褐色の胎土目の皿である。いずれも16世紀末~17世紀初頭の所産である。8は17世紀前半の砂目皿である。9・10は李朝陶器碗である。9は暗灰色で、軸下に化粧土、見込みと疊付には日跡が見られる。10は淡灰褐色で疊付に6カ所目跡が残る。いずれも15~16世紀代のものである。11は備前IV期のすり鉢である。12は糸切り底の土師器小皿、13は磁石である。小口を除く4面に使用擦痕が認められる。

### SD27（第132図）

SD26に並行して調査区南東端部から北西端まで貫く細長い溝である。長さ53.7m、上端幅0.36~1.1m、深さ0.15~0.4mで、南半部はやや幅広になる。D-d（第133図）で見ると、溝（3層下面）は別の溝埋土4層を切る状況が見られるが、SD26（1・2層）との切り合いは不明である。

出土遺物は新しい時期のものも出土している（第134図-14~19）。14は緑白色の肥前産の磁器碗で、疊付は露胎して橙色を呈し、見込みに灰被りが見られる。1640~60年代のものである。15は14世紀代と見られる輸入白磁の小片で碗か。16は糸切り底の土師器である。17は肥前系の陶器碗か。18は銅綠釉を蛇の目釉剥ぎした内野山窯の皿で17世紀後半である。19は錢貨である。

第6表 SD27出土錢貨計測表

No.	錢名	初鑄年	錢径(A) / 錢径(B)	錢径(C) / 錢径(D)	錢厚	量目
19	寛永通寶	1636	25.25	25.10	19.80	19.80

(単位:mm・g)

### SD30~37（第132図）

調査区中央部に位置する小規模の溝で、長さも短い。SD30~37は配置状況と規模から、関連する可能性もある。

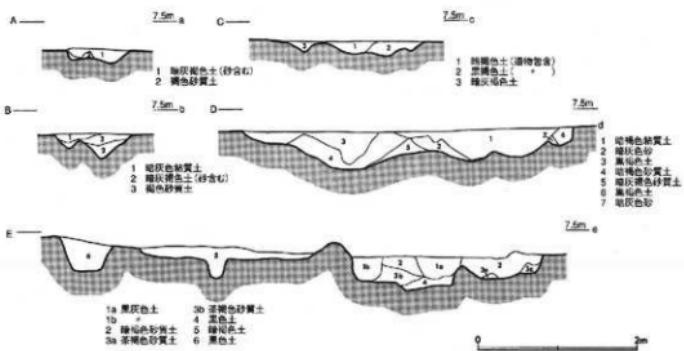
SD30 SD27に並行する、長さ12.2m、上端幅0.4~0.8m、深さ0.2~0.3mの溝である。出土遺物は134~20に示した在地系と見られる瓦質のすり鉢1点のみであった。

SD34 長さ9.4m、上端幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mの溝である。出土遺物は無い。

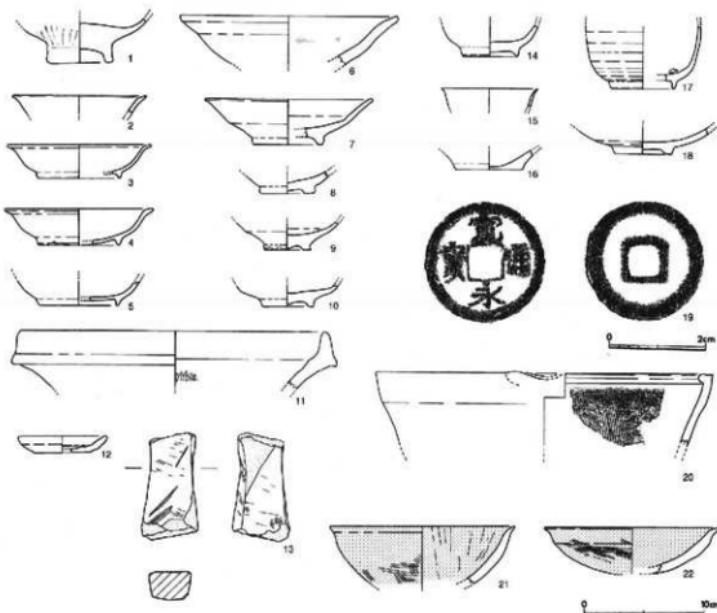
SD37 SD30の南東端部から約7mの地点にある溝で、逆L字形に屈曲する。総延長11.8m、上端幅0.36~0.6m、深さ0.2m前後である。糸切り底の土師器小片が出土している。

### SD51・54（第132図）

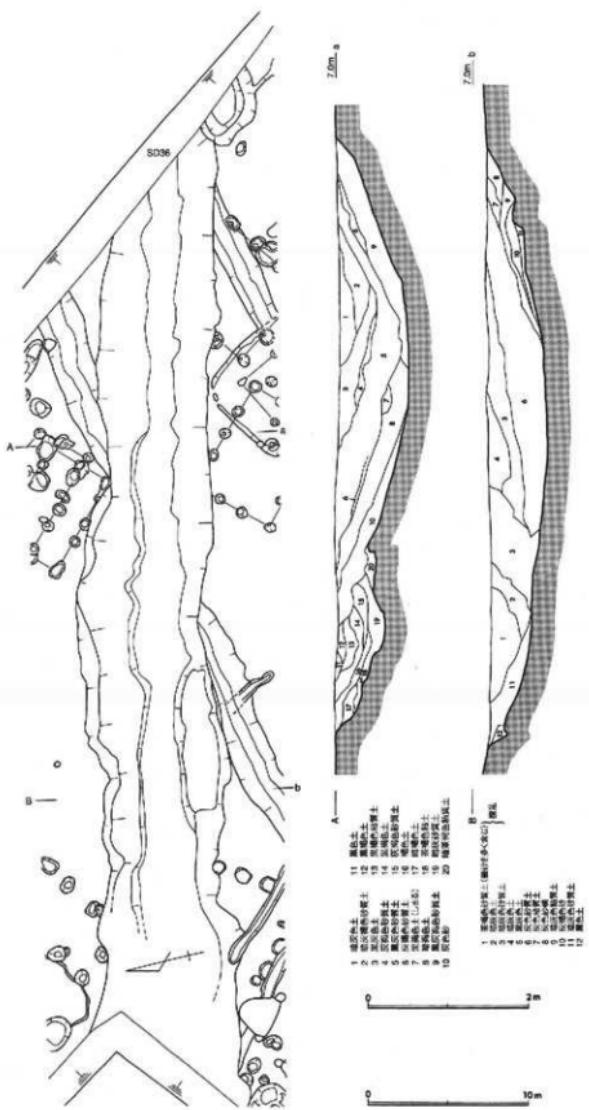
SD26・27の南東端部でこれと切り合う2条の溝である。SD51は配置状況から、後述す



第133図 SD26・27・51土層断面図 (1:60)



第134図 SD26・27・30・54出土遺物実測図 (1:4, 19は1:1, 1~13はSD26, 14~19はSD27, 20はSD30, 21・22はSD54)



第135図 SD36実測図 (1 : 300、土層図は1 : 80)

るSD39の延長部である可能性が強い。また、SD54は出土遺物から後述のSD52と関連すると考えられる。

**SD51** 現状で長さ5.4m、上端幅0.6m、深さ0.4mである。D-d(第133図)では4層が埋土と考えられ、SD26・27に切られている。遺物は土師器、近世陶磁器等の小片がある。

**SD54** SD27に切られ、現状で長さ3.2m、上端幅0.8m、深さ0.2mである。

遺物は、134-21・22に示す土師器が出土している。ともに内外面に赤彩を施す坏で、内湾した後口縁部が外反するのが特徴である。細部は異なるが、前述のSK99でも口縁が外反する類似の坏が、出雲5~6期の須恵器と共に伴していることから、これらも7世紀前半代のものと考えられる。

### SD36 (第135図)

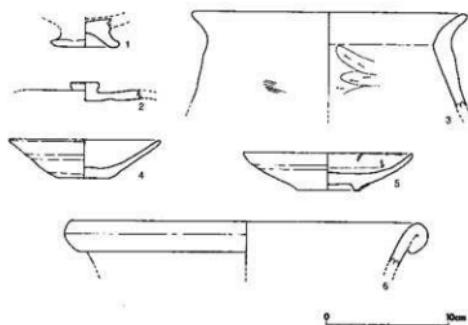
調査区を東西方向に横断する大溝である。平成10年度のH1区で検出した部分については調査を行い、近世の遺構と判明したため、翌年のH3区部分では遺構の広がりと、切り合いを確認するのに留めた。なお、隣接するG区においてもその延長部が確認されている。

現状の規模は、長さ62m、上端幅6.4~8.0m、深さ0.75~0.9mである。横断面は弧状で、明瞭な底面は無い。底部のレベルは6.1m前後で、傾斜はほとんど認められない。

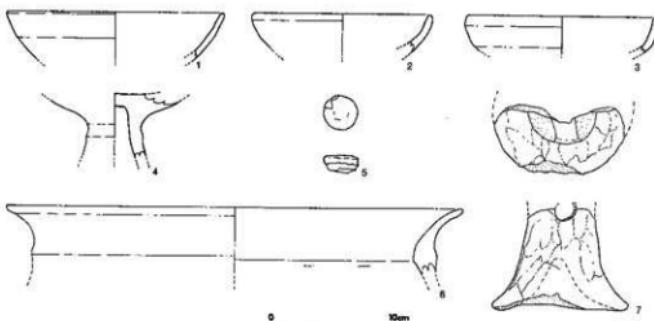
溝内は灰褐色系の土砂が堆積していた。A-aの1~10層がSD36の埋土、11~20はSD29の埋土である。基本的には溝外部からの流入による自然堆積と考えられ、人為的な痕跡は認められなかった。ただし、下半の層中には水成による縞状の細かな砂の単位層が見られ、また、溝の下半部は湧水も激しいことから、ある程度の水量とそれに伴う堆積もあったと考えられる。B-bの1~3層は後世の擾乱による。

出土遺物（第136図）として、1の低脚壺、2の須恵器の壺蓋、3の土師器壺、4の糸切り底の土師器壺等があるが、下層から肥前系の陶器を検出している。5は三川内産の17世紀中葉～後半の皿である。

他の遺構との切り合い関係でも最も新しいことから、5の時期が溝の埋没し始める上限といえる。



第136図 SD36出土物実測図 (1:4)

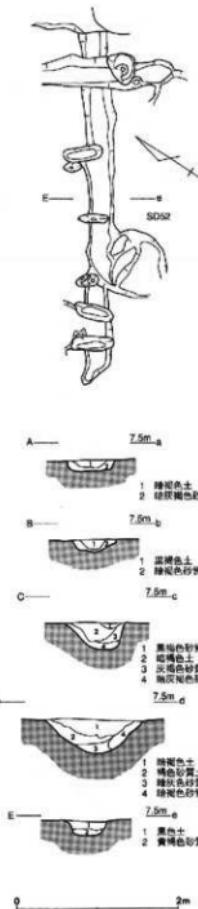
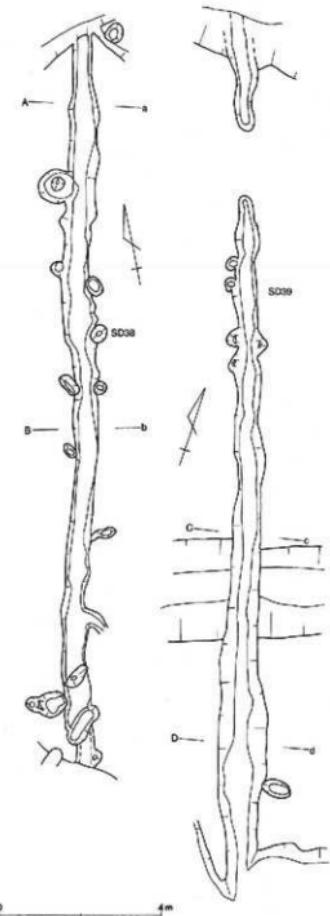


第137図 SD39・52出土物実測図 (1:4, 1~5はSD39, 6・7はSD52)

糸切り底の土師器小片を少量検出した。

### SD39 (第138図)

調査区中央のやや東よりに位置する溝で、先述したように SD51 と連続する可能性がある。規模は長さ17.5m、上端幅0.4~1.2m、深さ0.3~0.4mで、この北側には1.6mほど離れて同一方向にはしる溝の一部が検出された。規模も同じことから、関連する可能性もある。



第138図 SD38・39・52実測図 (1:120、土質図は1:60)

### 出土遺物 (第137図)

図の1~4は土師器小片である。内外面とも風化のため調整は不明である。1は復元口径が大きいが低脚壺で、2・3は壊であろう。この他に須恵器小片も出土している。

### SD52 (第138図)

調査区南部に位置する溝で、SD54 の延長上にある。

規模は現状で長さ8.8m、上端幅0.7m前後、深さ0.2m前後である。SK71と切り合が、平面的には前後関係は確認できなかった。

また、出土遺物(第137図-6・7)もほぼ同時期である。出土地点が土坑と離れているので、混入とは考えにくい。

### SD58~60・70・71 (第139図)

調査区北西から南端にかけて多重に掘り込まれた溝で、西側から SD 60、59、71、58 とは同じ方向に配置される。また、SD 70 は調査区南部から SD 58 に並行し、その半ばで西へ向きを変えて SD 59 と切り合う。この地点は、SD 28 も切り合うところで、4 条の溝が重複し、複雑な様相を呈していた。

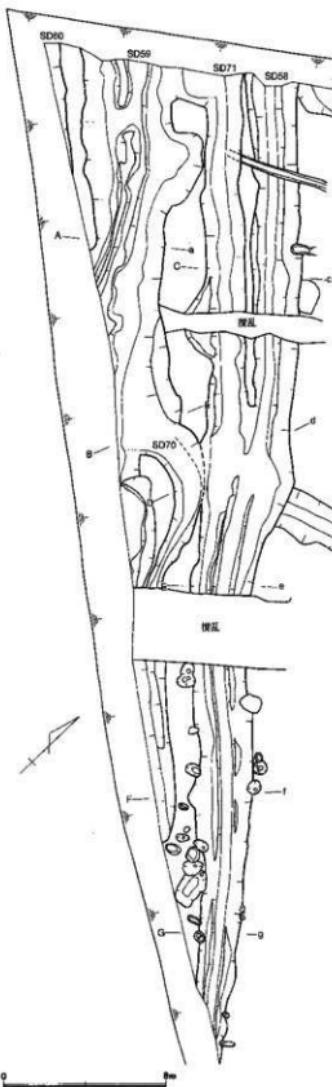
**SD60** 調査区端部に位置する溝で、拵方の一部を確認した。H10年度のG区の調査で、この溝の延長部に相当すると考えられる SD 35 が確認されている。今回の調査では出土遺物は無く、全容も不明である。

**SD59** G区の SD 39 に連続すると考えられる。現状で、長さ21m、上端幅3.4~4.5m、深さ0.8m前後である。底部はトタン板状に浅い凹凸が認められ、最低3条の溝ないしは掘り返しの痕跡が認められた。底面のレベルは5.9~6.3mで、北側が深くなる傾向を持つ。

**SD70** SD 59・71 に切られる蛇行溝である。途中擾乱されているが、現状の規模は長さ21m、上端幅0.7~2.2m、深さ0.35~0.75mである。横断面は基本的には逆台形だが、場所によって異なる。出土遺物は無い。

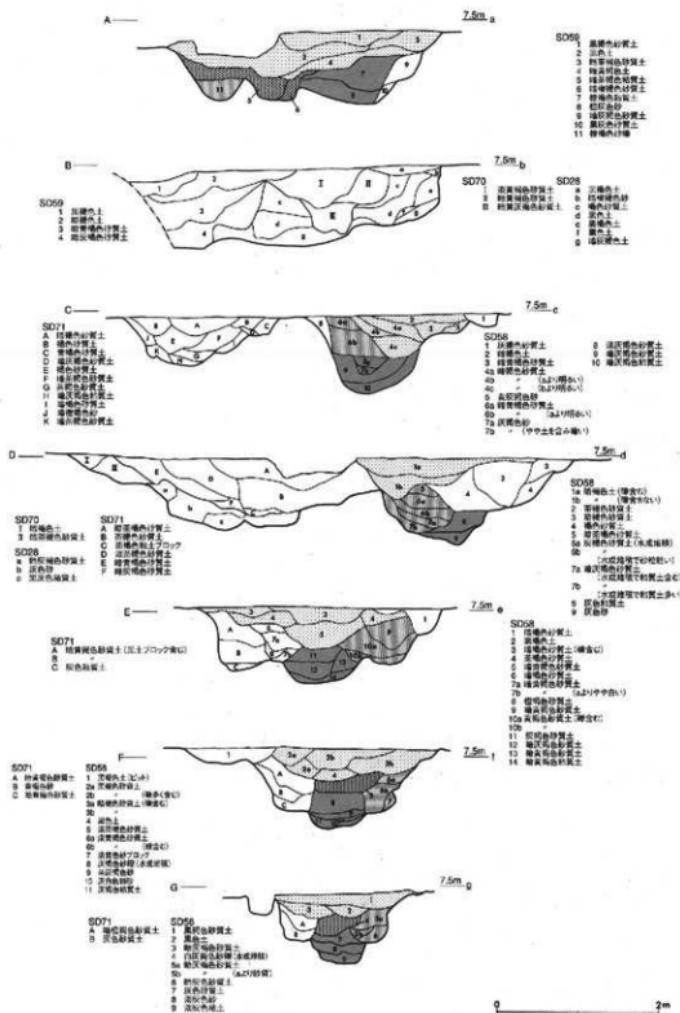
**SD71** G区 SD 40 に連続すると考えられる。半ばで SD 58 と切り合って上端は一つとなり、下端は段状にその痕跡を残す。長さ47m、上端幅は独立しているところで1.8~1.9m、深さ0.6~0.7mである。横断面は概ね U 字形で、底部のレベルは6.84~6.74mと大きな違いは無いが、東側が高い傾向にある。遺物は弥生土器の小片が数点出土しているが、図示・時期判断できるものではない。

**SD58** G区 SD 41 に連続すると考えられる。規模は、長さ49m、上端幅1.9~2.2m、深さ0.9~0.96mである。横断面は本来、隅丸台形であったと考えられるが、切り合ひと、掘り返しによって現在ではW字形を呈す。底面のレベルは6.42~6.60mで、SD 71 と同様、東側がやや高い傾向にある。



第139図 SD58~60・70・71実測図 (1:240)

**堆積状況 (第140図)** A-aはSD59で、1・2層は黒褐色系の土砂が堆積していた。後述するが、1層上面の特定範囲で須恵器を検出している。土壠観察から、図示した網掛け部分は、掘削とそれに伴う堆積と考えられる。このことから、初回を含めると最低4回の掘削が行われたと考えられるが、SD59の上端は最も幅広で、下端もトタン板状に独立している部分も見られることから、掘り返しだけでなく、複数の溝が重複している可能性もある。なお、完掘状況ではかなり湧



第140図 SD58・59・70・71土層断面図 (1:60)

水が見られるが、ここでは顕著な水成堆積は認められなかった。

B～bはSD59・70・28が切り合う地点で、aは後世の堆積である。b～gはSD28に因るもので、これをSD70が切り、更にSD59が切る状況である。ここでも水成堆積は確認していない。

C～cはSD71・58の独立部分の断面である。SD71のF～H層下面、E層下面、C・D層下面で計3回の再掘削が想定される。SD58では、最低3回の再掘削が考えられるが、7a・b層も別次の掘削に因るとも見られる。各溝の底部にH層、10層といった粘質土が見られる他には、溝内に水があった可能性を示す痕跡は無い。なお、SD58の網掛け部は、埋土は異なる場合もあるが以下に示す掘削と概ね対応するものと考えられる。

D～dは4条の溝が交錯する部分である。切り合から溝の前後関係は、SD28→70→71→58で、SD58では最低4回の掘削が見られ、また、水成堆積（縦状に砂が互層堆積する）が顕著である。SD71はA層、B・C層が掘り返し後に堆積したものか。

E～e～G～gではSD71・58の切り合いが認められる。ここではSD71の埋土A～Cが58の古い埋土を切る部分も認められる。このことから、2条の溝は並行しながらも、同時に用いられず、SD58→71→58のように時期によって機能した溝が異なっていた可能性が強い。

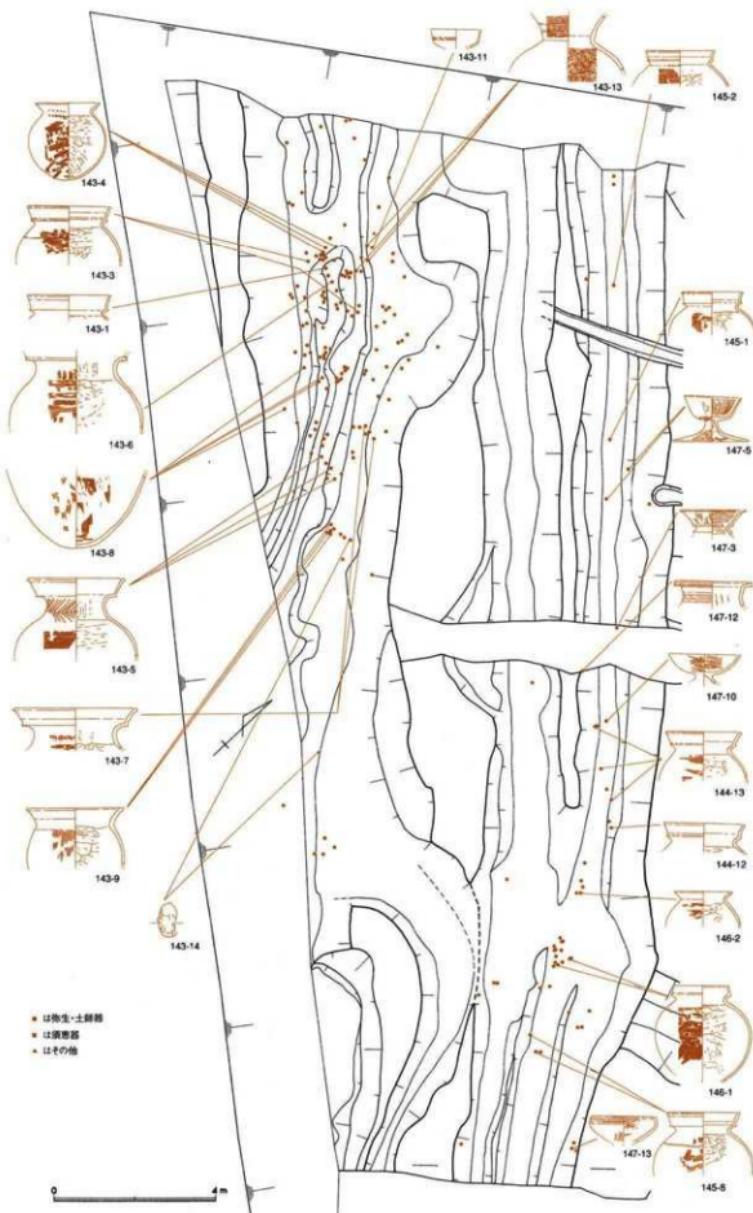
**遺物出土状況（第141・142図）** SD58・59からまとまって土器が出土している。垂直分布については、SD59については前述したように、上面では須恵器が集中して出土したほかは、2層以下から検出した。ただし、全体量のうち、その大半は上層からで、初期の埋土7～11層からはほとんど出土していない。調査範囲が狭いため遺物分布の平面的な特徴は把握できないが、溝の両端部は比較的希薄で、現中央部にまとまる傾向が見受けられる。遺物は小片で器種も少なく、器種による偏在性や遺存度等については言及できる状況ではない。

SD58は北半と南半で出土状況が大きく異なる。特に平面的には南半に集中し、且つ、土器片が群をなす傾向が見られた。群が大きければ当然個体数も多く、復元率も高い。接合関係を見るとそれぞれの個体はその群中で完結するものが多く、廃棄された後大きく位置が変わっていないと考えられる。器種はSD59に比べて豊富だが、それによる偏在性は認められない。壺などに比べ小形で器壁の厚い器種は破損が少ないものが多いといえる。出土層位は第140図で示した最終掘削面の埋土（粗目網部）からで、それ以下からは皆無に等しく、図示できるものは無かった。出土状況は弥生時代終末に埋没するH1区のSD07・15等と極めて類似するといえる。

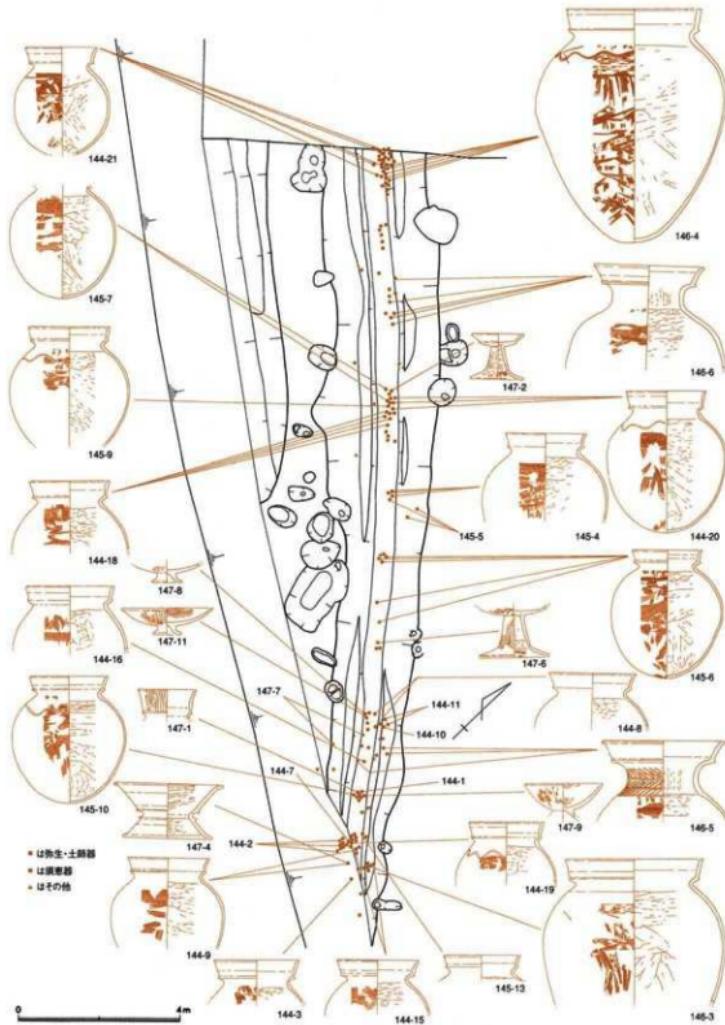
**SD59出土遺物（第143図）** 1～3は複合口縁、4は単純口縁の壺である。3は肩部に1条のヘラ描き直線文を巡らす。4は口縁端部を外側に肥厚し、面をつくるので、外面下半には煮沸痕と見られる煤が付着する。平底の痕跡が残り、細口の刷毛目を施す。5～7は壺で、口縁は大きく開く。5は頸部に有輪の羽状文を施す。8は壺か壺の底部資料で、わずかに平底の痕跡が見られ、内面には刷毛状工具によるながが見られる。1～8は草田6～7期の範疇に入るものである。

10～13は須恵器である。10は壺蓋で、口縁内面に強い回転などでわずかに段をつくり、天井部には回転へら削りを施す。11・12は高壺で、同一個体の可能性もある。13は壺で、頸部に2条の沈線と板状工具による連續平行刺突文が施される。このような施文は当地域では稀だが、北部九州や益田市の芝窯跡出土遺物に類似があり<sup>20</sup>、6世紀末～7世紀前葉のものと考えられる<sup>21</sup>。

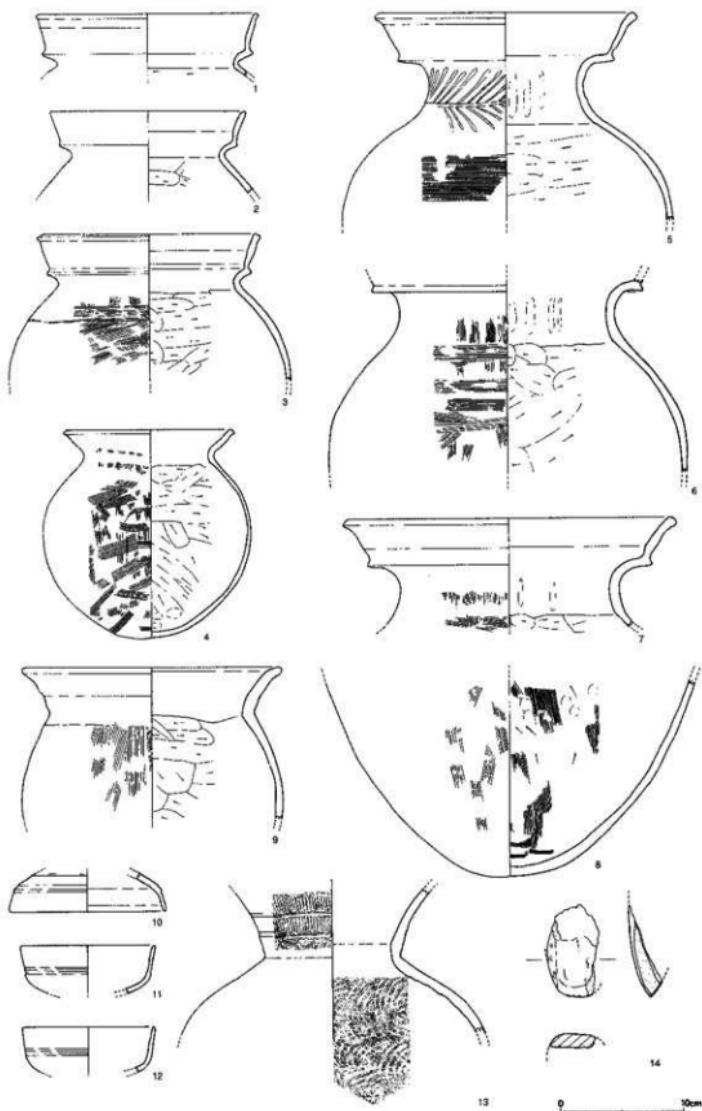
14は太形船刃石斧である。



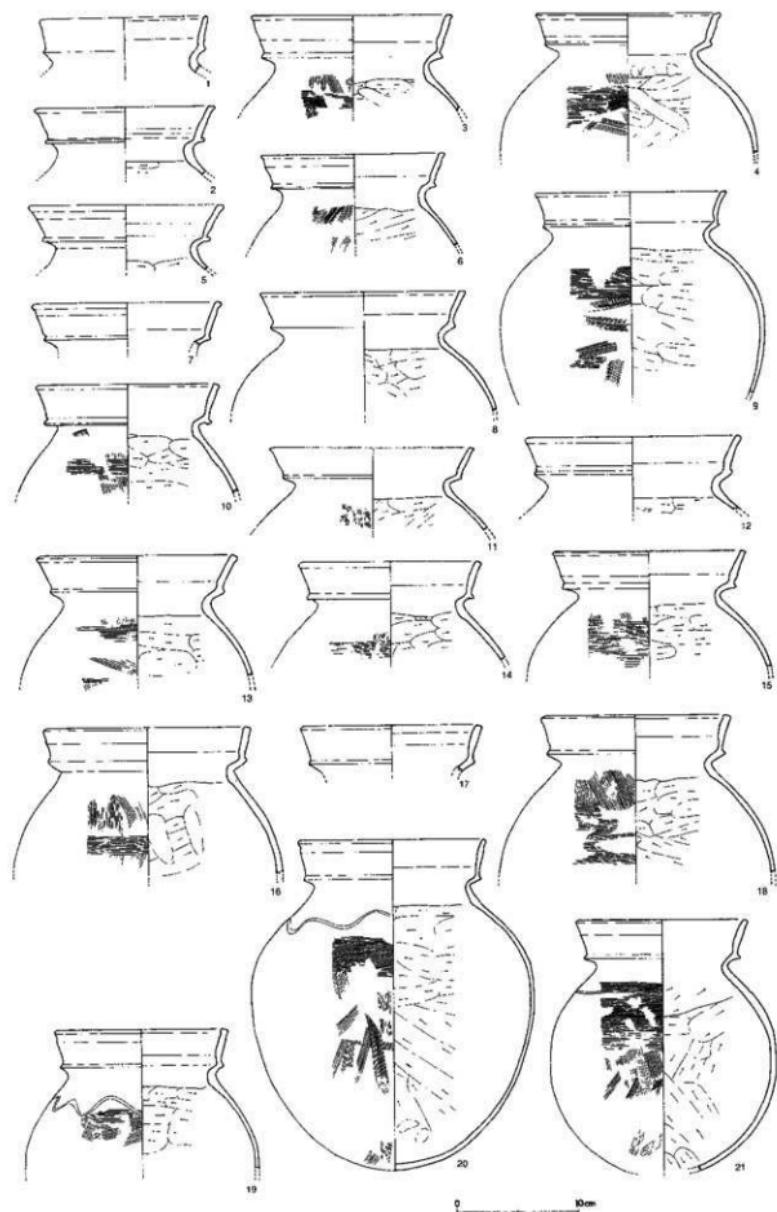
第141図 SD58・59遺物出土状況 (1:120)



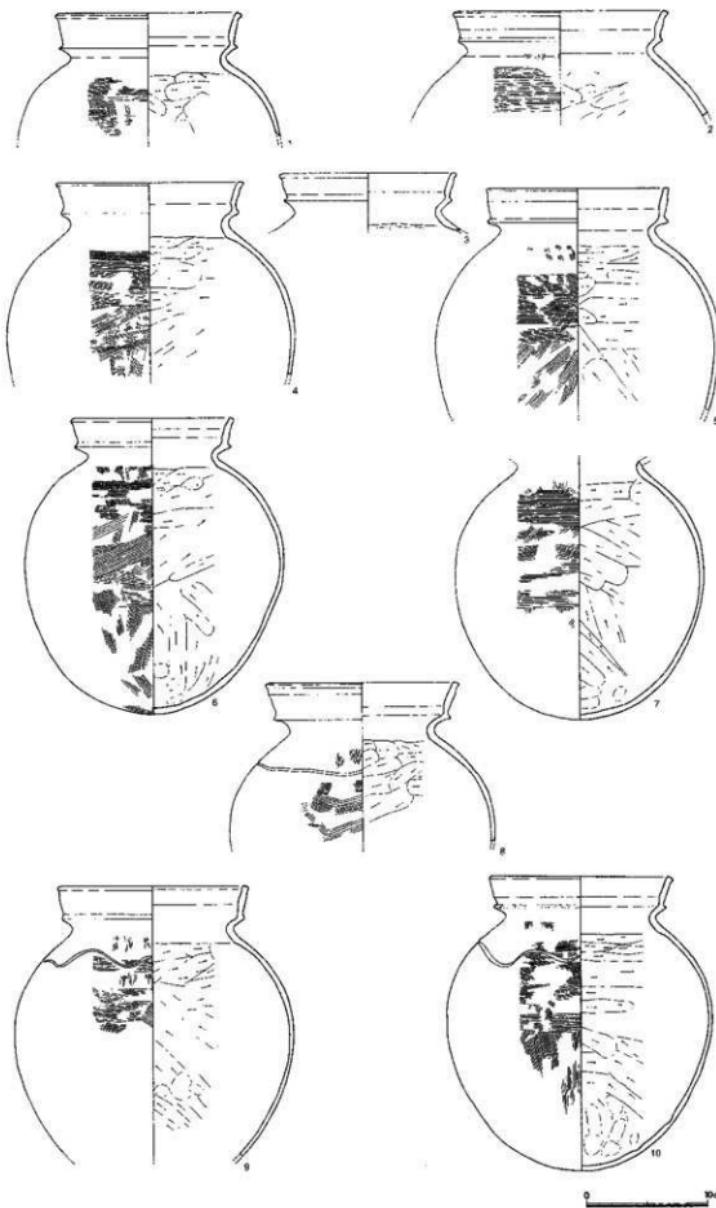
第142図 SD58遺物出土状況 (1 : 120)



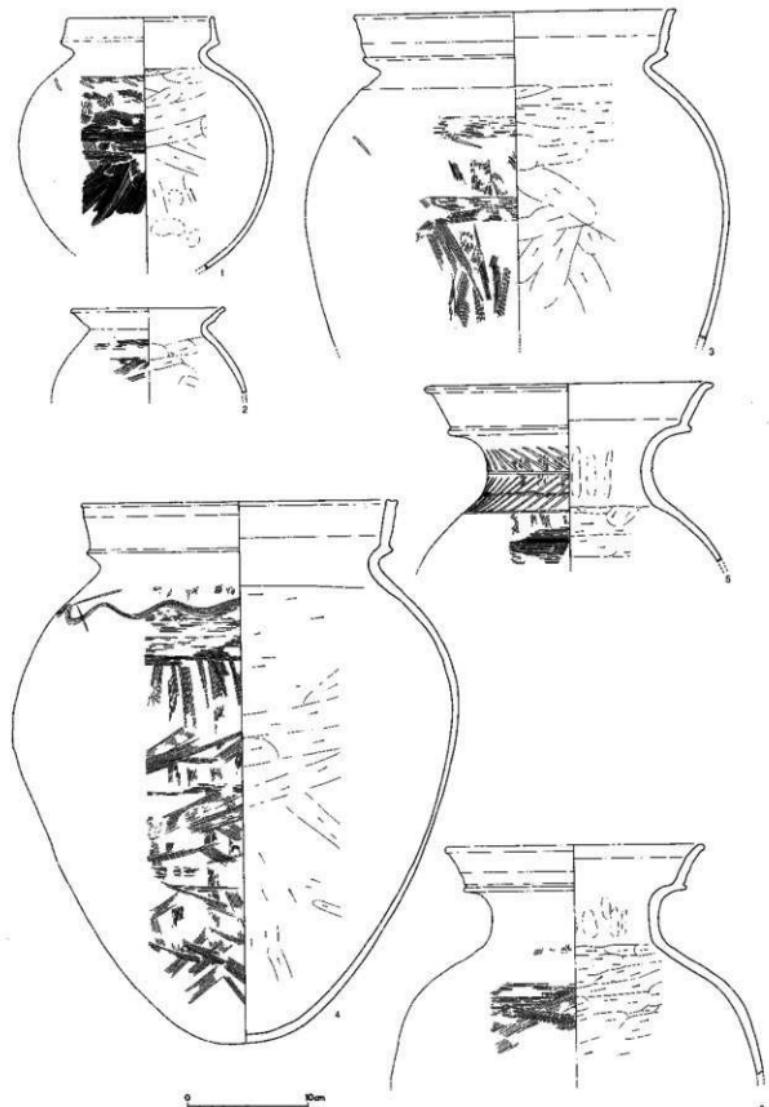
第143図 SD59出土遺物実測図 (1 : 4)



第144図 SD58出土遺物実測図（1）(1:4)



第145図 SD58出土遺物実測図（2）(1:4)



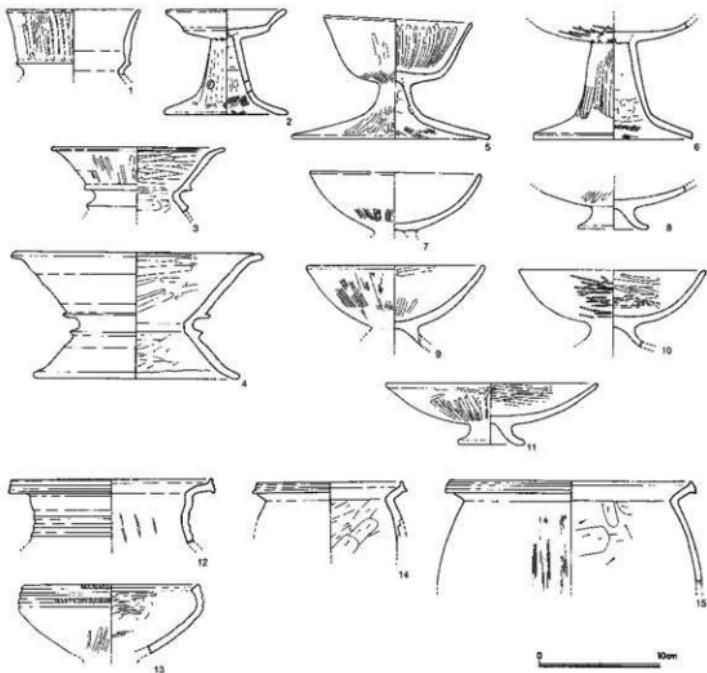
第146図 SD58出土遺物実測図（3）(1:4)

SD58出土遺物（第144～147図） 144-1～146-4は甕である。1は口縁が直立し、端部を丸くおさめるもので、2～15は比較的に複合口縁部が外傾して、長く、端部も多様性が見られるものである。16～145-10は口縁の外傾が少なく短小なものである。144-19・20、145-9・10はへら描き波状文、144-21、145-8はへら描き沈線文を施す。146-1は口縁が内傾するもので、肩部5か所に刷毛状原体による列点文が施され、外面下半に煮沸痕と見られる煤が付着する。3・4は大形で、3は間隔の広い刷毛状工具による列点文が見られるが、全周するものか不明である。4は刷毛状原体による波状文が施されるが、全周はない。また、波状文が途切れた肩部に×状の2本のへら描きが施される（図示した位置は本来の位置ではない）。

5・6は壺である。5は頸部に長さの異なる有軸羽状文を施す。6は肩が張るものである。

147-1は直口甕で、口縁外側にたて磨きを施す。2は小型器台で円形透かしを3方に穿ち、脚部の屈曲はあまりない。3は復元口径13.8cmの小型鼓形器台である。5は低脚高坏で、内外面に丁寧なたて磨きを施すが、脚部の屈曲はあまりない。7・9・10は深身、8・11は浅身の低脚坏である。

以上の土器、特に甕については、第144図に示した口縁資料に多様性が見られるものの、半分以上まで復元ができたものは概して丸底で、口縁形態やへら描き波状文・沈線文を施文する点でも新しい要素を持っていると言える<sup>25)</sup>。また、出土層位も特定で、新旧の遺物が混在した状況も見られ



第147図 SD58出土遺物実測図（4）(1:4)

なかつたことから一括性の高い土器群といえ、その時期は、概ね草田7期と考えられる。

このほか、12~13に示す弥生時代中期末の広口壺、高杯、後期前葉の甕が出土しているが、これまで見てきた土器とともにごく少數出土していることから、遺構との直接的な関係は見出せない。

#### SD83 (第148図)

調査区北端部に位置する溝である。東端部は地形の落ち込みで不明だが、両端部ともに調査区外へ続くと考えられる。現状の規模は、長さ8.4m、上端幅0.84~0.96m、深さ0.2m前後である。

遺物は8世紀後半代の須恵器壺身と2の土師器甕のほか、図示できなかったが、焼成不良の須恵器大甕体部片、土師器小片等がある。

#### SD84 (第148図)

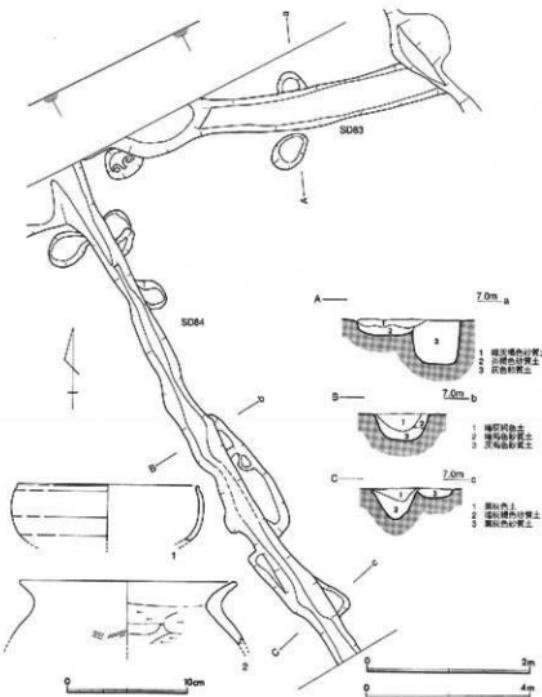
SD83の南側に、SK103を切り込んでつくられた溝である。両端部とも調査区外へ続くと考えられる。規模は現状で、長さ14m、上端幅0.36~0.6m、深さ0.3~0.4mである。遺物は移動式壺脚部の小片、須恵器大甕体部片が出土している。

### 6. 性格不明遺構

#### SX14 (第149図)

調査区南端部に位置する、隅丸方形に巡る周溝状遺構である。溝の南側はSE11に切られているが、C-cの箇所では確実に溝は途切れている。区画内は溝の埋土と明らかに異なる中・近世の柱穴によって攪乱されており、溝に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。溝の規模は上端幅60~120cm、深さ20~50cm、断面U字形で、区画部分は内法で一边6~6.5mを測る。

底面からやや浮いた位置で遺物が出土している(第150図)。1~7は須恵器である。1・2の蓋杯は復元口径11cm前後で、形態からも出雲5~6期



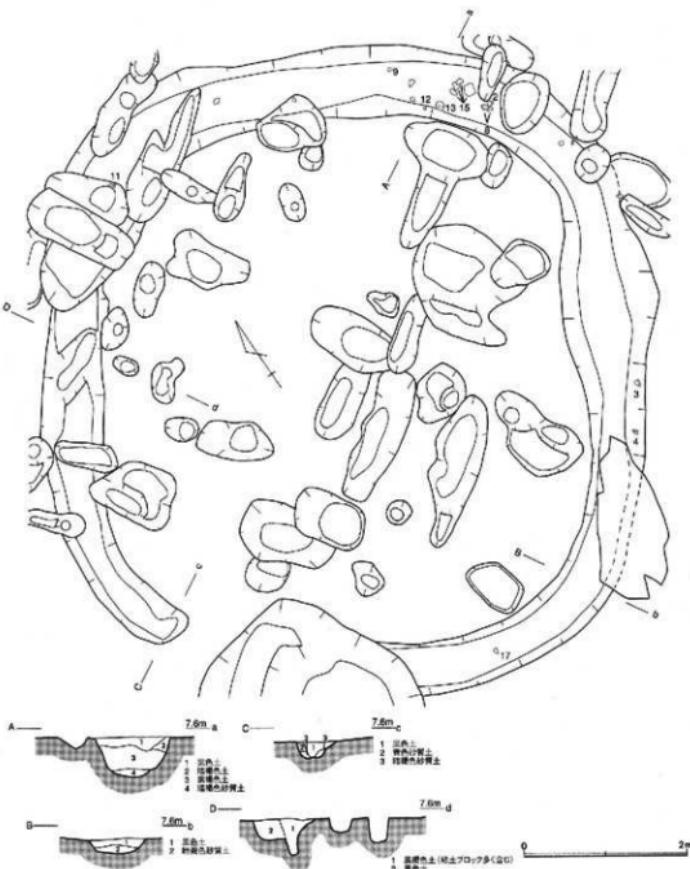
第148図 SD83・84、SD83出土遺物実測図 (1:120、土層図は1:60、遺物1:4)

の所産と考えられる。3~6は高坏で、3・4は同一個体の可能性もある。7は瓶の肩部資料で竹管文状の把手痕跡が認められる。8~14は土師器の坏・高坏で、15は甕である。

出土遺物はSK99と同様に7世紀前半代のものと考えられる。遺構は、状況的には方墳の周溝残欠とも見られるが、主体部が検出できなかった現状では判断し難い。また、溝が大きく、遺構に伴う柱穴も無いこと等から竪穴建物とも考えられない。遺構の性格は結論づけられないが、時期はやや古いものの、類似の遺構は当遺跡D区でも確認されており<sup>10</sup>、今後の調査例の増加を待ちたい。

#### SX16 (第151図)

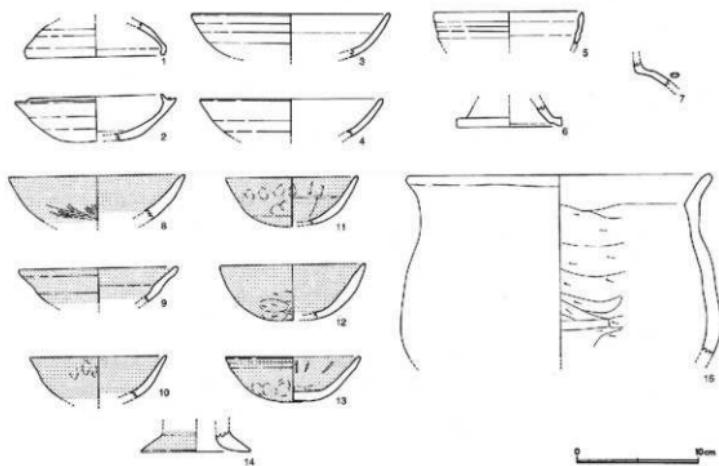
調査区北東端の落ち込み状遺構である。試掘調査の結果から、神戸川に向かって次第に地形が



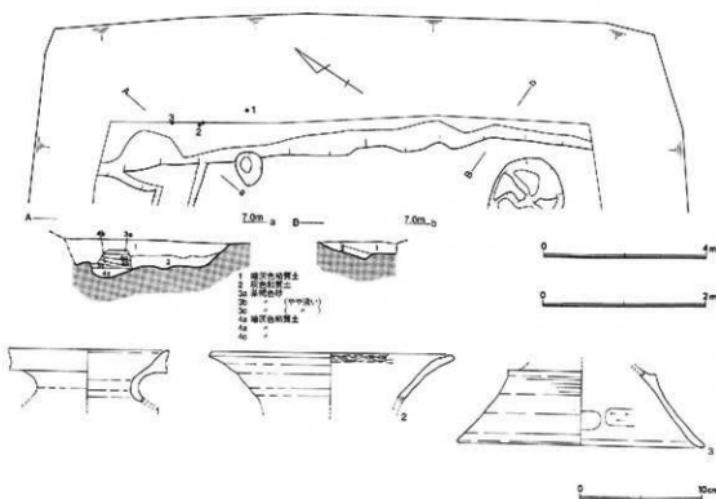
第149図 SX14実測図 (1:60)

低くなることが確認されていることから、その起点である可能性もある。

出土遺物の1は弥生後期前葉の甕、2・3は終末期の鼓形器台である。



第150図 SX14出土遺物実測図 (1:4)



第151図 SX16、出土遺物実測図 (1:120、土層図1:60、遺物1:4)

### 第3節 J区の調査

**遺構の配置と概要（第152図）** J区は、平成10・11年度の2カ年にわたって調査を実施し、調査面積は2339m<sup>2</sup>である。近年までは水田として利用されていた。調査の結果、弥生時代後期～近世に至る多くの遺構を検出した。主な遺構は、弥生時代後期前葉の溝、弥生時代後期・終末の堅穴建物、古代・中世の井戸、古代の掘立柱建物、中・近世の土坑・溝等である。

遺構は調査区全域に広がるが、北側は近世の大溝と柱穴がわずかに見られるだけで、直角に屈曲する近世溝以南の様相と大きく異なっている。また、北端部付近では地形の落ち込みも確認されている。現状では客土が置かれているが、遺構が希薄な状況から、中世までの段階では地形に制約されていたことが窺える。

遺構の種別による配置状況として、井戸やその可能性が考えられる土坑は、H I・II区と同様に一箇所に集中する傾向が認められる。また、堅穴建物が調査区の東側に偏っているのも特徴的である。古代と考えられる掘立柱建物は今回の調査で3棟確認されたが、いずれも東西または南北に主軸を置くものである。また、土坑もSD07・09の東側に連続的に掘り込まれるなど、ある程度の分布傾向が見られる。

**包含層** 遺跡の層序については第3章で述べたとおりである。このうち3層は、H I・II区に見られた粘性の強いものではなく、やや粗い砂礫を含むものであった。巻頭図版3では明治7年には集落が見られるが、近世後半以降の遺物はH I・II区に比べて極めて少ない。調査は、基本的には4層中程まで重機掘削を行い、グリッドを設定して人力掘削を行った。グリッドは国土座標系に沿って、東に0, 1, 2・・・南にA, B, C・・・と10m間隔に区切って設定した（第153図）。

**包含層出土遺物（第154～156図）** 154-1～12は弥生土器である。1はIV-2様式の甕で、肩部に4段以上の列点文が施される。2～4は草田1期の甕、5～8は草田2～3期の甕である。5・7・8は口縁部に貝殻復縁による擬凹線文を施す。8は大形で、肩部の上位に雜な羽状文を、体部下半にはたて磨きを施す。9は草田1期の高坏で、内外面を赤彩し、拡張部には擬凹線文が施される。10・11は鼓形器台、12は低脚坏である。

13～17は土師器である。13は古墳時代後期前半の甕である。16・17は内外面赤彩の坏で、16は外面手持ちへら削り、内面にはへら状工具の圧痕が放射状に認められる。18は手捏土器、19はつぼである。20・21は土製支脚、22は移動式竈の焼き口側部資料である。

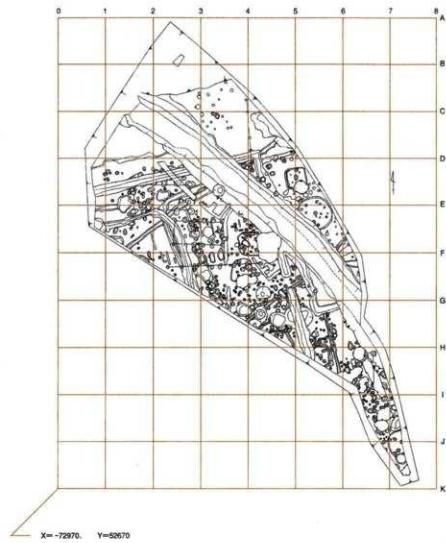
155-1～9は赤彩土師器である。1は擬宝珠状つまみ、2はそれを押し潰した形状のつまみが付く蓋である。3～6は坏で、6以外は外面に磨きが施されるが、いずれも暗文は無い。1～6は8世紀以降と考えられる。7は高台付きの皿か盤で、内面に螺旋状に暗文を施す。9は皿である。

10～24は須恵器である。10～16は坏蓋で、11～13はかえりが付くタイプと考えられる。蓋はいずれも7世紀後半～8世紀前葉頃のものであろう。17～21は坏身、22は皿である。17は復元口径が12cm前後のもので6世紀末～7世紀初頭、18～20は高台が開くタイプで7世紀末から8世紀前葉のものであろう。21は底部が回転糸切りで、口縁部は欠損するが端部にアクセントを持つものと考えられ、8世紀後半のものであろう。23・24は甕で、9世紀代のものか。23は外面に平行叩きの後かき日を施す。

25～33は糸切り底の上師器である。25～28の坏は13世紀後半代のものである。29は13世紀代、



第152図 J区造構配置図 (1:300)



第153図 J区グリッド設定図 (1 : 800)

30は17世紀以降の小皿と考えられる。31～33は柱状高台皿で、13世紀後半頃と考えられる。

34～42は土錘である。34は2か所に穿孔する棒状土錘で、35～42は管状土錘である。

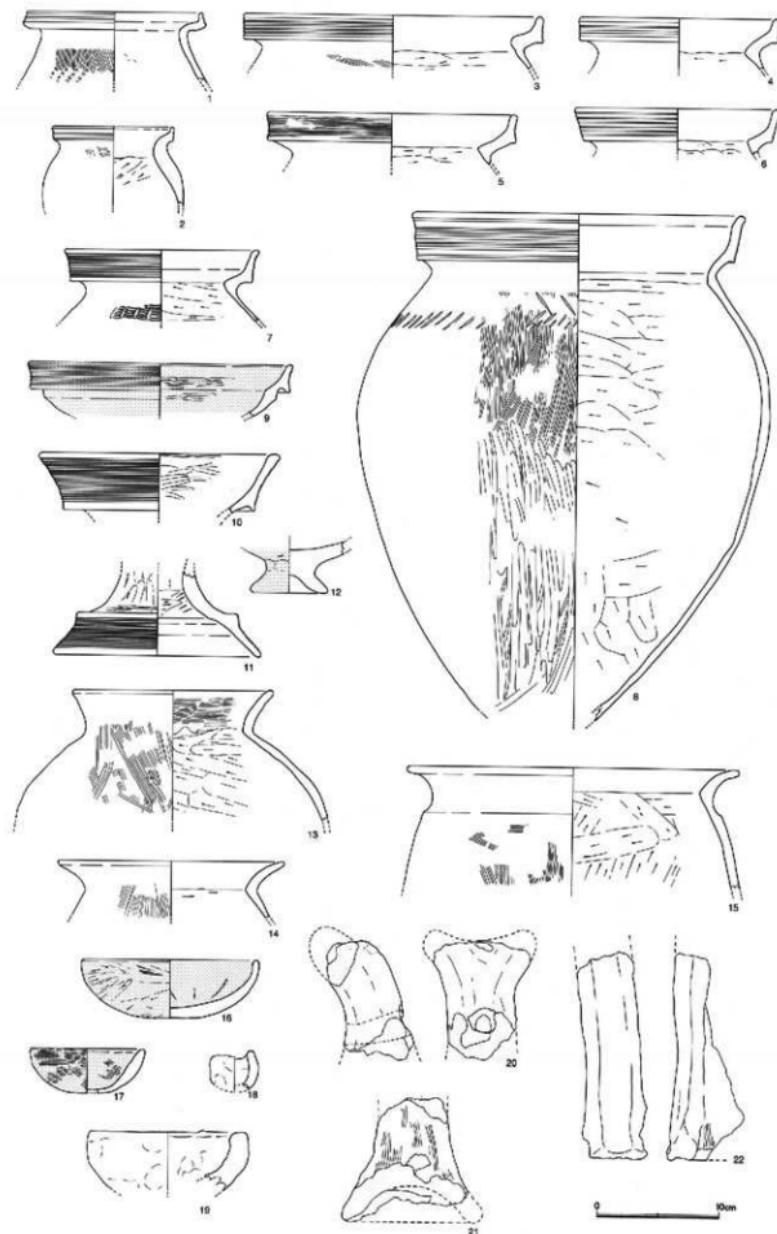
43は筒状の土製品で、用途は不明である。被焼した痕跡など認められない。44は硯と考えられる石製品で、海から陸部にかけては欠損している。45は灰褐色の板状石製品で、片方の長側面には擦切溝と2次加工による擦痕が残るが、不完全である。石材は不明だが砥石の可能性もある。46は内磨き砥石である。

47は用途不明の銅製品で、両側部にバリが残る。48は鉄鎌で、目釘が残存する。49は小柄で、刃部は欠損する。柄には彫金で兔・月・波・雲が表現される。156-1・2は銭貨である。

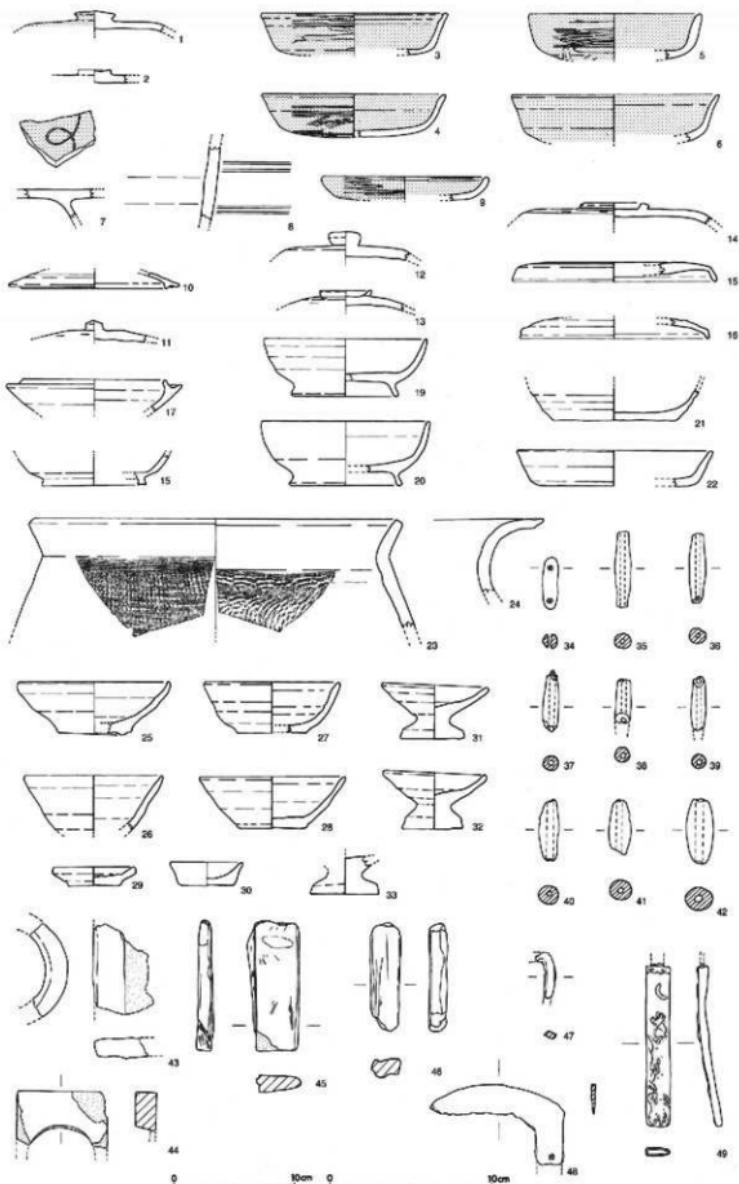
第7表 J区出土銭貨計測表

No.	銭名	初鑄年	銭径(A)/錢徑(B)	内径(C)/内径(D)	錢厚	量目
156-1	政和通寶	1111	—	—	1.30	2.70
156-2	寛永通寶	1636	24.60	24.70	19.80	19.60

(単位: mm・g)



第154図 J区包含層出土遺物実測図 (1) (1:4)

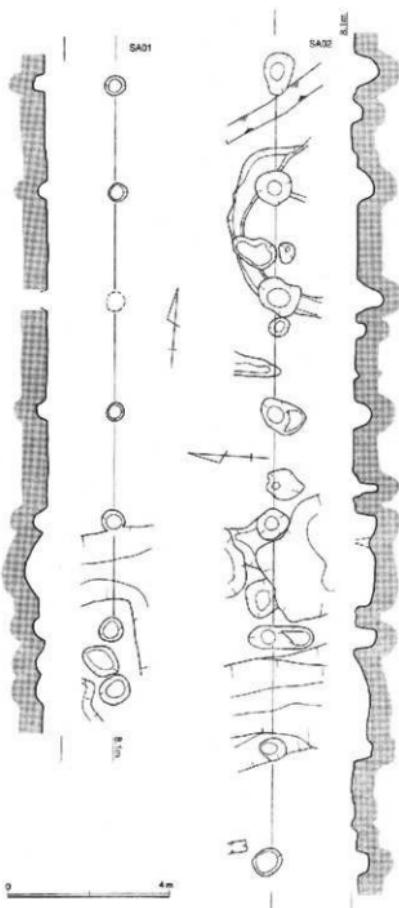


第155図 J区包含層出土遺物実測図（2）(1:4 47~49は1:3)



第156図 J区包含層出土銭貨拓影 (1:1)

0 5cm



第157図 SA01・02実測図 (1:120)

### 1. 檻列

#### S A 0 1・0 2 (第157図)

調査区を南北及び東西に走る横列である。主軸は S A 0 1 が N - 5° - W、S A 0 2 が N - 87° - E で、直交する位置関係にあるが、交差する地点は擾乱や溝などの構造で不明瞭となる。

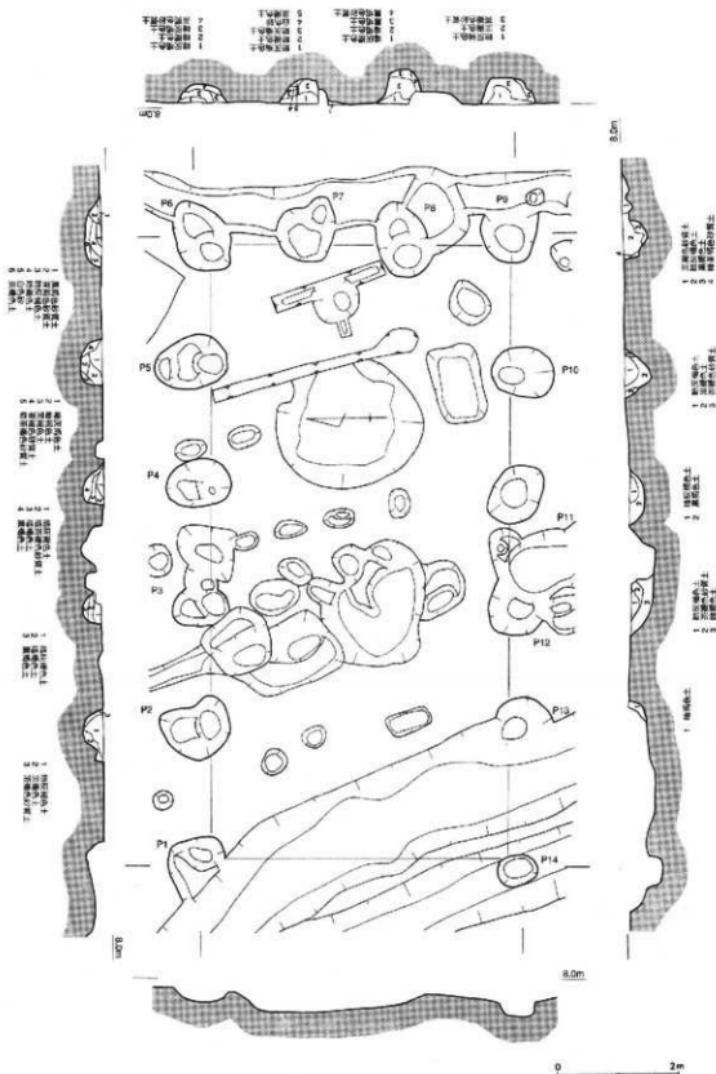
S A 0 1 のピットは平面円形で、上端径45~60cm、深さ30cm前後と概ね同規模である。一方 S A 0 2 では、上端の平面形に多様性が認められ、規模も径75~100cm前後と大きいが、下端は全て円形である。検出面のレベルの違いからも分かるように、S A 0 1 の掘方は30cm程削平されていると考えられ、両者の違いはその結果生じたものと考えられる。

**S A 0 1** 北側は調査区外へ延びて、南側は近世の大溝や擾乱に切られている。調査で明確となったピットは5基で、北から3番目のピットは検出できなかったが、空撮写真ではその痕跡がおぼろげに認められた。6間（1間276cm）以上の檻列であったと考えられる。出土遺物は無い。

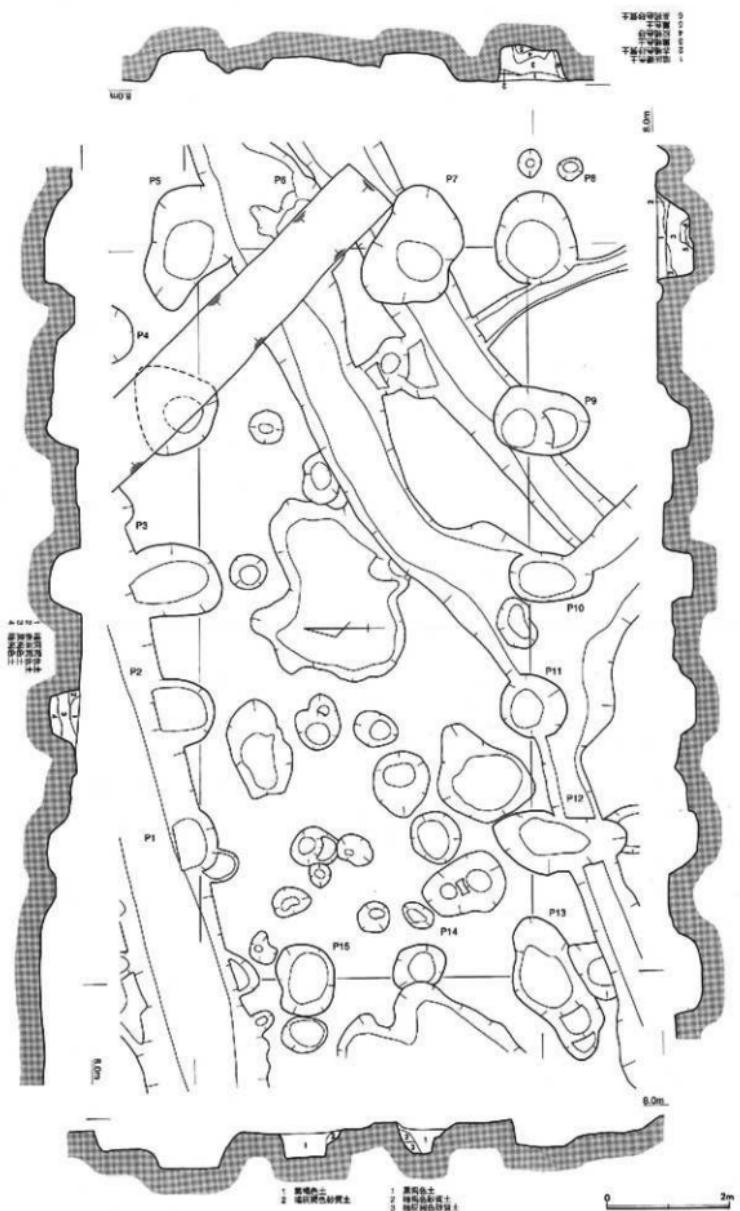
**S A 0 2** 現状で7間（1間285cm）確認されており、西側は調査区外へ延びていく。東側は擾乱などがあるため判然としないが、現状で東端として認識できるピットの次に該当するものが無いことから、S A 0 1との関係が想定される。出土遺物はない。

2条の檻列が同一のものか現状では断定できないが、状況的

にはその可能性が高いといえる。また、配置状況・建物主軸から、この柵列は次に述べるSB01またはSB02に伴う可能性が高い。



第158図 SB01実測図 (1:80)



第159図 SB02実測図 (1:80)

## 2. 堀立柱建物（第158～161図）

### SB01・02

調査区のはば中央から西側に位置し、2棟はわずか2mの距離をおいて平行に配置されているが、妻の柱筋は通っていない。

**SB01（第158図）** 3×5間の側柱建物で、西側は中世の溝SD07・09に切られているが、幸うじてP14が検出できた。規模は梁行5.3m、桁行10.4m、床面積55.12m<sup>2</sup>で、棟方向はN-90°-Wである。柱間は梁行で177cm（6尺）、桁行で208cm（6.9尺）である。

柱穴は平面楕円形もしくは隅丸長方形で、規模は上端で長軸長100～130cm、短軸長70～96cm、深さ36～56cmを測る。柱穴内の堆積状況は様々だが、P7では柱痕が確認された。

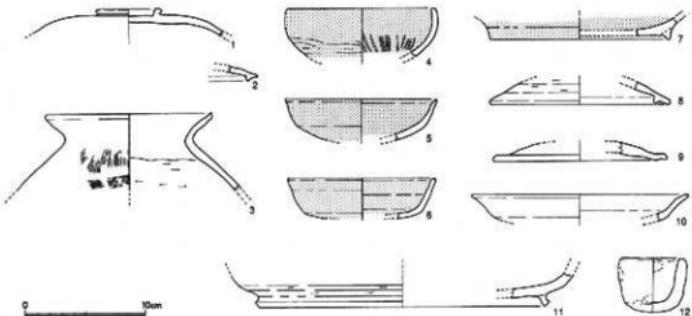
遺物は（第160図-1～3）、1・2がつまみの付く須恵器の壺蓋である。別個体だが、1もかえりが付くタイプと考えられる。3は単純口縁の壺で、口縁部はやや内湾気味に肥厚し、端部をわずかに引き上げる。

**SB02（第159図）** 3×5間の側柱建物で、柱穴はSB01と同様に南側はSD07・09に、北側は近世の溝SD22に切られていた。規模は梁行5.75m、桁行12.0m、床面積69.0m<sup>2</sup>で、棟方向はN-90°-Wである。柱間は梁行で192cm（6.4尺）、桁行で240cm（8尺）である。

柱穴は平面不整楕円形または不整隅丸長方形で、規模は上端で長軸長96～250cm、短軸長88～130cm、深さ40～65cmである。掘方の平面形が乱れているのは柱の抜取りによる可能性も考えられるが、柱穴内の堆積状況について十分な観察ができなかつたため明確ではない。P14では柱痕が認められた。

遺物は（第160図-4～12）、4～7が赤彩土師器、8～11が須恵器である。4は内面に放射状の暗文が施される壺である。5は口縁部内面に段が付き、外面もやや外反する壺で、底部は不安定なタイプである。6は口縁端部が丸味を持ち、底部は比較的平らな壺である。5・6とともに切り離し技法は不明である。7は皿か壺である。8・9は壺蓋で8は天井部に回転へら削りを施す。10は皿、11は盤である。12は手捏土器である。

2棟の建物は、その間隔が近すぎること、妻が揃っていないこと等から同時存在したものではないと考えられ、建て替えの可能性が高い。SB02は出土遺物も多く、8を除けば8世紀後半の



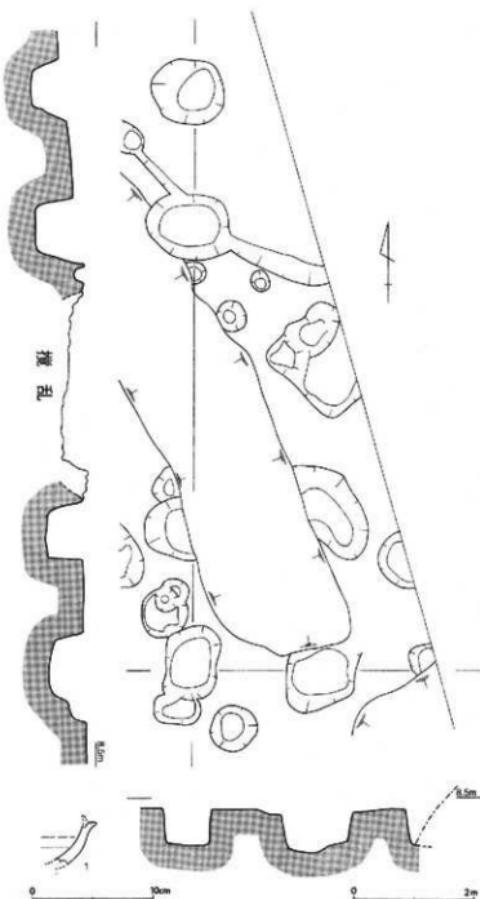
第160図 SB01・02出土遺物実測図（1:4、1～3はSB01、4～12はSB02）

中で捉えられるものである。一方、SB01の遺物は少なく、これだけで建物の時期を判断するのは問題だが、1・2はともに7世紀後半～8世紀前葉のものである。

### SB03(第161図)

調査区南部に位置する倒柱建物で、半分は調査区の壁にかかり、また、後世の擾乱を受けて全容は不明である。擾乱部を復元すると2間以上×4間以上で、梁行3.9m、桁行9.5m、床面積37.05m<sup>2</sup>である。柱間は梁行で195cm(6.5尺)、桁行で238cm(7.9尺)で、棟方向はN-Sである。

柱穴は平面不整隅丸長方形で、規模は上端で長軸120～136cm、短軸80～110cm、深さ56～80cmを測る。



遺物は、須恵器の坏身小片が唯一出土している。柱穴規模・建物主軸・埋土等からSB01もしくはSB02と同時期の建物と考えられる。

### 2. 竪穴建物(第162～173図)

#### SI01(第162図)

調査区中央部に位置する。平面は隅丸方形で、南側は後世の擾乱によって切られている。造構検出までに遺物が大量に出土しており、この段階で精査したが、埋土・堆積土とともに類似していたため掘方を認識せず、検出時には既にはば床面近くであった。

規模は4.4×5.0mで、全周しないか掘方沿いに幅40～60cm、深さ10～15cmの溝が検出された。壁体溝とは考えられず、性格は不明である。また、明確な中央穴は検出されなかったが、平面梢円形の主柱穴P1～P3を検出した。直径は40～55cm、深さは現床面から15cm前後で、P1-P2間1.9m、P2-P3間2.1mである。

遺物は現床面から5～20cm浮いたところで出土し、南西隅の器台は壊れているが、置いたよ

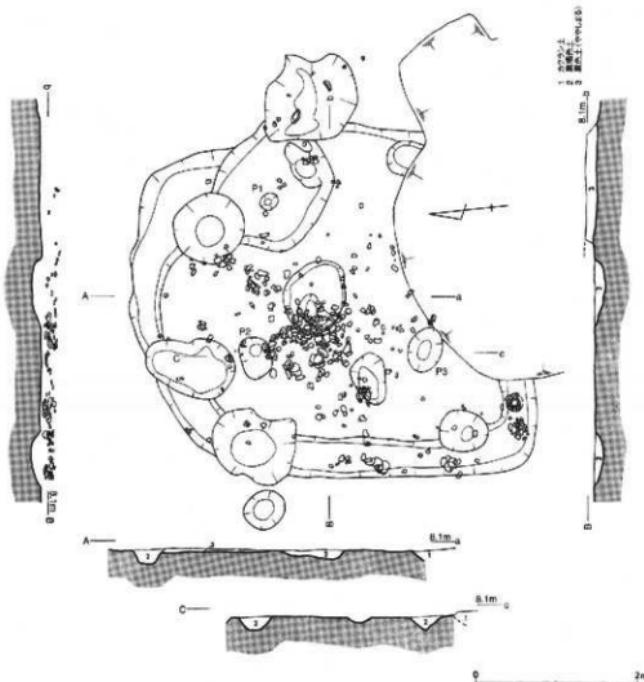
第161図 SB03、出土遺物実測図(1:80 遺物1:4)

うな状態で検出している。貼床は確認できなかったが、遺物の出土レベルが当時の床面と考えられる。

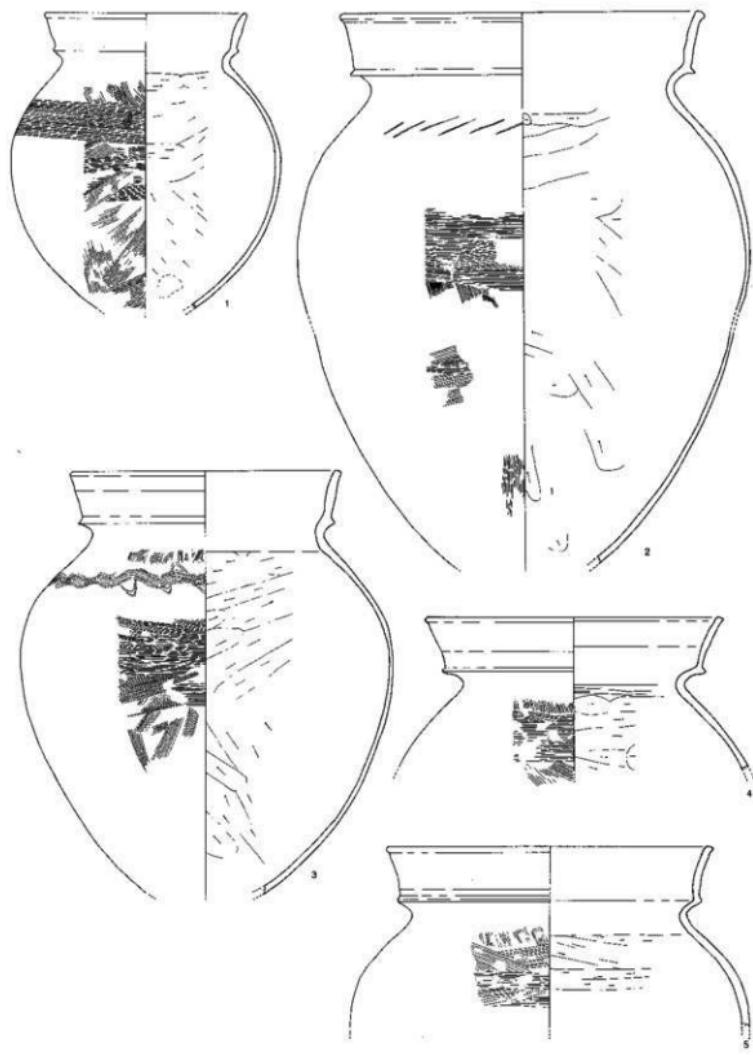
出土遺物のうち（第163～165図）、163-1～5は複合口縁の壺である。1は口縁端部が丸味を持ち、肩部には樹状原体による平行線文を巡らす。2は口縁端部が外側にやや肥厚して丸くおさめるもので、突出部は鋸い。肩上部の正面に刷毛状原体による8つの列点文を施す。3は肩部の正面だけにへら書き波状文を施し、更に樹状原体による波状文を巡らす。

164-1は壺で、刷毛調整の前に肩から体部半ばまで左上がりの叩きを加えている。底部は平底だが自立できない。2～8は単純口縁の壺である。2・3は口縁が外反し、肩部に波状文と列点文を施すが、2の列点文は7つだけで全周しない。3は小片だが、列点の無い箇所も見られる。6は口縁端部がやや内側に隆起するタイプで、底部には平底が残る。7は口縁部がわずかに内湾し、8は直線的に短く立ち上がる。9は直口壺である。11は復元脚部口径が15cmの小型鼓形器台で、外面にたて磨きを施す。12は砥石で少なくとも3面に使用痕が認められる。

165-1～3は草田1期の壺で、5は壺である。1は頸部下方に列点文を施す。4は草田5期の壺で、頸部下方に平行線文を巡らす。7・8は壺か壺の底部資料で、8は底部に未完通の穿孔痕が見られる。6は短頸壺、9・10は瓶と支脚である。

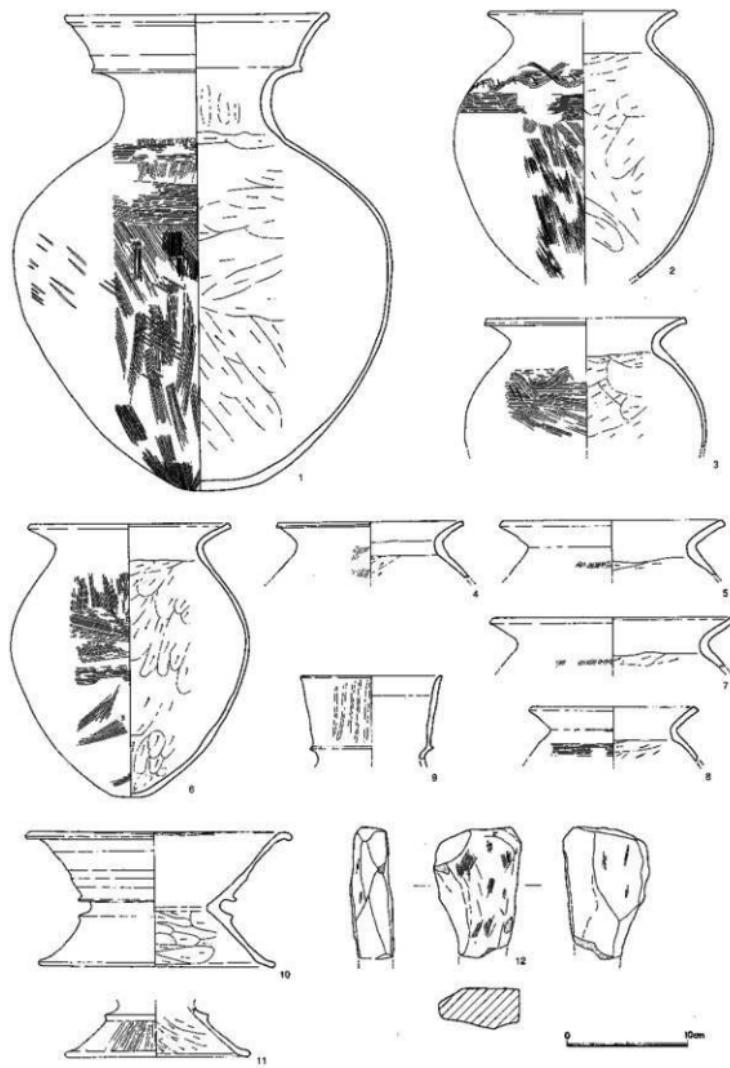


第162図 SI01実測図 (1:60)

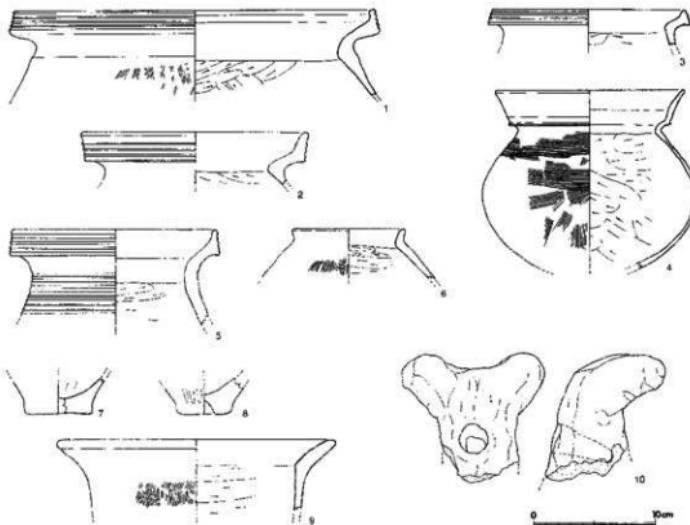


0 10cm

第163図 SI01出土遺物実測図(1) (1:4)



第164図 SI01出土遺物実測図（2）(1:4)



第165図 S101出土遺物実測図（3）(1:4)

第165図に示した古い遺物も出土しているがごく少数で、遺構の時期を示すものではない。165-1・6は平底を残すもので、164-1～3なども肩が張ることから、これらは概ね草田6期の古相を中心とする時期といえるが、9～11のようにやや新しいものも含まれる。

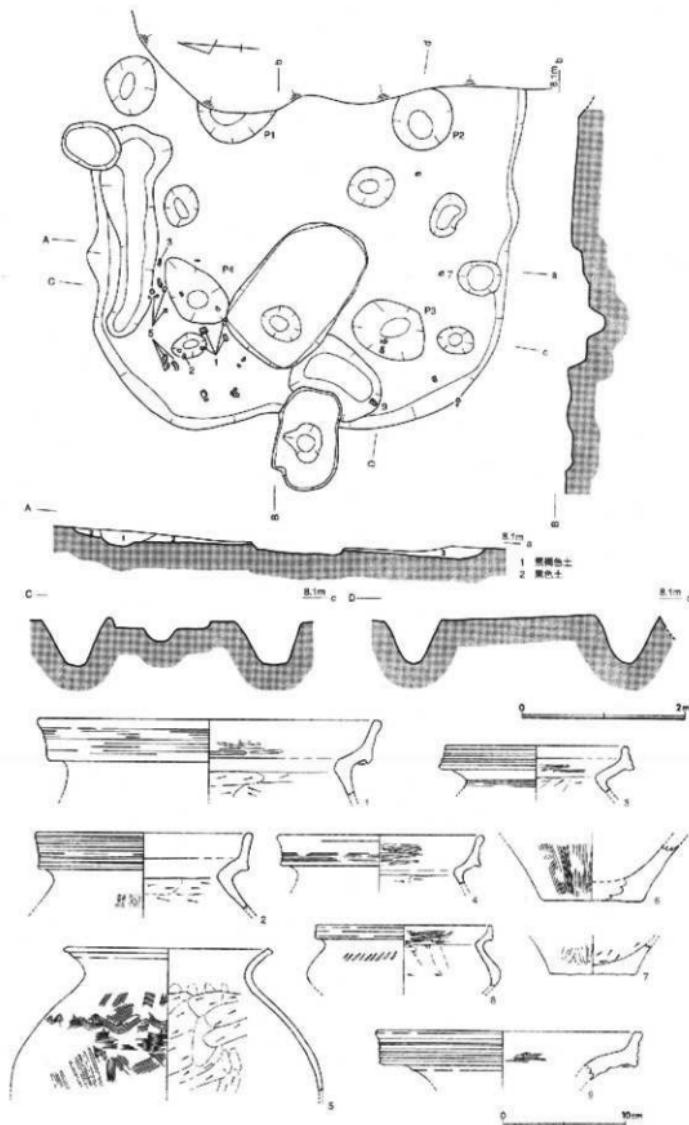
### S102 (第166図)

S101の南側に隣り合う平面隅丸方形の建物で、東側は擾乱されている。掘方検出時には既に床面近くであった。現状の規模は5.2×4.0mで、壁体溝や中央穴は無いが、平面円形または不整円形の主柱穴P1～P4を検出している。柱穴は、直径60～100cmで、床面からの深さは50cm前後だが、柱穴の上端は崩れて検出時よりも大きくなっている。P1～P2間で2.3m、P2～P3間2.5m、P3～P4間2.5m、P1～P4間で2.3mを測る。なお、P4の北側にある溝状の遺構は当遺構には無関係のものである。

浅い掘方内には黒褐色土が堆積しており、小片ながら遺物が若干出土している。

1・2・4は草田2～3期の壺である。1はやや外反気味に上下に拡張した口縁部に擬凹線文を、内面にはよこ磨きを施す。2・4は拡張した口縁部外面に貝殻復線による擬凹線文を施す。3は草田1期の壺で、口縁部は内傾し、外面には3条の凹線文を巡らす。5は単純口縁の壺で、肩上部に飾状原体による波状文が2単位巡る。6・7は壺か壺の底部資料で、6は外面刷毛目、7はたて磨きを施す。8は鉢で、口縁部は内傾して上方に拡張し、外面には2条の浅い凹線文を巡らす。また、原体は不明だが肩部に列点文が施される。草田1期の所産と考えられる。9は壺で、口縁拡張部には4条の凹線文を施す。

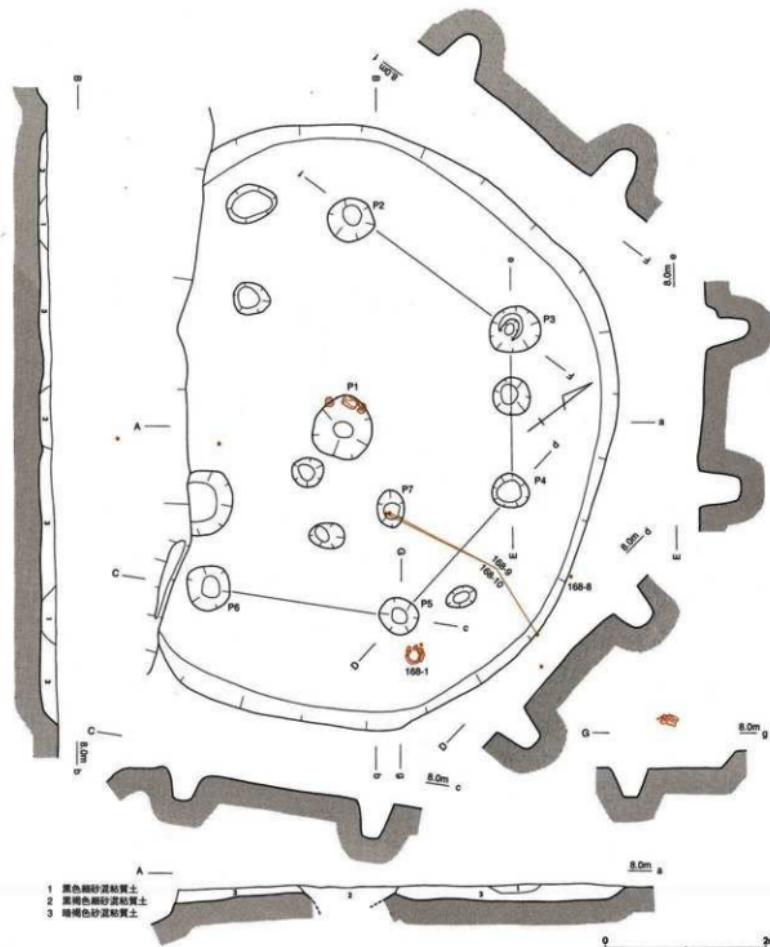
出土遺物には時期幅があるが、混入遺物との判別は難しい。



第166図 SI02、出土遺物実測図 (1:60 清査 1:4)

S I O 3 (第167図)

調査区北東部に位置する平面円形の建物で、西から南側は近世の大溝 S D 0 1 に切られていた。掘方は比較的良好に残っており、規模は径7.5m前後、深さ10cm前後で、現床面では壁体溝は認められないが、平面円形の中央穴 P 1 と、主柱穴 P 2 ~ 6 を検出した。P 1 は、径70cm前後である。P 2 ~ 6 は、径40~60cm、現床面からの深さ35~60cmである。P 2 - P 3 間で2.4m、P 3 - P 4 間で2.1m、P 4 - P 5 間で2.1m、P 5 - P 6 間で2.4mを測る。柱穴配置状況と柱間から復元する



第167図 SI03実測図 (1 : 60)

と、7本柱の建物であったと推測される。

建物内には、3層の暗褐色砂混粘土が堆積し、これを切るように中央穴及び主柱穴の埋土が堆積していたことから、3層は貼床と考えられる。

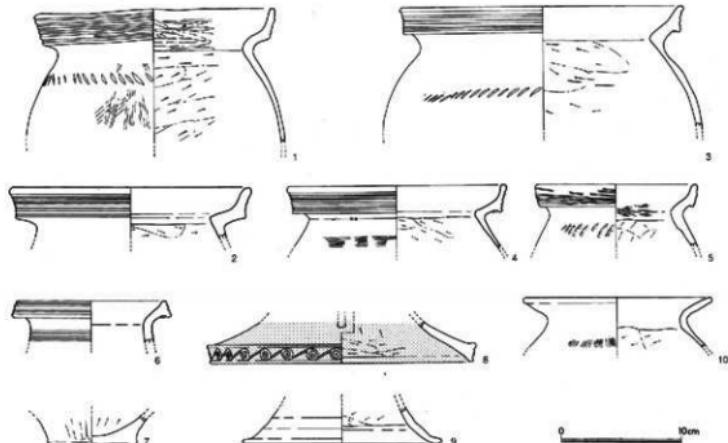
遺物は掘方の内外から出土しているが、P 7に落ち込んでいるもの以外は現床面及び検出面からやや浮いた位置で、貼床によるものと考えられる。現掘方の外に位置する遺物も削平部分を考慮すると建物内に収まるものである。なお、P 1からは石が出土しているが、特に被熱・加工した形跡は認められなかった。

出土遺物（第168図）のうち、1～5は複合口縁の壺である。1は口縁がやや外傾して立ち上がり、拡張部には5条のへら描平行沈線文を巡らす。肩部には列点文が施される。2は口縁拡張部に貝殻復線による擬凹線文を施すもので、口縁部はやや外反する。3も口縁がやや外反するが立ち上がりは短く、拡張部にも凹線文が巡る。肩部には列点文が施される。4は櫛状工具、5は貝殻復線による擬凹線文が口縁部に巡る。5は頸部下方に列点文も認められる。

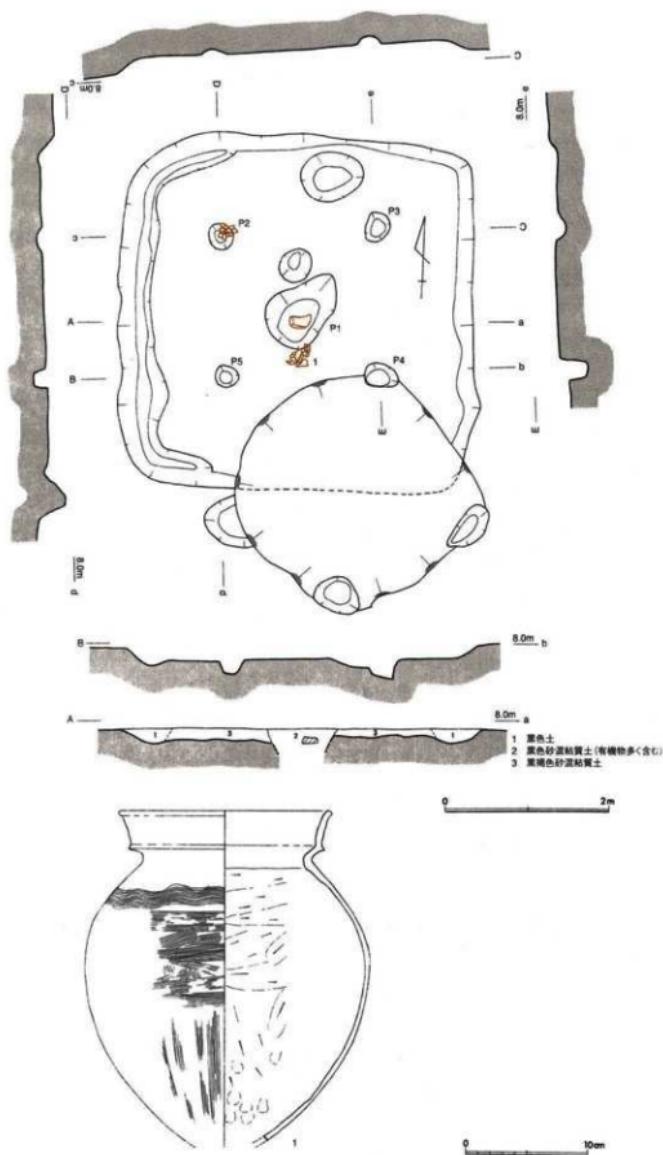
6は壺で、口縁拡張部及び頸部に凹線文が巡る。7は壺か甕の底部である。

8は器台と考えられ、内外面ともにわずかに赤彩の痕跡が認められる。拡張部には沈線でつないだ同心円スタンプ文が施され、筒部には方形透かしが残るもので、当地域では例を見ないタイプである。9は鼓形器台である。10は単純口縁の壺である。

遺物は弥生時代終末～古墳時代初頭の9・10を除くと概ね草田1～2期のもので、建物の時期を示すと考えられる。一方9・10はいずれもP 7から出土しており、後世、ピットに混入したものと考えられる。



第168図 SI03出土遺物実測図 (1:4)



第169図 SI04、出土遺物実測図 (1:60 遺物1:4)

#### S I O 4 (第169図)

S I O 3 の南側に隣接する、平面隅丸方形の建物で、南側は搅乱されていた。

掘方は比較的良好に残っており、規模は一辺7.5m前後、深さ10cm前後で、現床面で中央穴P 1、主柱穴P 2～5、内壁沿いで壁体溝をそれぞれ検出した。いずれも3層に掘り込まれていることから、3層は貼床と考えられる。また、A-aから分かるように、東壁部でも壁体溝と考えられる立上がりが認められた。

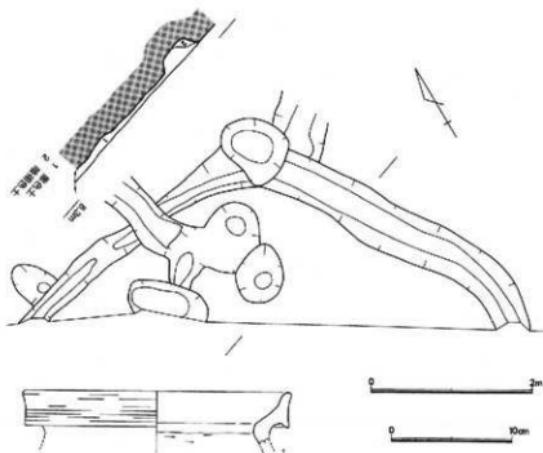
P 1は平面不整梢円形で、径70～105cmで、底面付近から自然石が1点出土している。P 2～5は、径25～40cm、現床面からの深さ10～35cmである。P 2～P 3間で1.95m、P 3～P 4間で1.85m、P 4～P 5間で1.9m、P 5～P 1間で1.75mを測る。

遺物は少なく、P 1の南側と、P 2に落ち込んだ土器片以外は出土していない。1は淡黄褐色の壺で口縁端部が比較的厚く、外側にアクセントを持つもので、突出部は水平方向に比較的鋭く出る。また、体部は倒卵形で、肩部には波長の長い波状文を施すもので、草田6期に相当すると考えられる。

#### S I O 5 (第170図)

調査区南壁際に位置する建物で、遺構の半分以上が壁にかかるため全容は不明だが、隅丸方形ないしは円形プランと考えられる。掘方の規模は壁際で6.4m、深さ10cmで、建物内部の現床面で柱穴を4基検出しているが、遺構に伴うものか現状では不明である。また、壁際で幅25～40cm、深さ20cmの壁体溝と考えられる溝を検出している。

遺物は少なく、草田2期に相当する弥生土器1点のみで、建物の時期を判断するのは困難である。



第170図 S I O 5、出土遺物実測図 (1:60 遺物1:4)

### S106 (第171図)

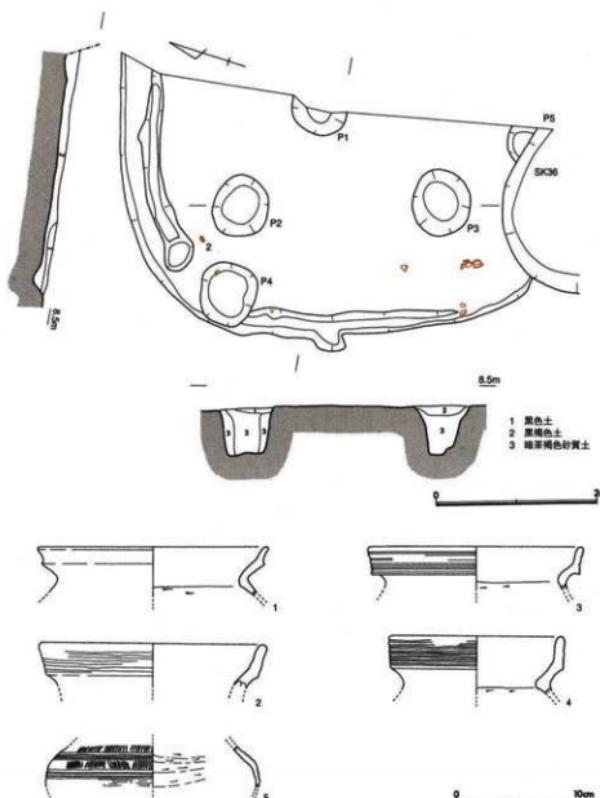
調査区南端に位置する建物で、平面は円形に近い隅丸方形を呈す。南側はSK36に切られ、東側は調査区外へと続く。上面はかなり削平されており、検出時は既に床面近くであった。

全容は不明だが、現状で一辺5.5mほどで、深さは10cmである。現床面で掘方沿いに壁体溝と、平面円形のP1～5を検出した。P1は中央穴、P2・3は主柱穴、P4・5は建物には伴わないと考えられる。P2・3はいずれも径70cm、深さ60cmほどで、その柱間は2.5mである。

遺物は、建物内の西側ではほぼ床面上から出土している。1～4は甕である。1は口縁部が外反気味に短く立ち上がり、拵部は無文である。2～4は口縁が直立かやや外傾し、擬凹線文を施す。

5は加飾壺の体部資料で、3条の擬凹線文を2か所に巡らせ、各上部には爪跡状の列点文を施す。下段の凹線文下方にはよこ磨きを加える。

これらは、概ね草田2期に相当すると考えられる。



第171図 S106、出土遺物実測図 (1:60 遺物1:4)

S I 07 (第172図)

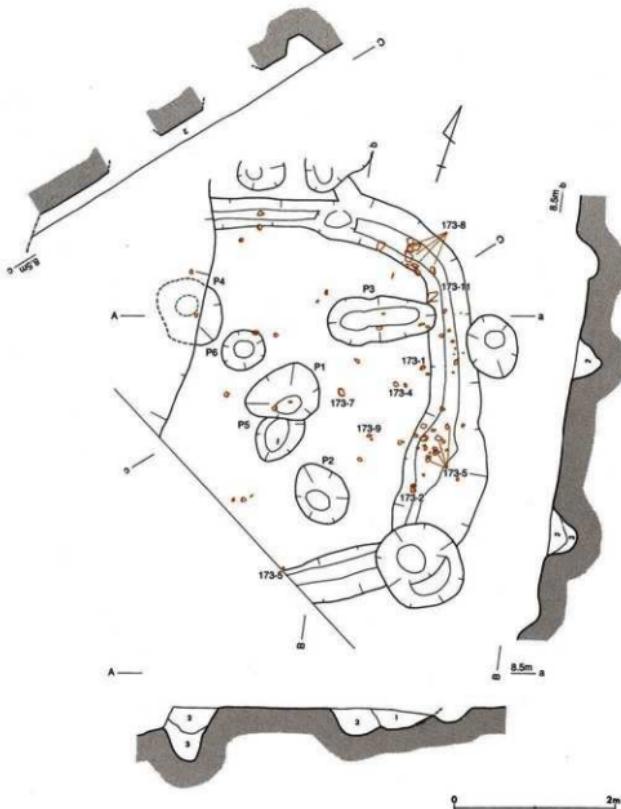
S I 05 の東側に隣接する平面隅丸方形の建物で、西側は近世の溝 S D 1 6 に切られる。

掘方は比較的良好に残っており、規模は一辺 5 m 前後、深さ 20 cm 前後で、現床面で壁体溝と考えられる幅 30~80 cm 、深さ 15~30 cm の溝と、 P 1 ~ 3 · 5 · 6 のほか、 S D 1 6 の埋土下から P 4 を検出した。なお、図示した溝は崩れて検出時よりも大きくなっている。

P 1 は中央穴、 P 2 ~ 4 は主柱穴と考えられる。P 1 は平面不整梢円形で、短径 70 cm 、長径 90 cm で、 P 2 ~ 6 は、径 60~90 cm 、現床面からの深さ 30~65 cm である。柱間は P 2 ~ P 3 間で 2.3 m 、 P 3 ~ P 4 間で 2 m である。

建物内には黒褐色土が堆積していたが、特に硬化している状況ではなく、また柱穴や溝の埋土との切り合いは不明瞭で、貼床の有無は不明である。

遺物 (第173図) は建物東側から集中して出土しているが、溝に落ち込んだものではなく、床面レ



第172図 SI07実測図 (1:60)

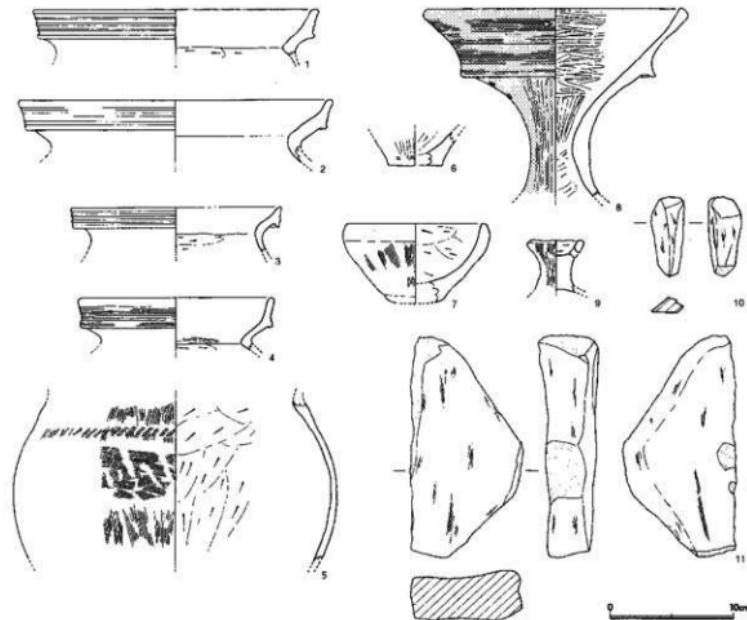
ベルまたはやや浮いた位置で検出している。1～5は甕である。1は口縁がやや外傾し、拡張部には4条の凹線文が、2は擬凹線文が施される。3は口縁が直立し、拡張部に4条の凹線文が、4は貝殻復線による擬凹線文が10条ほど巡る。5は口縁部を欠損するが、体部に櫛状工具による列点文が施される。6は甕か壺の底部で、7は鉢である。8は外面赤彩の鼓形器台で、器受部内面には丁寧な横磨きが、筒部上半には縱磨きが施される。口縁部は貝殻復線による擬凹線文が巡る。筒部上部には、補修孔とみられる穴が上下に並んでいる様子が認められる。9は蓋である。10・11は砥石と考えられる。これらは、概して草田2期を中心とするもので、建物の時期を示すと考えられる。

#### 4. 井戸

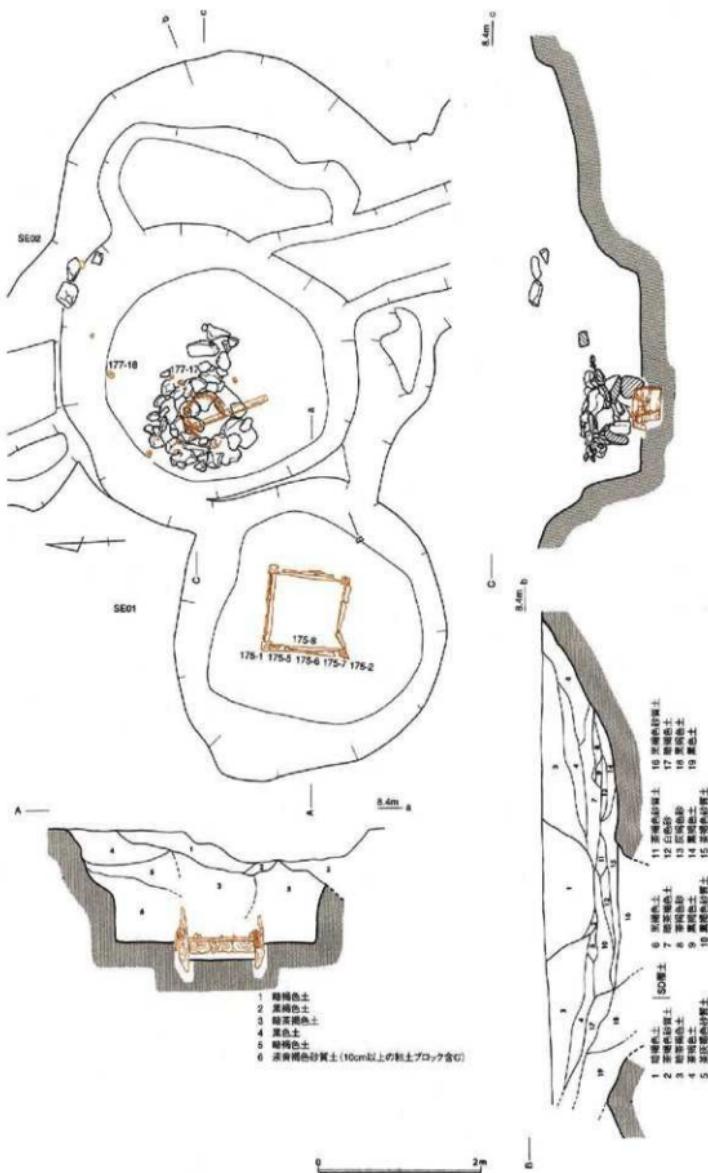
##### SE01・02(第174図)

S I 0 5 の北側に位置する2基の井戸で、切り合って検出した。また、S E 0 2 は近世の溝 S D 1 6 とも切り合う。上層観察からこれらの前後関係は、S E 0 1 → S E 0 2 → S D 1 6 である。

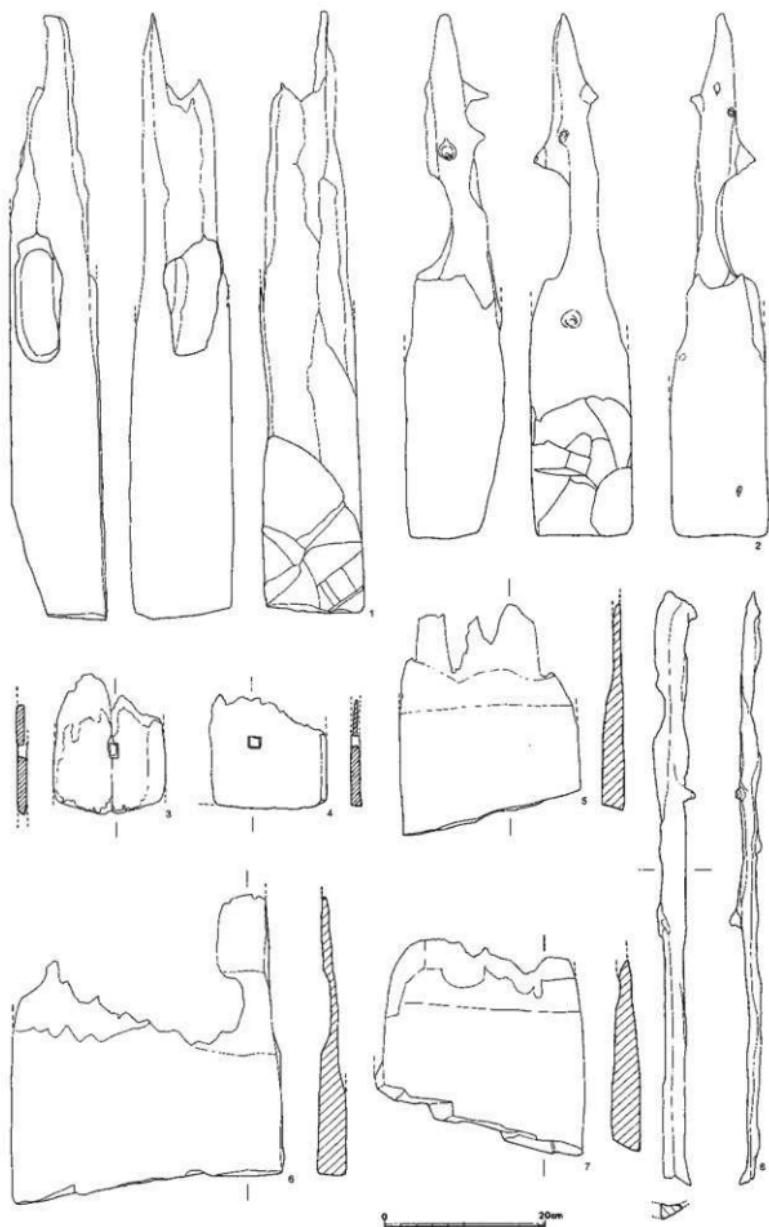
**S E 0 1** 堀方は平面円形で、長径3.9m、短径3.4m、深さ1.4mを測るが、最下部は湧水のため確認はできなかった。不整形な堀方底部の中央には木組みによる井鶴が遺存していた。井鶴は、四隅に柱を設け、各辺に縦板を並べ立てたもので、内側には板材の支えとなる桟木を配した縦板組隅柱横棟型であった。井筒は湧水と砂のために確認することはできなかった。



第173図 SI07出土遺物実測図(1:4)



第174図 SE01・02実測図 (1:60)



第175図 SE01出土井側部材実測図 (1:6)

堆積状況はA-aに示したもので、1・2層はSE02の堆積土である。中央部に縦に立ち上がる3層が認められることから、擾乱は受けておらず、井戸は、本来1層下面まではあったと考えられるが腐食したようである。4~6層は表込めと考えられる。

遺物のうち、第175図-1~8は井戸の部材で、遺存状態の良いものを図示した。樹脂は不明である。1・2は一辺12.5cmの丸太材を加工した隅柱で、1は現状で長さ75cmを測る。下側部の1面に手斧による加工が施される。柱を打ち込みやすくするためと考えられるが、下端面は残り、完全に尖らせた形跡はない。また、下端から約30cmの位置にはぞ穴が2方向から梢円形に削り抜かれ、最上部にもわずかにはぞ穴の痕跡が認められることから、20cm程度の間隔でぞ穴が設けられていたと推測される。

3・4は隅柱に挿入した桟木を反対側でこれと固定する板材である。一辺約13~14cm、厚さ1.2cmの板目材で、中央には一辺1~2cmのぞ穴が削り抜かれている。

5~7は縦板で、幅22~33cm、厚さ3cm前後の板目材を使用している。桟木が当たる部位はU字状に浅く窪められている。

8は桟木である。長さ約73cmで両端部は細く尖るが、側面には筋が残り、目立った加工痕は認められない。

第177図-1~9は糸切り底の土師器である。1~4は壺で、4以外は比較的器高が低いタイプである。5~7は小皿、8・9は柱状高台皿である。10は内外面赤彩の土師器壺、11は須恵器の壺で、糸切り底である。12は手挽土器である。13~15は土師器の蓋である。

糸切り底の土師器は概ね13世紀後半~14世紀のものだが、1~3と4・8・9で新旧が見られ、井戸の構築時期と廃絶時期を示す可能性もある。

**SE02** 挖方は平面梢円形で、長径6m、短径5.1m、深さ1.4mであるが、西側の長径3.8m、短径3.4mの範囲で一段深く掘り込まれており、これが井戸本体の掘方と考えられる。東から南にかけてはテラス状に段が取り付く。

本体部の西側に寄った位置からは、石組みの井筒とその下位から曲物による井筒・板材を検出した。井筒は、30~40cm大の自然石を基部に配置し、上部は10~20cm大の比較的小な石が使用されていた。井筒は西側が破損し、板材はその破損部を閉じるように倒された状態で出土しているが、その意図は不明である。

堆積状況はB-bに示したもので、1・2層はSD16の埋土である。井戸本体部分の堆積状況は湧水と井筒のため十分に観察することはできなかったが、16・17・19層上面を境に上下の堆積状況は大きく異なる。また、この面は東側のテラスに連続し、C-cから分かるように井筒の最上部もこれと対応する状況から、この面は明らかに後世の擾乱と考えられる。擾乱土からは井筒に使用していたと考えられる石材も出土している。井戸廃棄時の所産と考えられる。

曲物は(第176図)、全周しないが復元すると直径42.5cm、高さ24.5cmほどで、1か所に継ぎ目が残る。天地は不明である。

遺物は(第177図-16~24)、主に擾乱土中から出土しているため、先述のSE01の遺物も含んでいる可能性もある。16~21は糸切り底の土師器である。22は在地産と見られる陶器のすり鉢で、出雲焼と俗称されるものである。23・24は須恵器の蓋と盤である。

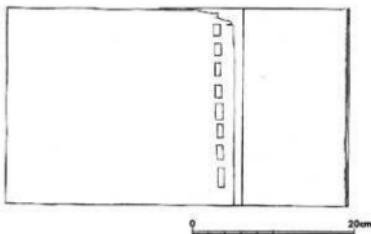
土師器は13世紀後半~14世紀に見られるもので、SE01の廃絶後に連続的に使用していたと

考えられる。

## 5. 土坑 (第178~187図)

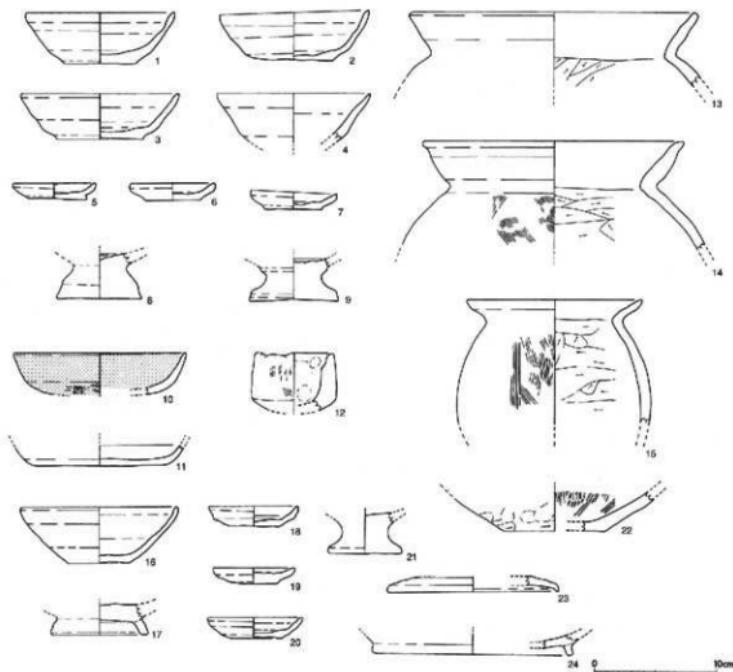
### SK01 (第178図)

SE01の北側に位置する平面不整円形の土坑で、中央部は2段堀状に深く掘り込まれているが、底部は湧水と砂のために確認はできなかった。規模は長径3.2m、短径2.6m、深さ1.2m以上を測る。



第176図 SE02出土井筒実測図 (1:5)

中心となる堆積土は1層で、中心部からの立ち上がりは認められず、また、井筒等の部材も出土していないことから上坑としたが、掘方の構造や規模を考慮すると、井戸であった可能性が高い。遺物は(第178図-1~6)、1~3が須恵器、4・5が糸切り底の土師器、6が管状土錘である。図示した以外にも土師器の小片が多数出土していることから、中世



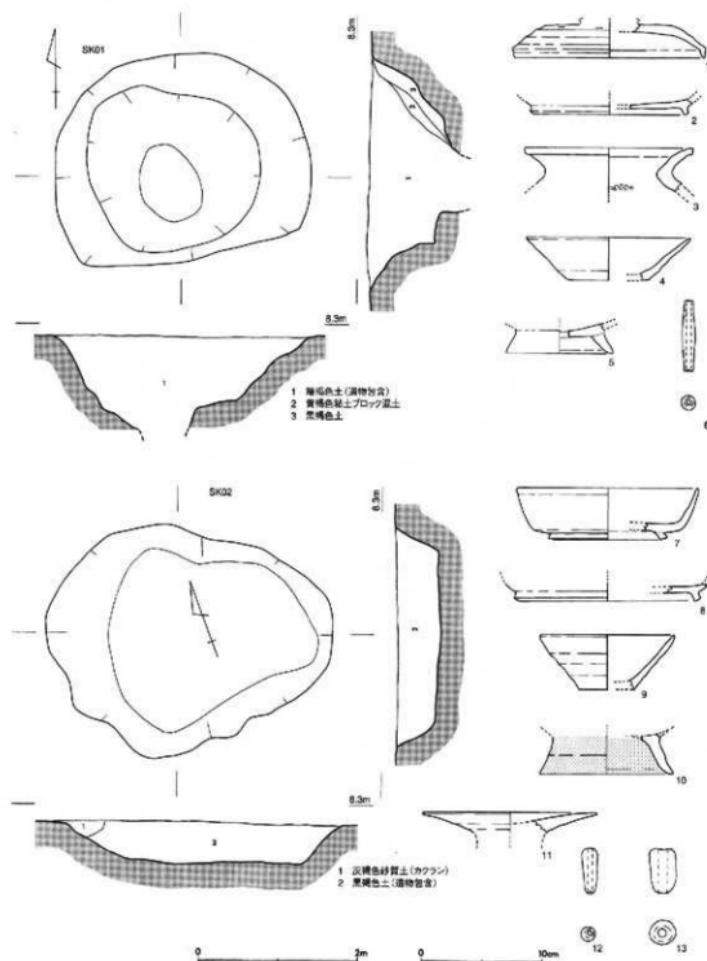
第177図 SE01・02出土遺物実測図 (1:4、1~15はSE01、16~24はSE02)

の遺構と考えられるが、時期幅があり、遺構の時期を限定することはできない。

### SK02 (第178図)

SK01の南西に隣り合う平面不整梢円形の土坑で、底部には平坦面をつくる。規模は、長径3.2m、短径2.8mで、深さは50cmと比較的浅く、湧水は無い。

掘方内は黒褐色土が1層堆積し、遺物（第176図-7～13）が出土している。7・8は須恵器の



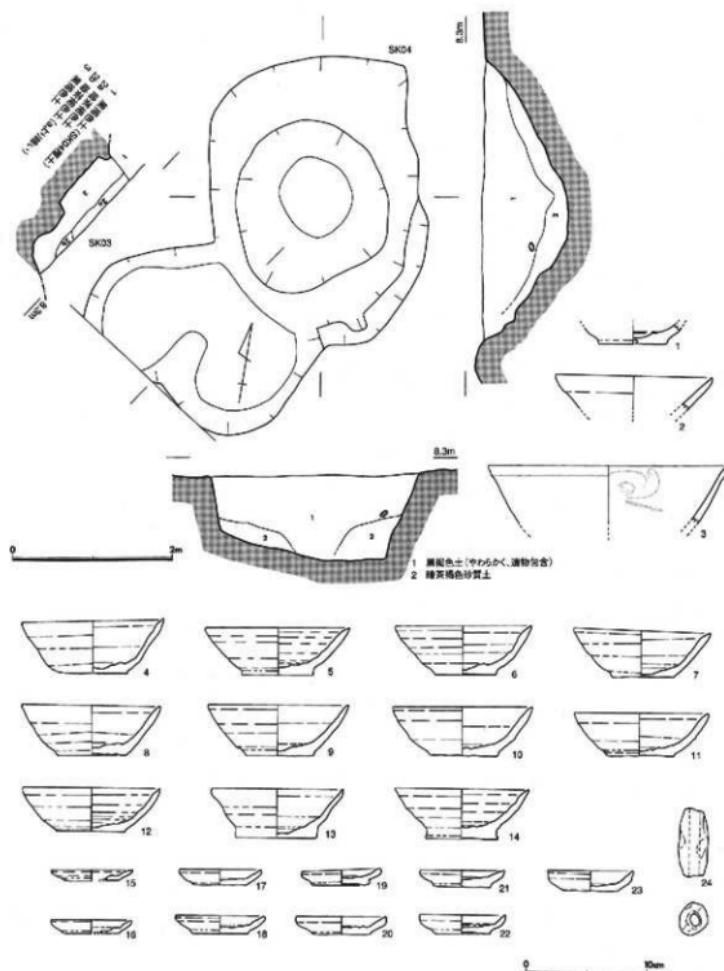
第178図 SK01・02、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4、1～6はSK01、7～13はSK02)

坏と整と考えられる。9～11は土師器で、10は内外面赤彩で足高の高台が取り付く。11は高台付きの皿である。12・13は管状土錐である。土師器は11世紀を中心とする時期と考えられる。

### SK03・04 (第179図)

SK02の南側に位置する2基の土坑で、SK03はSK04に切られる。

**SK03** 2基の土坑が重複している可能性もあるが、検出面では切り合いは確認できなかった。



第179図 SK03・04、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4、1～3はSK03、4～24はSK04)

平面不整円形で、規模は長径3.6m、短径2.6m、深さ0.5mである。埋土上層から遺物が出土している。179-1・2は糸切り底の土師器である。3は龍泉窯系青磁の鶴花文碗で12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

**SK04** 平面楕円形で、長径3.6m、短径2.6m、深さ1.1m以上である。実測図では断面は鉢形を呈すが、発掘当初は、中央は2段壺状に深く掘り進められていた。これは、湧水が著しく、砂が寄り、固化の際にかなり理まったためである。遺構内の堆積状況は、南北断面では判然としないが、東西断面では明瞭な立ち上がりが見られた。井側等の部材を検出しなかつたため土坑としたが、井戸であった可能性が高い。なお、1層は観察では擾乱を受けていなかったが、土師器片が多量に出土している。廃棄時に祭祀的行為が行われたと考えられる。

出土遺物は（第179図－4～24）、4～23が糸切り底の土師器で、残りの良いものを図示した。15・17・18・20・23・24以外は底部から出土したものである。坏は、4～8は口縁部が肥厚した後鋸く尖るもの、9・10は肥厚せずに尖るものである。11・12は器高が低く、13・14は底部が柱状高台様に高くなるものである。小皿も、口縁の形態と器高に多様性が見られる。24は管状土錘である。

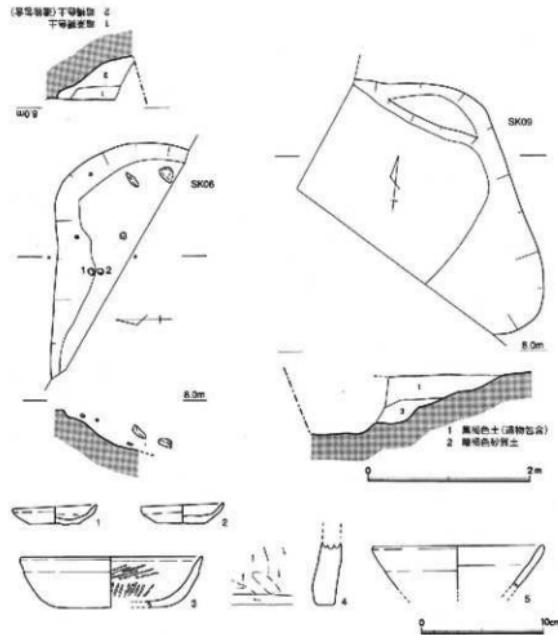
土師器は多様性が見られるものの、13世紀後半から14世紀の中で捉えられるものである。

#### SK06(第180図)

調査区西端部に位置する土坑で、調査区壁にかかるため全容は不明である。壁際で長さ3.3m、深さ0.5mを測る。水田の脇ということもあり、深さのわりに湧水が著しかった。

土坑内には茶褐色系の土砂が堆積し、2層から遺物が出土している。

1～3は土師器で、1・2は糸切り底の小皿である。3は胎土が白灰色、外面は明褐色の坏で、赤彩していた可能性もある。内面には2段の放射状の暗文を



第180図 SK06・09、出土遺物実測図 (1:60. 遺物1:4. 1・2はSK06. 3～5はSK09)

施す。

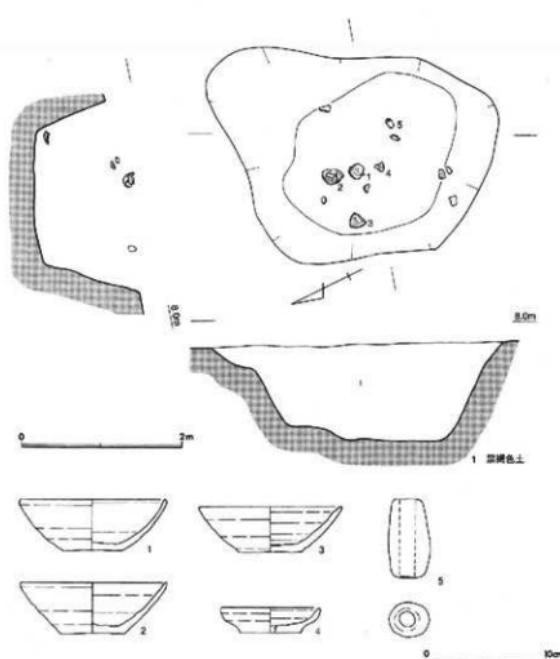
#### SK09(第180図)

SK06の北側に隣接する土坑で、調査区壁にかかるため全容は不明である。断面ラインの上端で長さ2.4m、深さ0.7mを測る。湧水が激しく、土層観察ベルトが倒壊したため、西側は堆積状況の観察が行えなかった。

1層から遺物が出土している(第180図-4・5)。4は移動式竈の脚部で、5は糸切り底の土師器である。この他に、図示できなかつたが、須恵器の小片も出土している。

#### SK18(第181図)

SK09の東側に位置する平面不整長方形の土坑で、長軸長3.7、短軸長2.5m、深さ1.2mを測る。土坑内には黒褐色土が1層堆積し、最上面から土師器を検出した。1~4は糸切り底の壺と小皿で13世紀後半~14世紀と考えられる。5は管状土錐である。



第181図 SK18、出土遺物実測図(1:60、遺物1:4)

#### SK25(第182図)

調査区中央付近に位置する平面不整円形の土坑で、径2.3~2.5m、深さ0.3mである。土坑内には、黒褐色土が堆積していた。出土遺物は図示できなかつたが、土師器、須恵器、糸切り底の土師器等の小片が出土している。

#### SK26(第182図)

SK18の北側に位置する不整形な浅い土坑で、複数の遺構が重複している可能性もあるが、平面・断面共にその様子は確認できなかつた。規模は南北1.9m、東西2.8m、深

さ0.3m前後を測る。土坑内には黒褐色系の土砂が自然堆積していた。

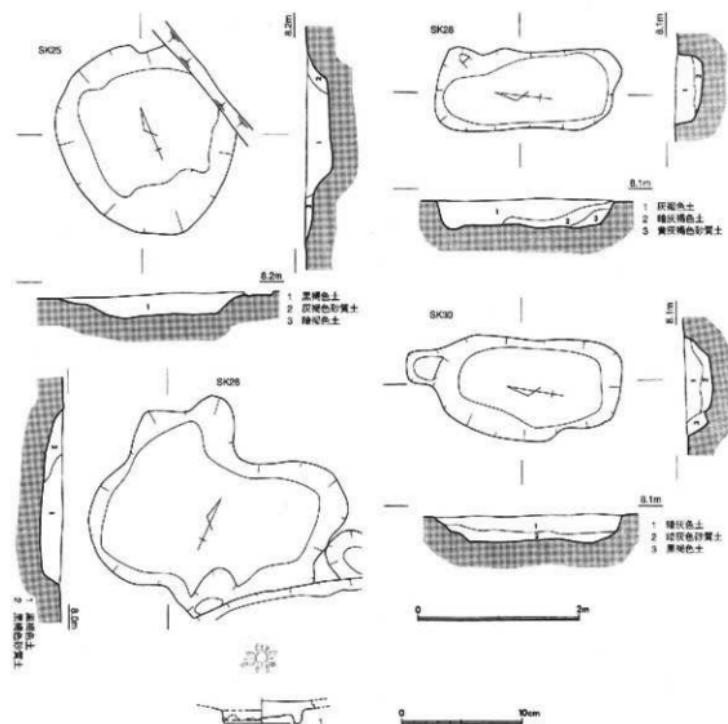
遺物は、1が15世紀後半と考えられる青緑色の青磁碗で、見込みに印花文が施される。このほか、図示できなかったが、須恵器、割花文碗と考えられる13世紀代の青磁、土師器等の小片が出土している。

#### SK28 (第182図)

SK25の南側に位置する、隅丸長方形の土坑である。長軸長2.2m、短軸長0.9m、深さ0.35mで、灰褐色系の土砂が自然堆積していた。出土遺物は図示できなかったが、低脚壺、須恵器の小片が出土している。

#### SK30 (第182図)

SK28の東側に隣接して掘り込まれた平面隅丸長方形の土坑である。長軸長2.5m、短軸長1.2m、深さ0.3mで、規模・平面形・主軸とともにSK28と類似する。土坑内には、基本的には灰褐色系の土砂が見られ、須恵器、糸切り底の土師器等の小片が出土している。

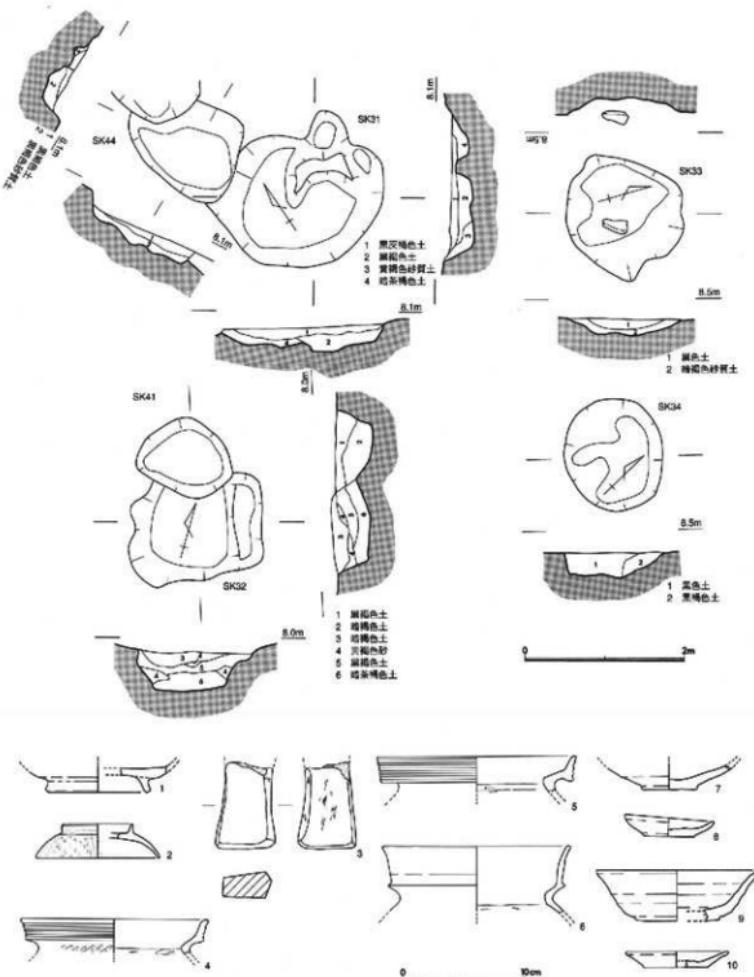


第182図 SK25・26・28・30、SK26出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

SK31・44(第183図)

調査区西側を南北に走る連続土坑群の、北端部に位置する2基の土坑で、切り合いからSK31が先行すると考えられる。

SK31 平面不整梢円形で、長径2.1m、短径1.7m、深さ0.35mである。東側は別の柱穴に擾乱されて歪な形態となる。堆積土の3・4層は別の遺構埋土の可能性もある。遺物は(第183図一



第183図 SK31~34・41・44、出土遺物実測図 (1:60 清原1:4 1-2 SK31, 3 SK32, 4-6 SK33, 5-6 SK34, 7-8 SK41, 9-10 SK44)

1・2)、1が須恵器の壺、2が肥前系の染付碗蓋で、18世紀末以降のものである。

**SK44** 平面不整椭円形の浅い土坑で、規模は長径1.5m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色系の土砂である。遺物は（第183図-9・10）、いずれも糸切りの土師器である。

#### SK32・41（第183図）

連続土坑群の中程に位置する。切り合いからSK32が先行する。

**SK32** 一辺1.1m、深さ0.5mの平面隅丸方形の土坑で、東側には浅く段が付き一見別の遺構と切り合っているようだが、断面ではそれは認められない。

遺物として砾石（第183図-3）と、図示できなかったが、須恵器、土師器等の小片が出土している。

**SK41** 径1m前後、深さ0.5mの不整円形の掘方で、糸切り底の土師器が出土している（第183図-7・8）。12世紀代のものか。

#### SK33（第183図）

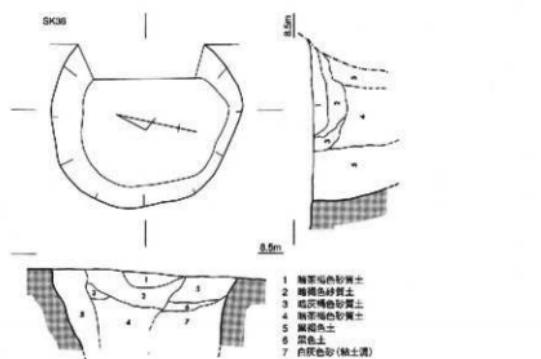
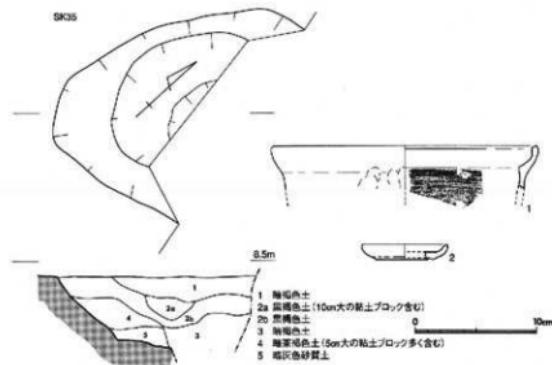
S107の北側に位置する。不整形で、南北1.5m、東西1.6m、深さ0.2mである。底面から浮いた位置で蝶が出土したが、加工はない。

遺物は（第183図-4）、口縁部の立上がりが短く外傾し、拡張部に4条の擬凹線を巡らす。頭部には刷毛状原体による列点文を施す。

#### SK34（第183図）

SK33の東に位置する。掘方は平面円形で、径1.4m、深さ0.3mである。

弥生土器の壺が出土している（第183図-5・6）。



第184図 SK35・36、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)

### S K 3 5 (第184図)

S I 0 6 の北側に位置する。調査区間にかかり、全容は不明である。南北2.9m、深さ0.9mで、底面東側は落ち込んで行くと考えられる。土層断面では落ち込みに対応する立上がりが見られることから、井側等の部材は出土していないものの、井戸の可能性が高い。底部付近では湧水が顯著である。2 b ~ 3 層下面は廃棄時の攪乱面か。

図示した1は瓦質の鍋で、内面の頸部以下に刷毛目状の条線が認められる。2は糸切り底の土師器小皿である。図示できなかったが土師器の小片は多数出土した。

### S K 3 6 (第184図)

S I 0 6 を切り込む平面円形の土坑で、径2.4m、深さ1.0m以上を測る。底部は湧水が著しく確認できなかった。土層断面では中央部に立上がりが認められ、S K 3 5 と同様に井戸であったと考えられる。2層下面は廃棄時の攪乱面と考えられる。土師器、須恵器等の小片の他、糸切り底の土師器小片が多数出土した。

### S K 3 7 (第185図)

S B 0 2 の東に位置する土坑で、近世の大溝 S D 0 1 の埋土除去後に検出した。径2.5m前後、最上部からの深さは1.4mを測る。土坑内にはレンズ状の自然堆積が見られるが、10層上面で攪乱を受けている可能性もある。湧水のため出土状況は判然としないが、10層から須恵器がまとまって出土している(第186図)。このうち、4はほぼ完形に復元でき、破碎・投棄されたものとも考えられる。1は復元口徑12cm前後のワイングラス形の土器で、外面はたて磨き、内面にはなでを施す。遺跡ごとに時期は異なるが、類似の土器は山雲市西谷3号墓(27)、東出雲町勝負遺跡 S I 0 5(28)、古志本郷遺跡 C 区 S D 1 6 · 1 7(29)で出土している。2は赤彩土師器の坏で、底部に回転糸切り痕が見られ、8世紀の所産である。3~5は須恵器である。3は把手が付く鉢と考えられる。3と類似の鉢は、松江市連行遺跡の古墳周溝から8世紀代の須恵器坏と共伴して出土している(30)。4は横瓶で、外面の頸部に「X」のへら記号が見られる。5も瓶である。

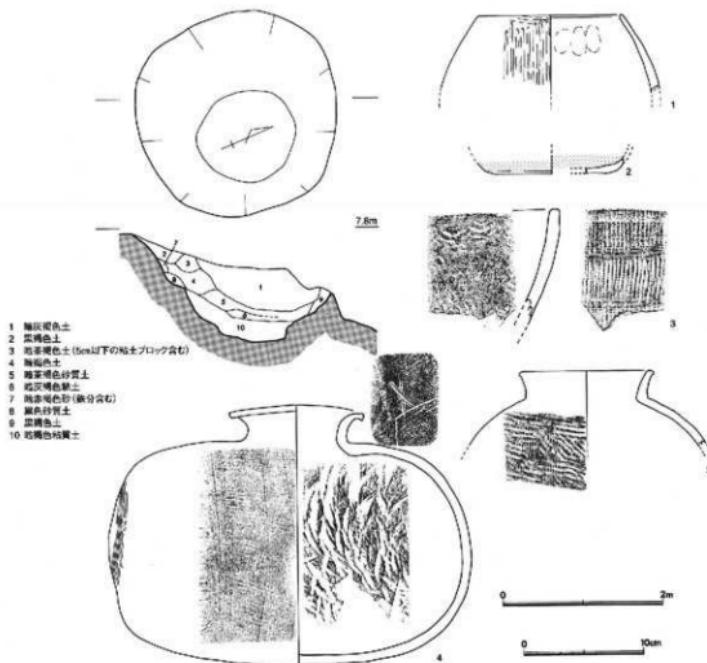
土坑は、8世紀代の井戸であった可能性が高い。

### S K 4 2 (第152図)

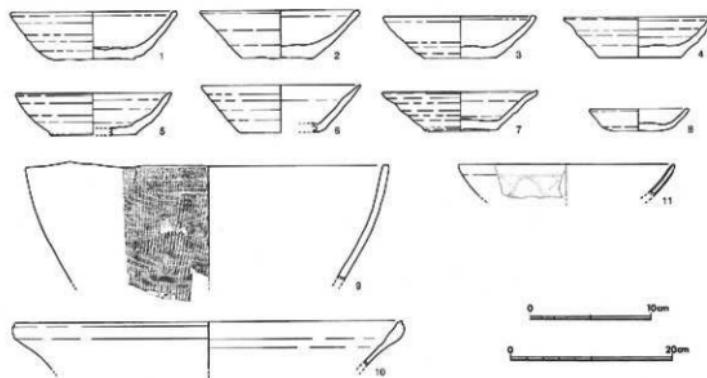
調査区西側の連続土坑群中に位置し、S K 3 2 の南に隣接する。平面不整長方形で、規模は長軸4.4m、短軸2.5mを測る。黒褐色系の土砂が堆積していた。

遺物(第186図)のうち、1~8は糸切り底の土師器で、口縁~体部にかけては多様性が見られるがいずれも器高は低く、底径が大きい。9~10は須恵器である。9は復元口径が44cm前後で、先述の186-3と同じ鉢と考えられるが、当具痕は認められない。10は東播系中世須恵器の片口と考えられる。胎土は粗く、口縁部に重ね焼きの痕跡が見られる。12世紀末~13世紀初頭頃の所産であろうか。11は龍泉窯系の青磁I~5類の碗である。

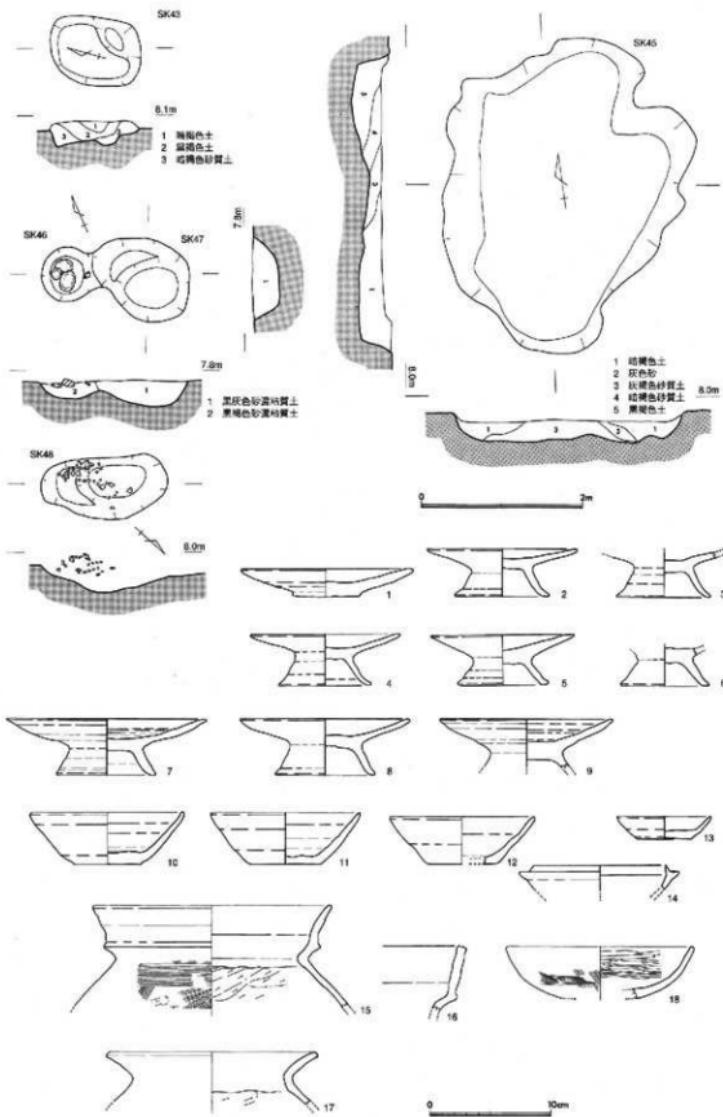
土師器の坏は14世紀を中心とする時期が考えられるが、6~7はやや下る可能性もある。



第185図 SK37、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4)



第186図 SK42出土遺物実測図 (1:4、9:1:6)



第187図 SK43・45~48、出土遺物実測図 (1:60、遺物1:4、1~9はSK43、10~14はSK45、15~18はSK46)

### S K 4 3 (第187図)

連続土坑群の南端に位置する平面隅丸長方形の土坑で、長軸長1.1m、短軸長0.9m、深さ0.3mを測る。埋土からは糸切り底の土師器が出土している(第187図-1~9)。1は皿で、2~9は高台付き皿である。いずれも11世紀前後のものと考えられる。

### S K 4 5 (第187図)

S B 0 2 の西側に位置する不整形な土坑で、南北3.7m、東西2.9m、深さ0.4mを測る。複数の造構が重複している可能性もあるが、出土遺物(第187図-10~14)にはまとまりが見られる。10~13は糸切り底の土師器で、13世紀後半~14世紀に属すと考えられる。14は須恵器の坏身である。

### S K 4 6・4 7 (第187図)

調査区北部に位置する2基の土坑で、S K 4 6 が先行する。

S K 4 6 平面円形で、径70cm、深さは20cmである。検出面で人頭大の自然隕が出上している。

S K 4 7 平面梢円形で、長径1.3m、短径1.0mを測る。

### S K 4 8 (第187図)

S I 0 4 の北側に位置する平面梢円形の土坑で、長軸長1.6m、短軸長1.3m、深さ0.4mを測る。埋土上層から土器片が出土している(第187図-15~18)。弥生時代終末期~古墳時代初頭の土坑であろう。

## 6. 溝(第188~197図)

### S D 0 1・0 8 (第188図)

S D 0 1 調査区を南東~北西方向に緩やかな弧を描いて走る大溝で、年度をまたいで調査した。幅7~9m、検出面からの深さは1.6m前後である。横断面形は場所によって異なるが、概して弧状で緩やかな底面を持つ。底面の標高は6.3mで、大きな傾斜は認められなかった。

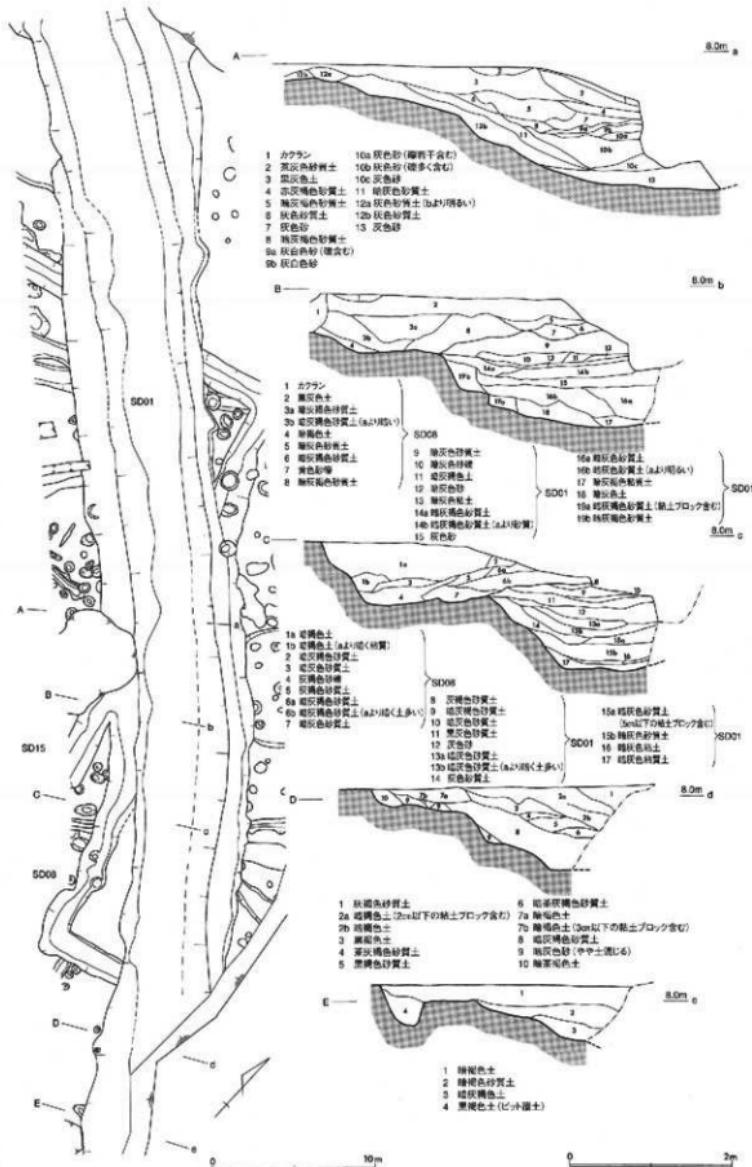
S D 0 8 S D 0 1 の南側に位置し、これを切り込んでつくられた溝である。平面L字形に屈曲するが北側は不明瞭となる。幅1.3m、深さ0.8mで、断面は西側に急傾斜をつくるが東側は比較的のだらかに立ち上がる。底面の標高は7.2mで、ほとんど傾斜はない。

堆積状況 6カ所に土層観察用ベルトを設けたが、最北部は湧水による崩落が激しく、記録は行わなかつた。また、断面の東側は前年に調査を行い、埋め戻した部分である。

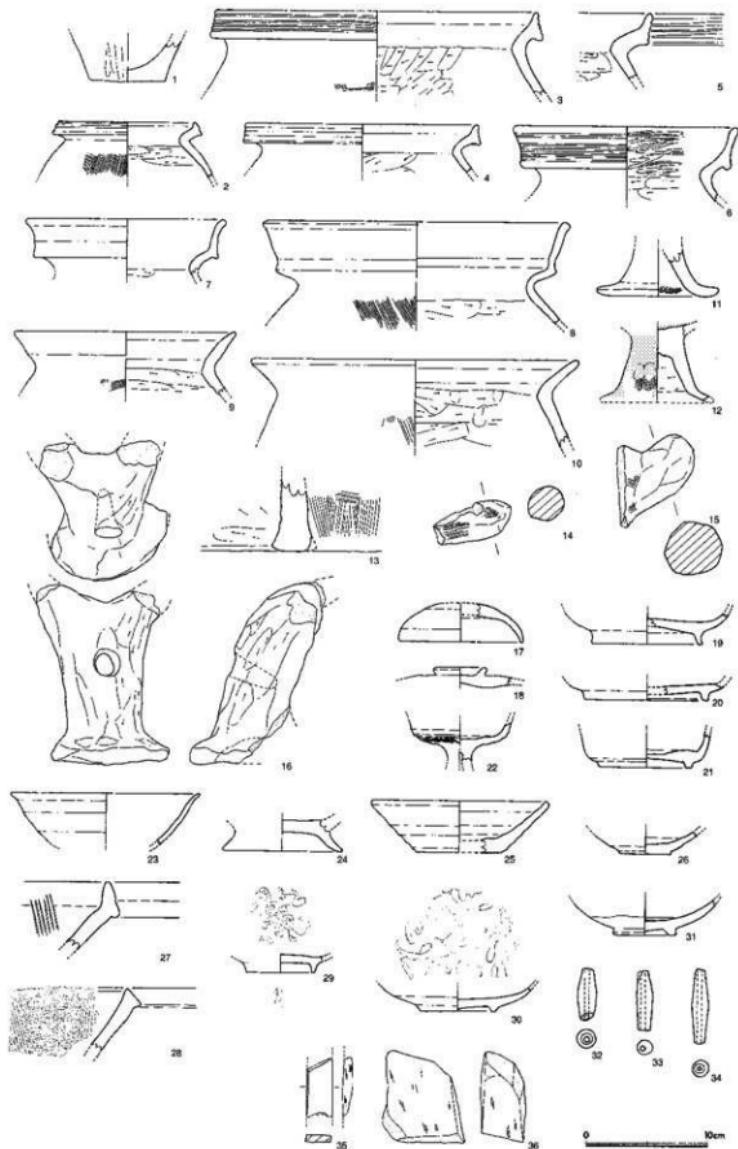
A-aでは7層以下に砂層が認められ、調査の際もこのレベルから湧水が見られた。1層の擾乱以外には明確な人為的掘り込み面は認められないが、2層下面是S D 0 8 の掘り込み面である可能性もある。B-bの、3a~8層はS D 0 8 の埋土で、S D 0 1 を切り込んでいる。ここでは、後述するS D 1 5 も切り合うが、S D 0 8 より先行するため断面には表れていない。最下部の17層は粘質土で、よどんだ状態があったことが窺える。C-cでは、1~7層がS D 0 8 の埋土である。

溝の下半は全般的に水成堆積が顯著で、ある程度水を湛えていたと考えられる。

S D 0 1 出土遺物(第189図) 検出面から下層に至るまで多量の遺物を検出している。1は弥



第188図 SD01-08実測図 (1:300、主圖は1:60)



第189図 SD01出土遺物実測図 (1:4)

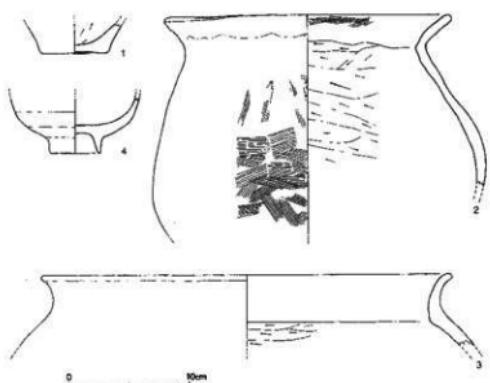
生土器の壺か壺の底部で、2～10は壺である。2～5は草田1期、6は草田2～3期、7は草田4期、8は草田6～7期と考えられる。11・12は土師器の高坏で、12は外面が赤彩される。12は古墳時代後期以降と考えられる。13は壺の脚部、14・15は壺の把手、16は支脚である。17～21は須恵器で、22以外は7～8世紀前半におさまるものである。23～26は糸切り底の土師器で、23は12世紀、24は11世紀、25は14～15世紀前半頃と考えられる。27は備前IV期、28は備前III期のすり鉢である。29は16世紀後半の青花碗で、底部は饅頭心である。30・31は肥前窯の陶磁器である。30は17世紀中葉の染付皿、31は下層から出土した内野山窯系の陶器皿で、18世紀前半頃と考えられる。32～34は管状土錐で、35・36は砥石である。

**SD08出土遺物(第190図)** 1は弥生土器の壺か壺の底部で、2・3は土師器の壺である。4は17世紀後半の肥前陶器碗である。この他、図示できなかったが、須恵器、糸切り底の土師器、近世陶磁器等の小片が出土している。

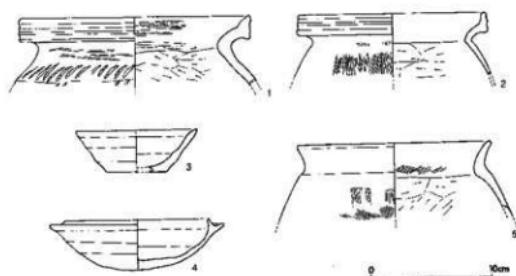
SD01は18世紀以降に埋没した溝と考えられ、SD08はそれがほぼ埋まった段階で掘り込まれているので両溝の使用年代にはやや聞きがあるといえる。溝の性格は不明瞭だが、SD08

は何らかの区画溝とも考えられる。

SD01は南東に隣接するK区でもこの延長部が検出され、当調査区と同時期の遺物が出土している。出土遺物・規模・溝の方向などを考慮すると、前節で述べたSD3・6と同一の溝である可能性が高く、仮にそうであれば、広域に機能した溝と言えよう。



第190図 SD08出土遺物実測図(1:4)



第191図 SD02~04出土遺物実測図(1:4, 1・2はSD02, 3はSD03, 4・5はSD04)

#### **SD02~04(第152図)**

SD01の東側に位置し、これに切られる3条の溝である。規模・方向・出土遺物(第191図)から、後述する各溝と同一の遺構と考えられる。対応関係は、次のとおりである。

SD02=SD11

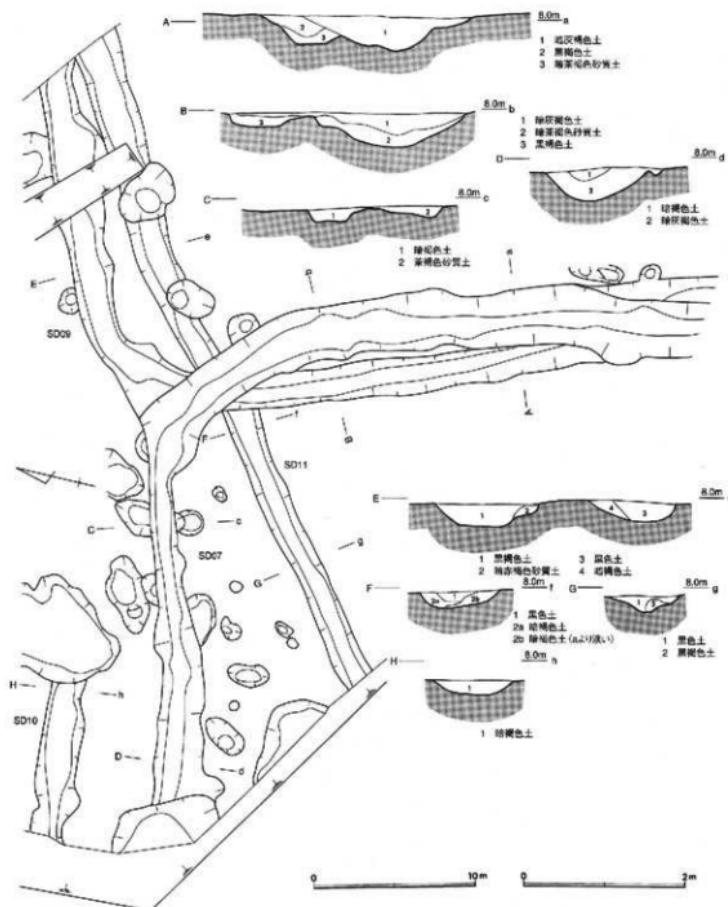
SD03=SD09

SD04=SD14

### SD07・09~11 (第192図)

調査区西側に位置する4条の溝で、切り合いから、前後関係はSD11→SD09→SD07の順である。SD10はSK45に切られていた。

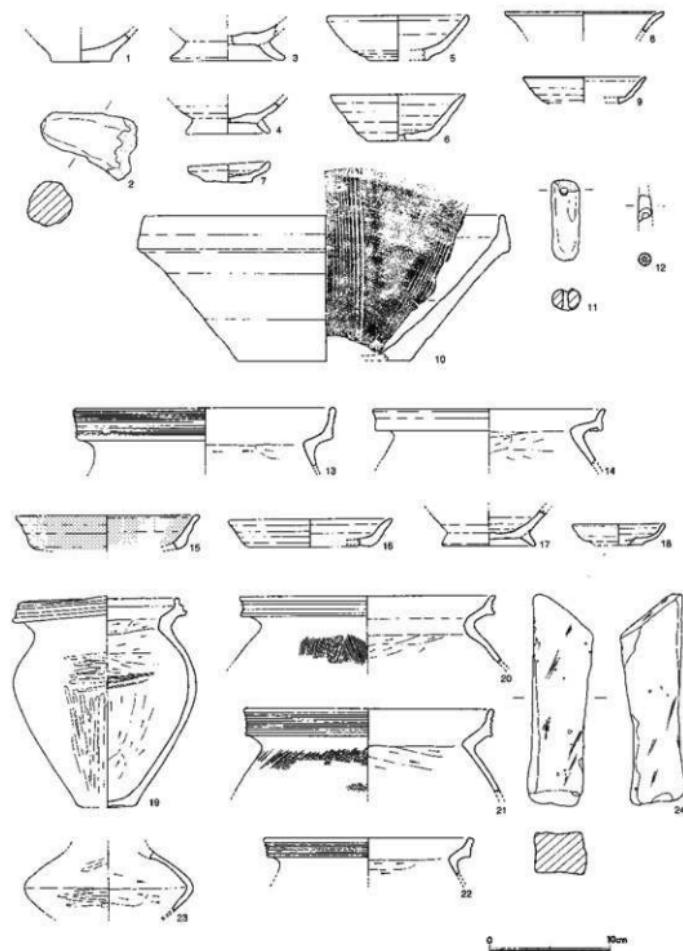
**SD07** 交差する地点から西に方向を変えて調査区外へと続くと考えられるが、西端部はSK09に切られる。幅0.8~1.8m、深さ0.4m、底部のレベルは7.5~7.6mで、傾斜はほとんど無い。出土遺物は(第193図-1~12)、1が弥生土器の甕か壺の底部、2が土製支脚、3~7が糸切り底の土器である。8~9はIX類の口禿白磁皿で、10は偏前IV期のすり鉢、11~12が土鍬である。出土遺物と切り合いから、溝が埋まるのは15世紀以降と考えられる。



第192図 SD07・09~11実測図 (1:150、土層図は1:60)

**SD09** 幅1.0~1.5m、深さ0.3m、底部のレベルは7.7~7.8mで、ほとんど傾斜は無い。出土遺物は（第193-13~18）、13・14が草出1~2期の壺で、15は赤彩土師器の壺である。16は須恵器の皿、17・18は糸切り底の土師器である。同一の溝と考えられるSD03からは13世紀後半頃の土師器が出土しており（第191図-3）、溝が埋まるのは13世紀後半以降と考えられる。

**SD10** 幅0.9~1.2m、深さ0.2mで、傾斜はほとんど無い。図示できなかったが、土師器、須恵器等の小片が出土地に出土している。



第193図 SD07・09・11出土遺物実測図 (1:4、1~12はSD07、13~18はSD09、19~24はSD11)

**SD11** 幅0.9~1.5m、深さ0.2m、底部のレベルは7.7mで、傾斜はない。出土遺物は（第193図-19~24）、弥生土器と砾石である。19~22は甕、23は長頸甕で、いずれも概ね草田1期に相当する。同一溝と考えられるSD02からも同様の遺物が出土しており（第191図-1・2）、弥生時代後期前葉頃の溝と考えられる。

#### SD12・13（第194図）

調査区の中央に位置する2条の溝で、4.5mの間隔をおいて南北に走る。SD12は北側のところで北東に向きを変える。2条の溝は、規模・方向・筋が通っていることから、1対で機能していた可能性がある。

幅50~96cm、深さ10~35cm、底部の標高は7.6~7.9mで北側ほど低くなる傾向が認められる。

遺物は図示できなかったが、SD12からは、弥生土器・土師器・須恵器等の小片が、SD13からは、弥生土器・糸切り底の土師器等の小片がそれぞれ出土している。

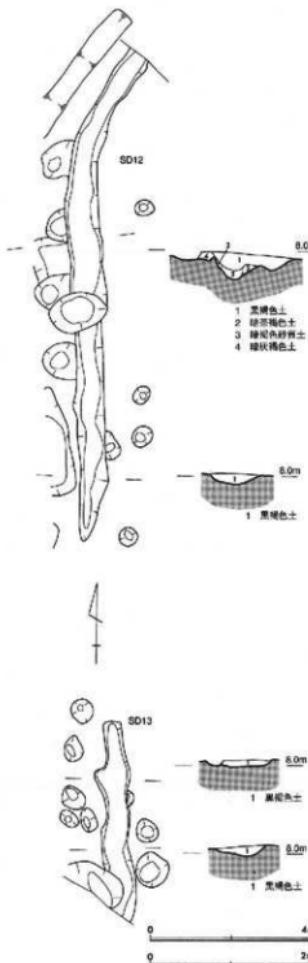
#### SD14（第195図）

SE01の北側を南西~北東方向に走る溝でSK04や、SD01等に切られている。幅40~80cm、深さ25cm、底部のレベルは7.7~7.8mで、ほとんど傾斜はないが、北東側が低くなる傾向がある。北東端部の上層から遺物がまとまって出土した。

遺物は（第195図-1~5）、1・2が土師器甕、3が瓶、4が移動式甕の側部である。5は内外面赤彩の高杯である。同一の溝と考えられるSD04からは、須恵器壺身と土師器甕が出土している（第191図-4・5）。壺蓋は口径11.8cmで、底部にはへら削りがされず、出雲5期の範疇に含まれるものである。

#### SD18（第195図）

SI07の東側をほぼ南北に走る溝で、幅42~80cm、深さ15cm、底部の標高は8.0~8.3mで、北東側ほど低くなる。遺物は（第195図-6・7）、6が糸切り底の土師器壺、7は黄灰色の唐津皿で、見込みと三日月高台の3か所に砂目が残る。17世紀前半の溝と考えられる。

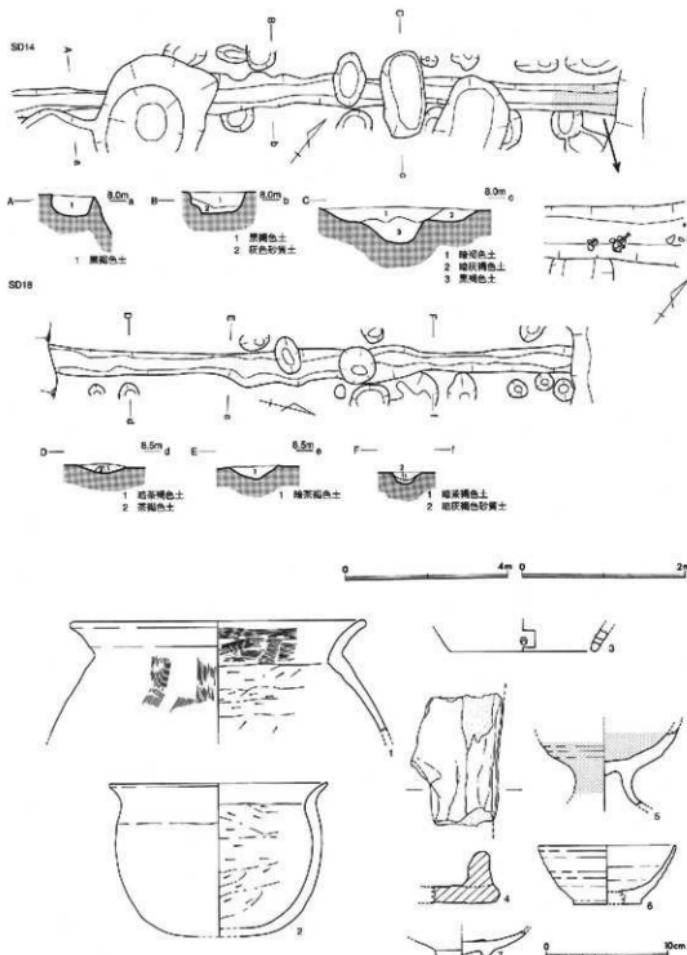


第194図 SD12・13実測図 (1:120, 土層図は1:60)

SD15・16・22・23 (第196図)

SD01に切られるが、SD15・22・23は同一の溝と考えられる（以下、SD15等とする）。また、SD16はSD15等から約2mの陸橋をつくって同一方向に掘り込まれた溝である。規模も同じことからSD15等に対応すると考えられる。

SD15等の規模は、陸橋端部から隅までの長さ27.5m、隅から西端部までの長さが36.2mである。幅は1.5~2.5m、深さ0.6~0.8m、横断面は隅丸逆台形で明瞭な底面をつくる。底面の標高は



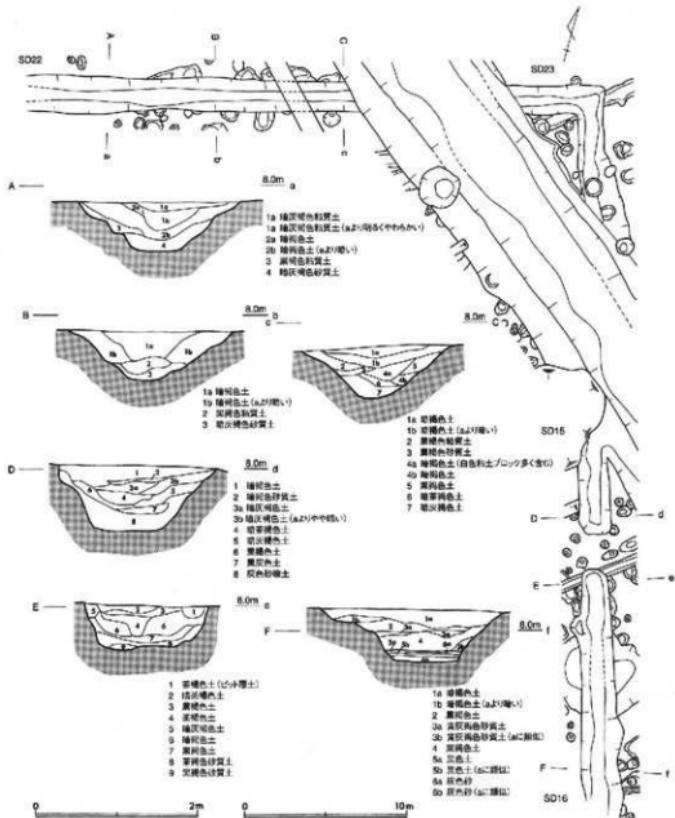
第195図 SD14・18、出土遺物実測図 (1:120、土層図・出土状況は1:60 遺物1:4 1~5はSD14、6・7はSD18)

7.0~7.2mで陥橋側がやや低いが、溝の規模を考えるとほとんど傾斜は無いといえる。

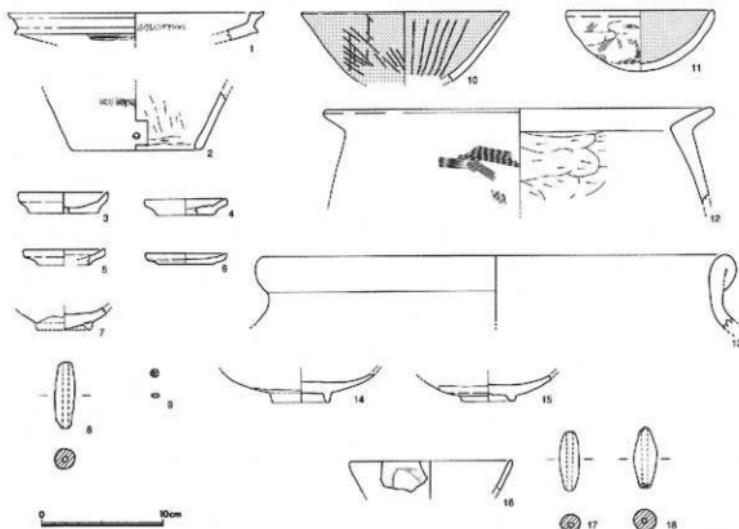
S D 1 6 の規模は、幅1.5~2.4m、深さ1m前後で、横断面形も同様である。底面の標高は7.4~7.6mで、傾斜はほとんど無い。

堆積状況は、基本的には流入等による自然堆積である。また、F-fでは、下層で砂と黒色土の水平な互層状堆積が見られた。水成堆積の可能性もある。ただし、A-aの1 b層下面・B-bの1 a層下面等の様な人為的な掘り返しありも見られる部分が各断面に認められることから、こうした行為が行われていた可能性もある。

出土遺物（第197図） 1~9はS D 1 6 出土遺物である。1は口縁端部を水平方向に拡張して凹線を2条巡らし、屈曲部は鋭く突出するタイプの高坏で、草田1期に併行すると考えられる。2は瓶、3~6は糸切り底の土師器小皿である。7は見込みを蛇の目釉剥ぎする白磁皿III類である。8は管状土錐、9は群青色のガラス小玉である。



第196図 SD15・16・22・23実測図 (1:300, 土層図は1:60)



第197図 SD16・22出土遺物実測図 (1:4、1~9はSD16、10~18はSD22)

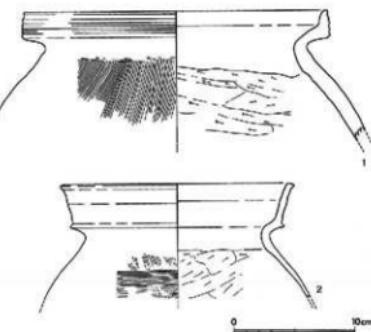
10~18はSD22出土遺物である。10・11は赤彩の土師器で、10は内面に放射状、外面に斜格子状の暗文を施す高坏である。11は坏で、外面にもわずかに顔料の痕跡が見られる。13は備前III~IV期の甕である。14は17世紀後半頃の肥前系染付皿である。15は三川内産で、17世紀中葉~後半の陶器皿である。14・15ともに見込みは蛇の目に釉剥ぎされる。16は龍泉窯系青磁碗I~5類である。17・18は管状上錐である。

SD15の遺物は図示できなかったが、土師器・近世陶磁器等の小片が出土した。

一連の溝は、17世紀後半以降に埋没すると考えられる。

## 7. SX01 (第152図)

調査区北側に位置する落ち込みで、調査区壁際で幅10.5m、検出面からの深さ0.3~0.5mで、奥行きは不明である。少量ながら遺物が出土した (第198図-1・2)。1は草田1期の甕で、口縁はやや内傾し、拡張部に4条の凹線文を施す。2は草田6~7期の甕で口縁端部の外側にアクセントを付ける。



第198図 SX01出土遺物実測図 (1:4)

#### 第4章（註）

- (1) 你生時代後期～古墳時代前期前半までは、草田編年による。  
鹿島町教育委員会「南浦武草田遺跡」『諏訪地区・邑曾國場整備事業発掘調査報告書5』1992
- (2) 須恵器の編年については、大谷晃一「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『鳥取考古学会誌』第11集 1994によるが、7世紀後半以降の年代観については高広編年・国守編年を参考とした。
- 鳥取県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」と田川地造成工事に伴う発掘調査一』1984  
松江市教育委員会『出雲因幡発掘調査概要』1970
- (3) 細切り底の土師器の年代については、出雲平野の当該期の遺跡を調査・報告した以下の文献を参考とした。  
-1 鳥取県教育委員会「古志本郷道路」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』1999  
-2 鳥取県教育委員会「斎小路西遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2』1999
- (4) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982
- (5) 計測・表については水井久美男「中世の出土銭一出土銭の分類と分析」『吉野川埋蔵文化財調査報告会』1994 を参考に作成した。
- (6) 井戸の部分名称や分類については、広島県立千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V』1996を参考にした。
- (7) 横田賢治郎・森川 勉「太宰府川下の輸入陶器一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館論集』4集 1978
- (8) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982
- (9) 間壁忠雄「備前焼」ニュー・サイエンス社 1991
- (10) 前掲註(3)～同じ
- (11) 三宅博士「土師質土器を伴う石鉢について」『鳥取考古学会誌』第2集 1985 では、このように土師器を容器に入れて埋納したものが鉢魂・地鎮のための「鉢物」であった可能性が指摘されている。
- (12) 平成8年度に頃原町教育委員会によって調査された「森V遺跡」でも同様の例が知られる（山崎版子氏の御教示による）。
- (13) 出雲市教育委員会「岩丁町造跡発掘調査報告書」1998
- (14) 五十川伸久「古代・中世の誇鉄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 1996
- (15) 鳥取県教育委員会「富川河床遺跡発掘調査報告書III」1983
- (16) 县内において、このような構造を持つ当該期の遺物は筆者の知る限りでは無いが、武藏国豊島郡鶴見町遺物等には同様の構造を持つものが多いことが指摘されている。  
中島広謙「武藏国豊島郡鶴見の正倉—御殿前遺跡ー」「郡衙正倉の成立と変遷」奈良国立文化財研究所 2000  
当遺構は個柱建物だが、比較的規模も大きく建物群の中でも核的な役割を拥っていた可能性が高く、堅固な基礎を構築する必要があったとも考えられる。
- (17) 鳥取県教育委員会「姫原西遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』1999
- (18) 鳥取県教育委員会「仁摩・坂瀬遺跡」『鳥取県埋蔵文化財調査報告書XII』1987
- (19) 松江市教育委員会「黒田遺跡発掘調査報告書」『松江市文化財調査報告書 第65集』1995
- (20) 無文鏡については是光氏の分類による。  
是光吉基「国内出土のいわゆる“無文鏡”について」『考古論集－湖見 沿先生追憶記念論文集－』同記念事業会 1993
- (21) 例えば、三田谷I遺跡A区 SI16、古志本郷遺跡C区 SD18等
- (22) 松木岩雄「出雲・隱岐地域の「赤生土器の様式と編年」木耳社 1992
- (23) 出中義昭「益田市西平原墓地群の意義について」『ふいーるど・のと』No.3 1982
- (24) 鳥取県教育委員会「鳥取駅周辺遺跡分布調査報告書III 廉葉岡作遺跡」1985
- (25) 墓の口縁形態と底部の関係、草田6・7期の中での位置付けについては、次の文献を参考とした。  
松山智弘「小谷式古墳跡－山雲平野における新資料からー」『鳥取考古学会誌』第17集 2000  
また、へら書き波状文・沈線文の山陰での出現時期については次山 淳氏の御教示による。
- (26) 古志本郷遺跡D区 SX04で、出雲4期の遺物を伴う方墳の可能性が指摘されている。
- (27) 田中義昭編「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」1992 鳥取大学法文学部考古学研究室
- (28) 鳥取県教育委員会「勝負遺跡・堂床古墳」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区10』1998
- (29) 前掲註(3)～同じ
- (30) 丹羽野裕氏の御教示による。

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 古志本郷遺跡H II区における花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

#### はじめに

古志本郷遺跡は鳥取県出雲市中央部に位置し、中国山地を水源にする神戸川が出雲平野に流れ込む南岸に立地する。

本報は、鳥取県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント㈱に委託して実施した「古志本郷遺跡G・H II区自然化学分析委託報告書」の概報であり、専式を簡略化したものである。

また本報の掲載されている報告書本編はH I・H II・J区についての報告書であるが、本報ではG区の分析結果についても触れている。第199図に示すようにG、H II区は隣接しており、試料を採取したG区SD41はH II区SD58、G区SD39はH II区SD59と連続している。

#### 試料について

第199図に示す各地点に置いて協議の上、渡辺が試料採取を行った。ただしH II区深堀地点については、発掘担当者より試料の提供を受けた。各地点の柱状図を第200~203図の花粉ダイアグラム左に示した。また、試料採取ポイントを柱状図右に、層名ほかを柱状図左に示している。



第199図 試料採取地点

### 分析方法及び結果

花粉分析方法は、渡辺（1995）に従い、 $^{14}\text{C}$ 年代測定はAMS（米国Beta社のシステムを利用）を用いて行った。また、花粉分析処理の残渣を利用して、珪質化石および火山ガラスの概査を行った。

花粉分析結果を第200～203回の花粉ダイアグラムに、 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果を表8に、珪質化物および火山ガラスの概査結果を第9表に示す。

花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率で表した。また検出花粉総数の少ない試料では出現した種類全てを「\*」で示した。また、木本花粉の検出数は少ないが草本花粉の検出量の多い試料については、草本花粉を百分率で示し、木本花粉は「\*」で示した。

第8表  $^{14}\text{C}$ 年代

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (y. B.P)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y. B.P)	曆年補正 <sup>†</sup> (cal y.)	測定番号 (Beta-)
KOSHI-1	3790±40	-27.9	3740±60	BC2310～1965	144315

\*<sup>†</sup> : sigma, 95% probability

第9表 硅質化石および火山ガラス概査結果

地点名	試料No.	珪藻	プラント・オパール	火山ガラス
G区SD11	1	○	◎	△
	2	○	◎	△
	3	△	○	△
	4	○	○	○
	5	△	◎	△
	6	△×	◎	△
G区SD39	1	○	◎	△
	2	○	○	△
H II区SD29	1	◎	○	△
	2	◎	○	△
	3	◎	◎	△
	4	○	○	○
	5	○	○	○
	6	◎	○	○
	7	○	○	△
	8	○	◎	△
H II区深掘	1	△	○	○
	2	△	○	△

凡例 ◎ : 十分な数量が検出できる  
 ○ : 少ないが検出できる  
 △ : 非常に少ない  
 △× : 極めてまれに検出できる  
 × : 検出できない

## 考察

### 1) 花粉分帯

今回の分析結果では花粉化石の含有量が少なかったことから、花粉分帯を行わなかった。

### 2) 微化石含有状況および堆積環境について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

1. 堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径・比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3. 土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本末含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

分析した試料の多くは暗～黒色を帯びるもの、中～細粒砂が主体の層であった。写真1に示すように黒い（暗い）色調は炭状物質に由来することが明らかである。また概査で見る限り、珪藻やプランクトンの含有量は比較的多かった。一方これらに比べ花粉の含有量は少なく、検出できた花粉粒も花粉膜表面の模様が不鮮明であった。このような花粉膜表面の劣化は、長期間紫外線にさらされていたことが主な原因であると考えられる。したがって、今回花粉化石の検出量が少なかった主原因として、上記3の「土壌生成作用」が考えられる。

ただし、分析試料はH II 区深堀地点を除き溝壁上である。珪藻化石が安定して検出できることから、それぞれの溝にはいくらかの水があったことは明らかである。ただし、前述のように新鮮な花粉粒が認められないことから、水深は極めて浅く、乾湿を繰り返すような事もあったと考えられる。また溝内に堆積した花粉化石、炭状物質の多くは、溝周辺の地表面で土壤化を受けた後、溝内にもたらされたと考えられる。

H II 区深堀地点の2試料はいずれも、3740y.B.Pを示す黒褐色砂質シルトから得られたものである。他の試料同様に黒い色調は炭状物質に由来するが、含まれる花粉、珪藻ともに少ない。また含有される「火山ガラス」の量が多いことから、下位に位置する三瓶火山の火砕流二次堆積物表面が土壤化を受けたものである可能性もある。

### 3) 環境変遷

古志本郷遺跡内では、平成7～9年度の発掘調査に伴いA～D区の6地点で花粉分析が行われていた（川崎地質㈱,1999）。ここでも、今回の調査同様に多くの試料で花粉化石の含有量が少なかった。一方で、花粉化石が検出されダイアグラムに示された試料には、今回の試料と同時期に堆積したと考えられる試料が存在する。しかし、このような試料の上位には近～現代の耕作土が堆積しており、検出された花粉粒の多くが上位からの「潜り込み」による可能性が否定できない。したがって、川崎地質㈱（1999）で示された「弥生時代から古墳時代の古植生」については、今後得られる分析結果を踏まえ再考する必要がある。

今回得られた分析結果では、遺跡周辺（背後の山地）の古墳時代の古植生として温帯針葉樹林

(アカマツ林?) の優占的な分布が推定される。このことは先の川崎地質㈱(1999)で推定された古植生と一致する。ただし、前回同様に直上に近世以降の堆積層が重なっており、影響は無視できない。一方、神戸川対岸に位置する三田谷Ⅰ遺跡での花粉分析結果(渡辺,2000)ではマツ属(複雑管束軸属)に加えスギ属も高率になっているが、今回の調査地点でのマツ属(複雑管束軸属)花粉粒の上位層からの混入を否定する要因にはなりうると思われる。また、アカマツの分布が神戸川南西岸(あるいはスギの分布が神戸川北東岸)に偏っていた可能性も指摘できる。

また草本花粉に着目すると、キク科に属する分類群(キク亞科、ヨモギ属、タンボボ亜科)が高率を示す。一方で、稻作に由来すると考えられるイネ科(40ミクロン以上)花粉はさほど高率にならない。川崎地質㈱(1999)では古墳時代後期以降の堆積物でイネ科(40ミクロン以上)が高率を示し、稻作の可能性を指摘しているが、古墳時代中期以前の堆積物ではイネ科(40ミクロン以上)は有意なほど検出されていない。

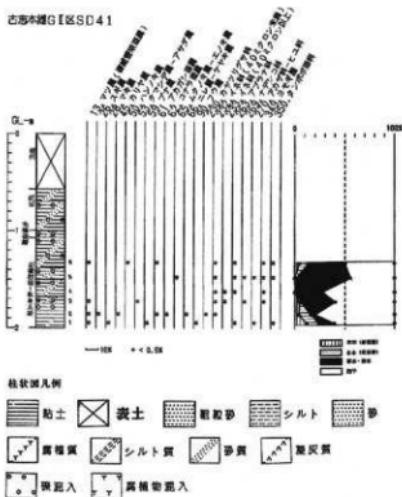
したがって、試料を採取した各地点近辺での水田の広がりについては否定的であり、溝の周囲はキク科の草本の茂る、いわゆる「草原」の状態であったと考えられる。

### まとめ

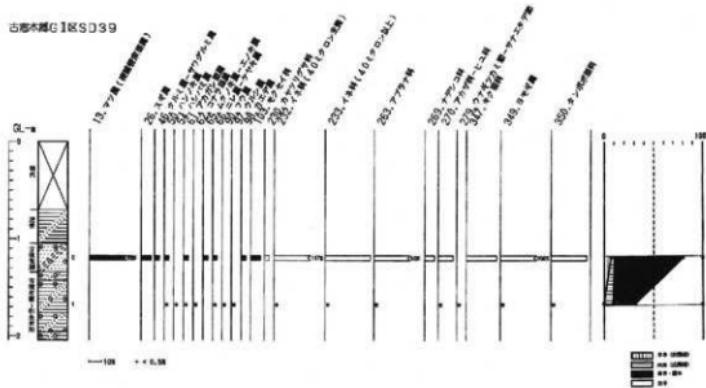
- 古志本郷遺跡G・HⅡ区で花粉分析および含有物概査を行い、以下のことを考察した。
- (1)花粉化石が検出できたものの、ほとんどの試料で統計処理には不十分な量であった。このため、花粉帶を設定できなかった。
  - (2)花粉粒子表面の劣化から「土壤化」による紫外線の影響が推定される。
  - (3)堆積物中に珪藻化石が含まれることと花粉粒の状態から、溝内部には水があったものの水深は極めて浅かったことが推定された。
  - (4)分析標準の暗~黒色は、炭状物質によることが明らかになった。
  - (5)弥生時代前期から古墳時代にかけての遺跡周辺の古植生が明らかになった。特筆すべき点は、以下の事柄である。
    - ①古墳時代中期頃には、遺跡背後(神戸川南西岸)の平野~丘陵部の森林は、アカマツなどを主要要素とした温帯針葉樹林で構成されていた。
    - ②弥生時代前期、古墳時代中期には遺跡近辺は「草原」が広がっていた。

### 【引用文献】

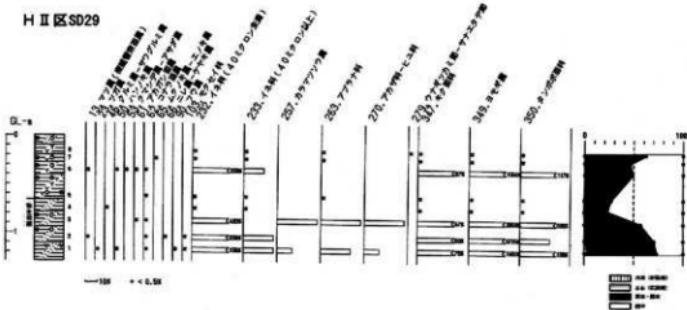
- 川崎地質株式会社(1999)古志本郷遺跡発掘調査に伴う花粉分析、古志本郷遺跡Ⅰ, 332-338、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会。
- 中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, p.187-197。
- 渡辺正巳(2000)三田谷Ⅰ遺跡94・95年度発掘調査に係る花粉分析、三田谷Ⅰ遺跡(本文・写真図版編), 3, 117-122、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会。



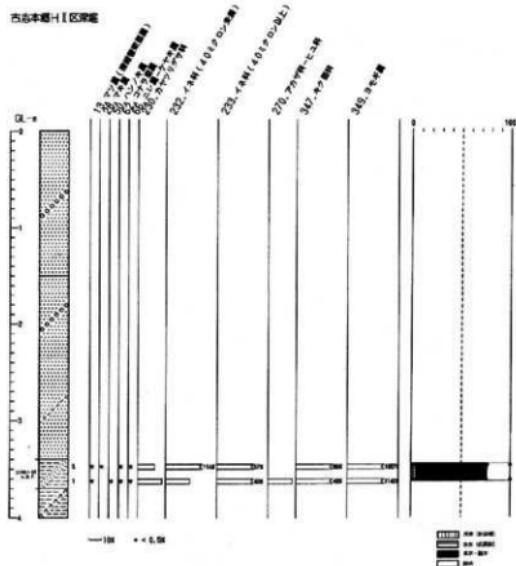
第200図 G区SD41の花粉ダイアグラム



第201図 G区SD39の花粉ダイアグラム

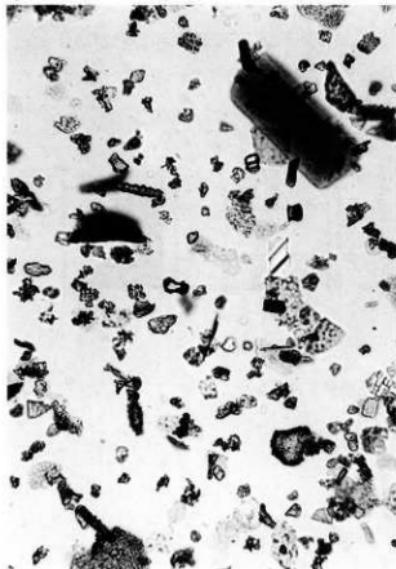


第202図 H II 区SD29の花粉ダイアグラム



第203図 H II 区深堀の花粉ダイアグラム

写真1



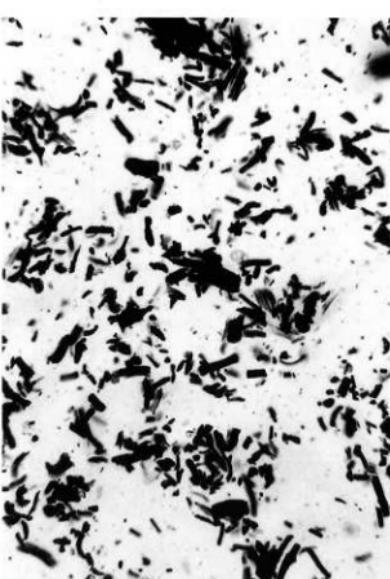
珪酸質プレバラート状況写真 (G II 区 SD41 No.6) : 190倍



珪酸質プレバラート状況写真 (H II 区 SD2) : 190倍



花粉プレバラート状況写真 (G II 区 SD41 No.2) : 80倍



花粉プレバラート状況写真 (H II 区 SD29 No.7) : 80倍

## 第2節 立地地盤の形成について

中村唯史（鳥根県景観自然課）

古志本郷遺跡が立地する出雲平野は、その地形発達に三瓶火山<sup>(注1)</sup>の噴火活動が影響したことが遺跡調査の結果などから明らかになりつつある。特に縄文時代後期の噴火活動（松井・井上(1971)<sup>(注2)</sup>の第VI活動期）は現地形面の形成に直接関わったことが予測され、弥生時代に急速に増加する遺跡の立地を考えるうえで重要な要素といえる。

古志本郷遺跡の発掘調査では調査区の一部で深堀トレンチを設定し、層序の観察と<sup>14</sup>C年代測定を実施した。ここではその結果を報告する。

### 深堀トレンチの層序

深堀トレンチはH II区の南東部に設定し（P190第199図参照）、遺構面より下部を重機によって掘削した（第204図、写真2）。

弥生時代以降の遺構は中疊を含む粗粒砂層（砂層①）の上に立地している。砂層①は層厚が約1.5mあり、トレンチ壁面で見ると斜交層理が発達している。その下位には削り面で境されて塊状無構造の粗粒砂層（砂層②）が層厚約1.5mで分布する。砂層②は砂疊～粗粒砂とシルト以下の細粒分が混じりあっていて、粒径淘汰が悪い地層である。

砂層①と砂層②を構成する粒子のうち、極粗粒砂以上の粗粒分について岩種を区分すると、第205図に示すように三瓶火山噴出物に由来するデイサイト<sup>(注3)</sup> 岩片が圧倒的に多く、砂層は火山噴出物

標高 (m)	柱状図	地層名	特徴	試料
7.0	砂層① 粗粒砂層		ダイサイト質軽石の円礫点在。 6.5m付近を境に上部は褐色を帯びた灰色。 下部は灰色。 斜交層理が発達。	← No.1
6.0			浸食面を境して重なる。	← No.2
5.0	砂層②。 シルト混じり 粗粒砂層		植物根が若干入る。 シルト分を含み、全体に塊状無構造。	← No.3
	有機質シルト層 火山灰質シルト層		均質な暗褐色～黒色のシルト。 平行葉理が認められる。	← 年代測定試料

第204図 深堀トレンチ柱状図と試料採取位置

の二次堆積物と判断できる。なお、細粒分については鉱物片であることが多く、母岩を判別しにくいことから観察の対象としなかった。

砂層①と砂層②の岩相の違いは堆積メカニズムの違いによって説明できる。砂層①では斜交層理が認められる。これは粒子が水流によって押し流される過程で、河床に様々な形態の高まりを作ったり、弱く浸食したりした結果で形成されたもので、河川作用による堆積物と判断できる。一方、砂層

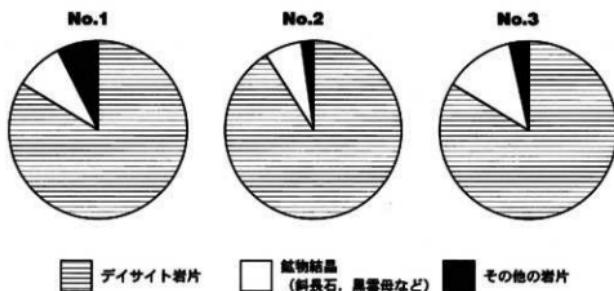
②では堆積構造が認められず、粒径の異なる粒子が混在している。これは砂層②が河川水流によって堆積したものではなく、重力流堆積物であることを示している。重力流とは水あるいは空気と混じりあった土砂が一体となって自重で斜面を流れ落ちるもので、泥流や土石流、火碎流などがある。砂層②は水を含んだ比較的細粒な火碎物が流れ下った火山泥流堆積物と判断できる。

砂層①と砂層②は削り面によって境される。削り面には若干の植物根の侵入が認められるが、著しい土壌化はなく、堆積時期の空隙は短いものと判断される。

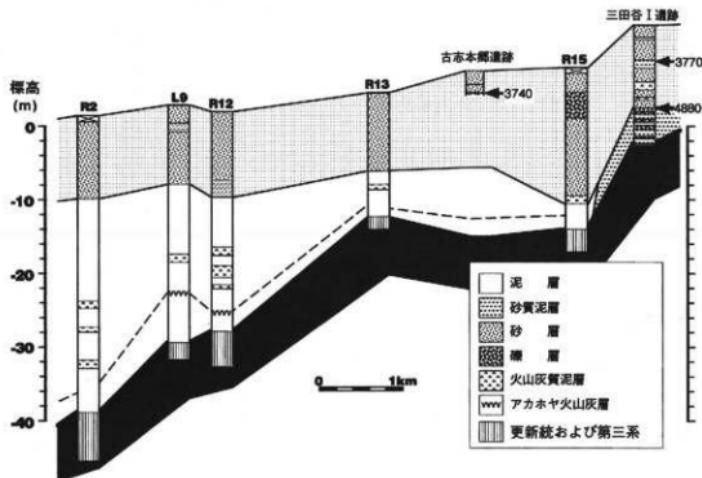
砂層の下位には有機質シルト層が分布する。層厚は0.2mである。有機質シルト層には植物根などの植物遺体が含まれ、後背湿地の堆積物と判断される。有機質シルト層の下位には均質な火山灰質シルト層が分布する。この地



写真2 深堀トレーンチ土層断面



第205図 砂の岩種構成



第206図 神戸川に沿う地下地質断面と年代値の関係

層はトレンチの掘削下限で確認され、層厚は不明である。

#### $^{14}\text{C}$ 年代について

深堀トレンチの有機質シルト層から得られた植物根について $^{14}\text{C}$ 年代測定法を行った。

試料は植物根であるので現地性のものと判断でき、砂層が堆積する直前の年代を示すと期待される。植物根は上位の砂層②まで連続していないことを確認している。

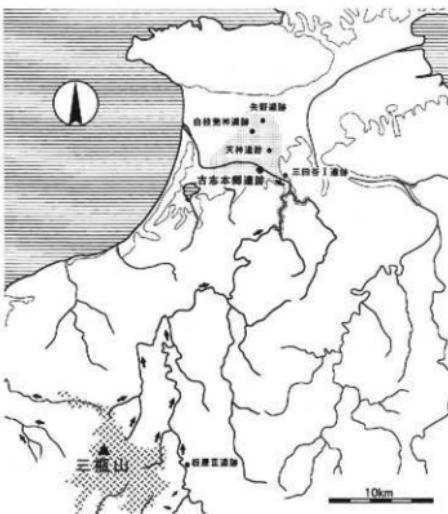
測定はBETA ANALYTIC社に依頼して加速器質量分析計(AMS)によって分析し、3740±60yr.BPの年代値( $\pm 5\%$ 補正値)が得られた。

3740yr.BPの年代値は、上記のように砂層②が堆積する直前の年代を示すものと考えられる。この年代は、神戸川<sup>(注4)</sup> 上流の板屋Ⅲ遺跡<sup>(注5)</sup>などで、三瓶火山第VI活動期の噴出物の直下から得られた年代値と近い値である。また、古志本郷遺跡から約1km上流に位置する三田谷I遺跡では、火山噴出物起源の洪水堆積層が2層確認されていて、上位の洪水堆積層の直下から3770yr.BPの年代値が得られている<sup>(注6)</sup>。以上のことから、砂層②と砂層①（両者のタイムギャップは小さいと推定される）は三瓶火山第VI活動期にその火碎物が二次堆積したものと考えられる（第206図）。

#### 地形発達のモデル

今回得られた層序と年代値から、古志本郷遺跡が立地する微高地の形成は次のようにであったと考えられる。

3700年前頃に三瓶火山が活動を行い、神戸川流域にもたらされた火碎物が火山泥流となって流れ下ったり、洪水流によって運ばれたりして出雲平野にまで達した（第207図）。その堆積物はそ



第207図 火碎物に由来する土砂の主な流下経路

質の砂からなる地盤上に立地している。例えば、隣接する下古志遺跡や田畠遺跡、神戸川の対岸にある天神遺跡、さらに北へ離れた矢野遺跡、小山遺跡などがそうである。これらの遺跡では地盤の形成時期を直接示す資料は得られていないが、古志本郷の地盤形成と同時期の可能性が高い。同時期の堆積物が平野を広く厚く覆ったことは、出雲平野における遺跡の出現時期と関わってくるように思われる。

#### 遺跡からの提言

今回の古志本郷の深掘トレンチ調査では、三瓶火山の活動期に出雲平野まで火山泥流が達していたことが明らかになった。その堆積物は微高地を形成して、遺跡立地に適した地盤が形成された。一方、火山泥流が発生する前にそこに人の暮らしが営まれていたならば、それは生活を破壊した灾害ということになる。もしも、現在、同様の現象が発生するとどうなるであろうか。火碎物に由来する碎屑物は出雲平野西部の広い範囲に厚く分布している。それが同規模で現在の街を覆えば大変な災害である。

三瓶火山は過去10数万年の間に、数千年から数万年の比較的長い休止期を持ちながら噴火を繰り返してきた火山で、いつの日か活動を再開する可能性を秘めている。また、火山体は崩れやすい性質を持つので活動とは関係なく山体崩壊が起こるケースもある。だからといって、それをいたずらに恐れることは賢明ではないが、万が一の場合の対策として、過去の「災害履歴」を明らかにして、「起こりうる災害」のことを知っておくことは決して無駄ではない。実際にそういう観点から、いくつかの火山で「ハザードマップ」と呼ばれる防災マップの作成が行われている。その中で、遺跡や歴史の調査から得られた資料が活用されている例が少なくない。

遺跡調査からは過去の災害履歴に関する情報が得られる機会が多く、それは防災という形で現代

以前の地表面を少なくとも3mの厚さで覆い、新たな地形面を形成した。洪水は幾度となく発生したと推定され、この時期の神戸川は河床が著しく高くなり、頻繁に流路を変えながら平野の各所に自然堤防を形成したと想像される。

噴火活動が終わり碎屑物供給量が減少すると、河道はある程度固定されるようになり、平野面を下刻して流れようになる。そうすると、自然堤防として形成された微高地は河川の影響を受けにくい場所となった。そこを利用して弥生時代に古志本郷遺跡が営まれるようになった。

また、出雲平野西部の遺跡の多くは古志本郷遺跡と同様にデイサイト

社会に貢献している。今回の調査で得られた情報もそのような形で活用されることを期待したい。

- (注1) 三瓶火山：出雲と石見の国境に位置する三瓶山は、10数万年前以降に繰り返し噴火活動を行った火山で、最新の活動期は3500～3700年前（縄文時代後期）である。
- (注2) 松井整司・井上多津男、1971：三瓶火山の噴出物と層序。地球科学、25、147-163。
- (注3) デイサイト：火山岩の一種。三瓶火山が噴出した溶岩はこれにあたる。
- (注4) 神戸川：出雲地方西部を流れる河川。その集水域に三瓶火山があり、活動期には火山噴出物が流域にもたらされた。
- (注5) 中中国地方建設局・島根県教育委員会、1998。志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5「板屋Ⅲ遺跡」
- (注6) 中中国地方建設局出雲工事事務所・島根県教育委員会、2000：斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ「三田谷Ⅰ遺跡」vol.2。

## 第6章 まとめ

古志本郷遺跡H I・II・J区の調査では、第4章で示したように、弥生時代前期から近世に至るまで多くの遺構・遺物が検出された。4章では遺構種別ごとに詳述したが、ここでは遺跡の変遷を通して、各時期の様相について述べてまとめとする。なお、ここで取り上げる遺構は、出土遺物で明確に時期が把握できたもの他に、切り合いや堆土等の状況から時期を推定したものも含めた。

### 弥生時代～古墳時代前期前半（第208図、第10表）

各調査区を通して検出した遺構は、松木I～II期(1)（前期中葉）、草田1・2期<sup>(1)</sup>（後期前葉～中葉）、草田4～7期（終末期～古墳時代前期前半）に大別でき、遺物は検出するものの中期、後期後葉の遺構は認められなかった。当遺跡の既往の調査で、中期後半～後期前半の集落が標高の高いD・E区（第3図参照）に偏在することが指摘されており<sup>(1)</sup>、立地選択には自然景観的な規制があったと考えられる。H区における終末期までの集落の欠落もこうした要因によると考えられる。

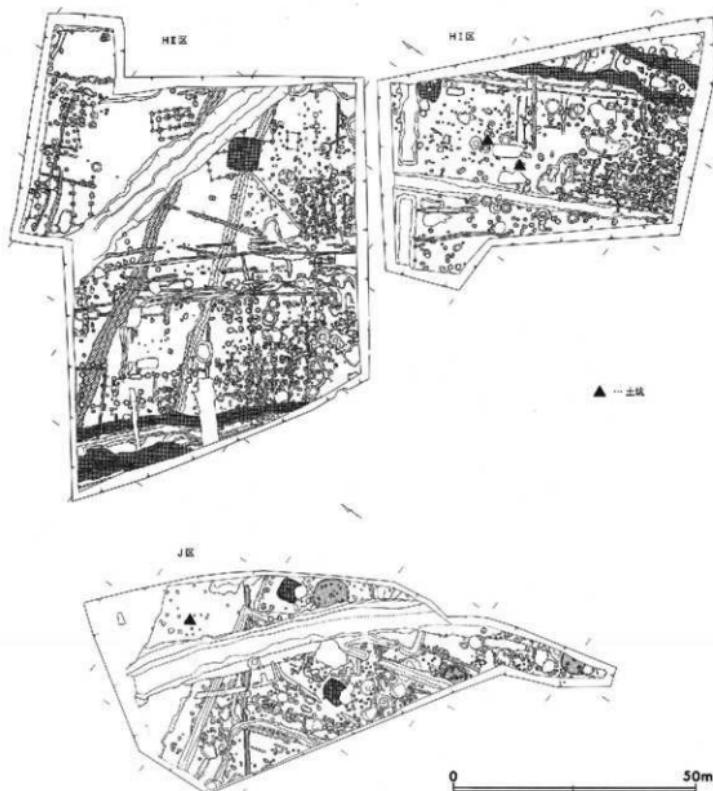
前期の遺構はH II区 S D 2 9が唯一だが、これに並行するS D 2 8も当該期の溝である可能性が高い。遺物は田畠遺跡<sup>(1)</sup>・浅柄遺跡<sup>(1)</sup>のはか、当遺跡の既往の調査でも出土している<sup>(1)</sup>が、遺構の時期を示すものとしては初めてで、これまでの古志遺跡群の集落としての上限（中期後半）が大きく遡る可能性が高まった。溝の性格は不明だが、數度の掘り返しが行われた痕跡が確認されたことから、ある程度管理されたものであったと考えられる。前章第1節の分析結果からは、S D 2 9内部に水はあったものの、水深は極めて低かったことが明らかとなっている。なお、当時の溝の周囲は草原の状態であったことも明らかとなり、耕作等は行われていなかつたようである。溝以外の遺構が皆無であることは、この時期の集落の立地が中期とは別の事情に因るものと考えられるが、溝に伴う集落本体が、遺跡の所在する微高地に存在することは十分に考えられ、今後の調査において留意すべき点である。

草田1～2期になると、比較的標高の高いJ区でも集落が営まれ、中期以降の生活域の拡大が窺えるが、レベルの低いH区までは及んでいない。隣接するK区では弥生時代中期から古墳時代前期前半にわたって継続的に機能したと考えられる大溝が調査されており<sup>(1)</sup>、当調査区では結果的には検出できなかったが、付近には中期以降の集落が継続的に営まれていたと考えられる。当調査区で検出した竪穴建物も、K区大溝の内側に位置すると考えられ、K区の調査結果を踏まえて再検討する必要がある。検出した遺構は、S I 0 3・0 6・0 7、S D 0 2・1 1である。最も古いS I 0 3は円形、その他はやや小規模な、円味を帯びた隅丸方形のもので、この時期に平面形・規模が変化するものも現れる。S D 0 2は前期の溝と同様に、直線的に現神戸川に交差するように延びていくと考えられる。非常に浅く、性格等については不明である。

草田4～7期になると、新たにH区にも展開するようになる。このうち、S D 0 7の出土遺物は2～3期のものも散見されるが、4～5期が主体で、この時期には完全に埋没すると考えられる。掘削時期は明確でなく、2～3期の遺構は確認されていないが、4～5期の直前段階には溝として機能した可能性はある。但し、今回の調査では溝が埋まる時期においてもS K 4 5が見られるだけで（S D 1 5・5 8・5 9は同時併存した可能性もある。）、集落が本格的に展開するのは草田6～

第10表 弥生～古墳時代前期前半の主な遺構一覧

遺構区	遺構	性質	時期	平置物・柱跡
J	SI03	竪穴住居	三田1～2期	円形・5／7
J	SI06	竪穴建物	三田2期	圓丸方形・2／4
J	SI07	竪穴建物	三田2期	圓丸方形・3／4
HII	SD01	竪穴建物	三田6期	圓丸方形・3／4
J	SD01	竪穴住居	三田6期	圓丸方形・3／4
J	SD04	竪穴住居	三田6期	圓丸方形・4／4
HII	SX10	竪穴建物	三田6期	圓丸方形・無し
J	SD05	竪穴建物	三田6期	圓丸方形・不明
J	SD02	竪穴建物	三田6期	圓丸方形・4／4
遺構区	遺構	性質	時期	備考
HII	SK45	土坑	三田5期	
J	SK48	土坑	三田6期	
HII	SK02	土坑墓か	三田7期	
HII	SD29	塚	1～2様式	
HII	SD28	塚	三田1期	
J	SD04-11	塚	三田1期	
HII	SD07	塚	三田4～5期	
HII	SD15	塚	三田6期	
HII	SD59	塚	三田6～7期	
HII	SD58	塚	三田7期	



第208図 弥生時代～古墳時代前期前半の遺構配置図 (1:1000)

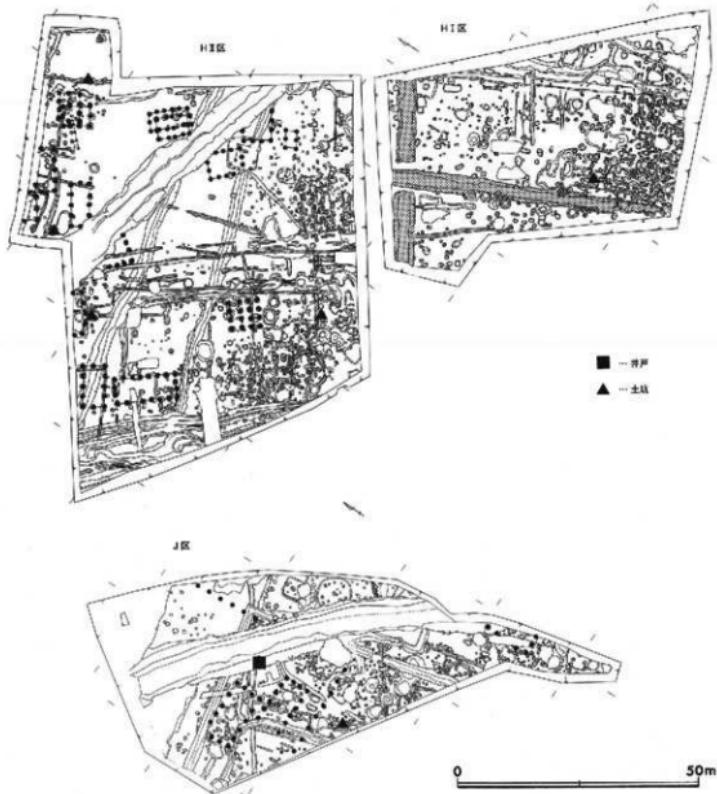
7期の段階である。SD15・58・59はいずれもこの時期に埋没する溝で、堅穴建物SX10、SI01はともにSD15・59がほとんど機能しなくなつた時期に営まれていたということになる。これらの溝は掘削時期が明らかでないため、SD07も含めて共存していたのか現状では判断しがたい。

#### 古墳時代中期後半～平安時代（第209図・第11表）

古墳時代前期後半～中期前半の遺構は検出されず、出雲平野の遺跡と同様に集落の断絶が認められるが、中期後半～平安時代末期までは遺構・遺物を検出している。J区については出雲5期までの様相が判然としない。

出雲1期頃の遺構は、HII区の赤彩土師器を伴うSD50が唯一である。集落としては疎らな状態であったと考えられる。

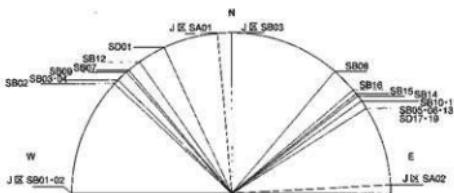
出雲3～4期では、HII区SK71・101等の土坑が見られ、前者から土製支脚や甌、甕等の



第209図 古墳時代中期後半～平安時代の遺構配置図 (1:1000)

第11表 古墳時代中期後半～平安時代の主な遺構一覧

遺構名	位置	性質	属性	周長	東西幅	南北幅	面積	特徴	目録
H II SK12 遺物	3×2.9m	6.7m	2.2m	22.3m	3m	3.7m	26.5m <sup>2</sup>	W	
H II SK9 遺物	3×2.7m	5.3m	1.8m	16.6m	3m	4.1m	20.1m <sup>2</sup>	W	
H II SK67 遺物等	3×2.4m	6.0m	1.0m	18.0m	3m	4.0m	22.8m <sup>2</sup>	W	
H II SK14 土葬墓	2×2.4m	5.3m	1.5m	12.8m	3m	3.5m	18.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK13 土葬墓	2×2.5m	5.0m	2.3m	12.8m	3m	4.5m	23.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK12 遺物	2×1.8m	4.8m	1.3m	10.8m	3m	3.0m	18.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK64 遺物	3×2.0m	6.2m	2.2m	20.0m	3m	4.0m	24.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK15 遺物	7×4.8m	9.0m	4.8m	33.6m	3m	4.8m	40.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK14 遺物	1×2.8m	7.8m	1.6m	11.7m	3m	3.7m	29.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK65 遺物	3×2.8m	6.8m	1.5m	22.0m	3m	3.8m	25.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK10 遺物	2×2.4m	4.8m	1.5m	14.4m	3m	3.8m	17.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK11 遺物(洗面器)	2×4.8m	12.0m	2.4m	31.2m	3m	4.8m	75.0m <sup>2</sup>	W	
H II SK18 遺物	4×2.0m	12.0m	2.0m	24.0m	3m	4.0m	48.0m <sup>2</sup>	W	近畿1～6期
H II SK19 遺物	2×2.0m	4.0m	1.5m	12.0m	3m	3.0m	18.0m <sup>2</sup>	W	近畿1～6期
J SD02 遺物等	3×5.0m	6.0m	3.0m	30.0m	3m	3.0m	54.0m <sup>2</sup>	W	7世紀後半～8世紀初期
J SD03 遺物等	3×5.0m	6.0m	3.0m	30.0m	3m	3.0m	54.0m <sup>2</sup>	W	7世紀後半～8世紀初期
J SA01 遺物	6m以上	9.2m	3.0m	27.6m	3m	3.7m	34.0m <sup>2</sup>	W	
J SA02 遺物	7.8m	9.3m	3.0m	30.0m	3m	3.7m	36.0m <sup>2</sup>	W	
遺構名	位置	性質	属性	周長	東西幅	南北幅	面積	特徴	目録
H II SK71 土葬墓	土葬墓	土葬墓							古墳1～6期
H II SK150 土葬	土葬墓	土葬墓							古墳1～6期
H II SK99 土葬	土葬墓	土葬墓							古墳1～6期
J SK37 石井戸	石井戸	石井戸							古墳1～6期
J SK43 土井戸	土井戸	土井戸							古墳1～6期
H II SK03 土葬墓	土葬墓	土葬墓							古墳1～6期
H II SK14 土葬墓	土葬墓	土葬墓							古墳1～6期
H II SB01 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB02 土葬	土葬	土葬							古墳1～6期
H II SB03 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB04 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB05 土葬	土葬	土葬							古墳1～6期
H II SB06 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB07 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB08 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB09 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB10 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB11 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB12 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB13 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB14 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB15 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB16 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB17 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期
H II SB18 土葬等	土葬等	土葬等							古墳1～6期



第210図 建物輪分布図

煮炊き具が一括出土している。当該期の明確な建物跡は認識できなかったが、これらの遺物は付近で集落が営まれていたことを示唆するものである。2基の土坑は離れた配置になっており、生活領域内は疎らな状況であったと推測される。

山雲4～6c期になるとH II区SK23、SD17・19、H II区SK99、SD52・54等がある他、掘立柱建物SB11やSX14も出現する。J区でも、SD04・14が機能し、全般的に遺構が増加・多様化すると共にその領域も拡大する傾向にある。巻頭図版3では、周辺微高地上に「塚」・「ハカ」が点在した様子が見られることから、H II区のSX14も終末期古墳と見ることも可能だが、建物（群）のある区域と墓域を画する当該期の遺構は検出していない。墳墓として見た場合、ほぼ同時代と考えられる首長墓級の大槻古墳<sup>10</sup>や周辺の横穴墓群等との関係、被葬者像、建物群との関係など、この時期の墓制・社会構造を考える上で多くの問題が派生し、今後の検討課題となろう。

7世紀後半以降になると一転して、J区で横列を伴うと考えられる掘立柱建物SB01・02が相次いで建てられ、SK37も現れる。SB03は遺物が無く、時期判断の根拠を欠くが、規模・建物配備から当該期の建物である可能性が極めて高い。J区がこのような状況である一方で、H区ではSD17・19は機能しなくなり、替わってSD01がつくられたと考えられる。

10世紀以降になるとJ区で台付皿が一括廃棄された土坑が見られるだけで、生活痕跡は激減する。こうした古代末期の様相は既往の調査区の様相とも一致しているが、当遺跡の南にほど近い出畑遺跡では10～12世紀の遺構・遺物がまとまって確認されており、集落が衰退傾向にあったと